ISSN 1882-9775

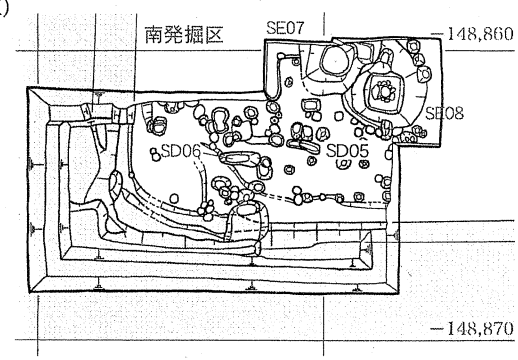
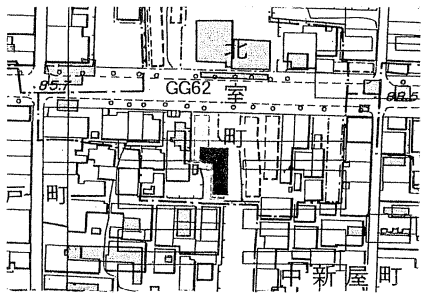
# 奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 18（2006）年度

奈良市教育委員会

2009

奈良市埋蔵文化財調査年報　平成18（2006）年度　正誤表

<table>
<tr><th>頁</th><th>位置</th><th>訂　正　内　容</th></tr>
<tr><td>6</td><td>一覧表<br>弥生時代<br>（条坊地点）</td><td>（誤）
<table><tr><th>遺構番号</th><th>備考</th></tr><tr><td>ＳＤ03</td><td></td></tr><tr><td>ＳＤ04</td><td>ＳＤ1015よりも古い。</td></tr></table>
（正）
<table><tr><th>遺構番号</th><th>備考</th></tr><tr><td>ＳＤ03</td><td>ＳＤ1015よりも古い。</td></tr><tr><td>ＳＤ04</td><td></td></tr></table></td></tr>
<tr><td>55</td><td>一覧表</td><td>（誤）
<table><tr><th rowspan="2">遺構番号</th><th>桁行全長</th><th>梁行全長</th><th colspan="2">柱間寸法（m）</th></tr><tr><th>（m）</th><th>（m）</th><th>桁行</th><th>梁行</th></tr><tr><td>ＳＢ01</td><td>6</td><td>—</td><td>3等間</td><td>—</td></tr></table>
（正）
<table><tr><th rowspan="2">遺構番号</th><th>桁行全長</th><th>梁行全長</th><th colspan="2">柱間寸法（m）</th></tr><tr><th>（m）</th><th>（m）</th><th>桁行</th><th>梁行</th></tr><tr><td>ＳＢ01</td><td>—</td><td>6</td><td>—</td><td>3.0等間</td></tr></table></td></tr>
<tr><td>72</td><td>遺構平面図</td><td>（誤）　Ａ．平安末～室町期の遺構<br>ＳＤ05写植欠落<br>（正）

</td></tr>
<tr><td>73</td><td>一覧表</td><td>（誤）
<table><tr><th>遺構番号</th><th>平面形</th></tr><tr><td>ＳＤ06</td><td>南北溝</td></tr></table>
（正）
<table><tr><th>遺構番号</th><th>平面形</th></tr><tr><td>ＳＤ06</td><td>東西溝</td></tr></table></td></tr>
<tr><td>90</td><td>位置図</td><td>（誤）　ＧＧ62<br>発掘区位置<br>（正）

</td></tr>
<tr><td>93</td><td>一覧表</td><td>（誤）
<table><tr><th>遺構番号</th></tr><tr><td>ＳＥ06</td></tr><tr><td>ＳＫ05</td></tr></table>
（正）
<table><tr><th>遺構番号</th></tr><tr><td>ＳＥ05</td></tr><tr><td>ＳＫ06</td></tr></table></td></tr>
<tr><td>94</td><td>出土土器図</td><td>（誤）　ＧＧ第62次調査　ＳＫ05・ＳＥ06　出土土器（1/4）<br>（正）　ＧＧ第62次調査　ＳＥ05・ＳＫ06　出土土器（1/4）</td></tr>
<tr><td>167</td><td>図1</td><td>（誤）　（1/4，15Ａ薄拓本は法隆寺蔵品）<br>（正）　（1/4，15Ａ薄拓本は法隆寺出土品，34Ａ・46Ａは奈文研所蔵）</td></tr>
<tr><td>168</td><td>図2</td><td>（誤）　（1/4）<br>（正）　（1/4，60Ｂは奈文研所蔵）</td></tr>
<tr><td>170</td><td>図4</td><td>（誤）　（1/4）<br>（正）　（1/4，170Ａ・175Ａは大安寺蔵）</td></tr>
<tr><td>172</td><td>図5</td><td>（誤）　（1/4）<br>（正）　（1/4，220Ａｂ・235Ａａは奈文研所蔵）</td></tr>
<tr><td>173</td><td>図6</td><td>（誤）　（1/4）<br>（正）　（1/4，242Ａ・242Ｂは奈文研蔵，246Ａは大安寺蔵）</td></tr>
</table>

# 奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 18（2006）年度

奈良市教育委員会

2009

1：奈良山第 51 号窯第 1 次調査　瓦窯全景（北東から）【本文 98 ～ 108 頁】

2：平城京跡（左京三条六坊十坪）
・奈良町遺跡の調査（第 559 次）
SK662 出土赤膚焼（上）
3：同 SK666 出土
あられ酒関連遺物（下）
【本文 39 ～ 51 頁】

4：杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊一坪）の調査（第 563 次）

井戸ＳＥ 09 出土　ものさし　【本文 57 ～ 59 頁】

# 例　言

1．本書は、平成18年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と埋蔵文化財調査センター紀要を収録したものである。ただし、平成18年度に実施した調査のうち、水間遺跡第9次・別所大谷口遺跡第1・2次調査については、『県営圃場整備事業田原東地区における埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ－別所下ノ前・辻堂・大谷口　水間遺跡－』奈良市教育委員会　2007で既に報告しており、平城京跡第549次・第553次・第565次・第569次調査については次年度報告の予定であるため、本書には収録しない。平成19年度に実施した平城京跡第581次調査の成果の一部については本書に収録した。

2．平成18年度の埋蔵文化財調査に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局　社会教育部
　文化財課
　　課　長　　池田みどり
　　課長補佐　森下　惠介

　埋蔵文化財調査センター
　　所　長　　川本恭久
　　調査第一係　係長　森下浩行　技術吏員　鐘方正樹　秋山成人　松浦五輪美
　　宮﨑正裕　原田憲二郎　久保清子
　　山前智敬　大窪淳司
　　調査第二係　係長　三好美穂　技術吏員　安井宣也　武田和哉　中島和彦
　　久保邦江　池田裕英　原田香織
　　庶　務　係　係長　藤井雄二　事務吏員　山形和宏

3．発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4．各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。
ＨＪ　平城京跡　　ＤＡ　大安寺旧境内　　ＧＧ　元興寺旧境内　　ＳＤ　西大寺旧境内
ＴＩ　東市跡推定地　　ＮＲ　奈良町遺跡　　ＨＫ　東紀寺遺跡　　ＨＹ　瓢箪山古墳隣接地
ＢＯ　別所大谷口遺跡　　ＢＳ　別所下ノ前遺跡　　ＢＴ　別所辻堂遺跡　　ＭＭ　水間遺跡
ＮＡＲＡ51　奈良山第51号窯

5．古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6．本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

ＳＡ（柱列・塀）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（溝・濠・溝状遺構・暗渠）、ＳＥ（井戸）、ＳＦ（道路）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（その他）

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7．本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査次数の前に下記の略記号を使用し表記した。

国　―　独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）

県　―　奈良県教育委員会　および　奈良県立橿原考古学研究所

市　―　奈良市教育委員会

女子大　―　国立大学法人　奈良女子大学

8．本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代　軒　瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良市教育委員会　1996

土　器：『平城宮発掘調査報告書ＸＩ』 奈良国立文化財研究所　1982

古墳時代　須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

埴　輪：川西宏幸「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房　1988

弥生時代　土　器：奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』2003

9．発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」（1/2,500）を、また調査地位置図については、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図（1/25,000）を利用した。

10. 本文中において示した位置の表示値は、測量法改正（2002 年４月）以前の平面直角国土座標体系第Ⅵ系の数値である。なお、一覧表及び平面・土層図等で記載の際は、ｍを省略した。

11. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

12. 第Ⅰ・Ⅲ章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した奈良市教育委員会教育総務部文化財課職員と平成 20 年度嘱託職員 大木　要、奈良大学大学院生 熊谷博志が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第Ⅱ章は分析機関の報告を再編集して構成した。第Ⅳ章は文化財課職員が執筆した紀要を掲載した。

13. 本書の編集は平成 20 年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下惠介、同主任 森下浩行・鐘方正樹の助言を得て、久保清子が担当した。

# 目　次

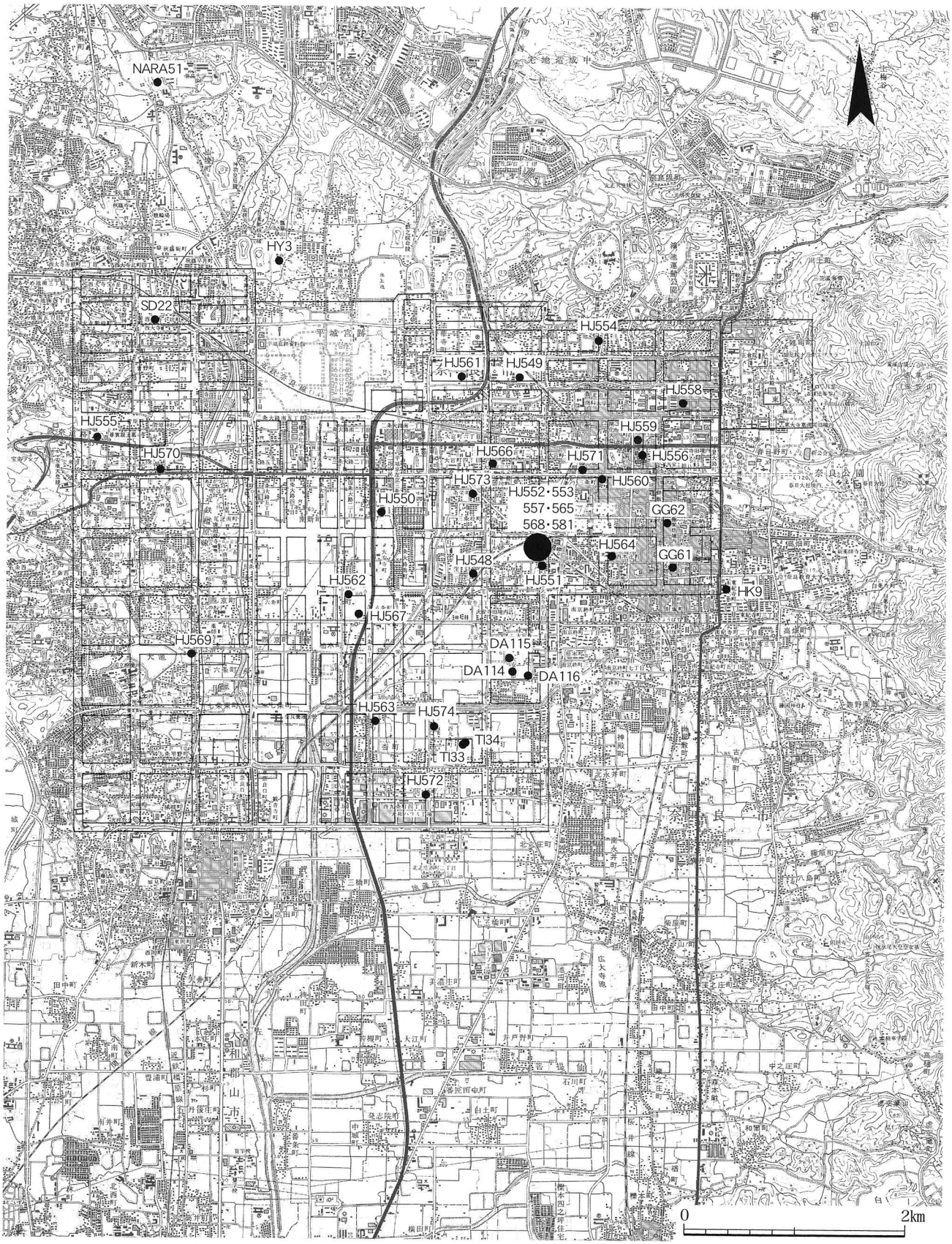
巻首カラー図版……Ⅰ～Ⅲ
例言・目次……ⅰ～ⅵ

**第1章　平成18年度埋蔵文化財調査概要報告**……1
1．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査……2
(1) 平城京跡（左京五条五坊二坪・東四坊大路）の調査 第552・581次……3
(2) 平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪・五条条間北小路）の調査 第557・568次……9
2．平城京跡（左京五条三坊十一坪）の調査 第548次……26
3．平城京跡（左京四条二坊四坪）の調査 第550次……27
4．平城京跡（左京五条四坊十四坪・東四坊大路）の調査 第551次……32
5．平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査 第554次……34
6．平城京跡（右京四条三坊十坪）の調査 第555次……35
7．平城京跡（左京三条六坊十一坪）・奈良町遺跡の調査 第556次……36
8．平城京跡（左京二条七坊五坪）・奈良町遺跡の調査 第558次……37
9．平城京跡（左京三条六坊十坪）・奈良町遺跡の調査 第559次……39
10．平城京跡（左京四条五坊十六坪・東五坊大路・三条大路）の調査 第560次……52
11．平城京跡（左京二条三坊十坪）の調査 第561次……54
12．平城京跡（左京一坊・五条大路）の調査 第562次……56
13．杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊一坪）の調査 第563次……57
14．平城京跡（左京五条六坊二坪）の調査 第564次……60
15．平城京跡（左京三条四坊四坪）の調査 第566次……61
16．平城京跡（左京六条一坊十五坪）の調査 第567次……63
17．平城京跡（西三坊坊間路）の調査 第570次……64
18．平城京跡（左京三条五坊十二坪）の調査 第571次……66
19．平城京跡（左京九条二坊十五坪・東二坊大路）の調査 第572次……68
20．平城京跡（左京四条三坊十五坪）の調査 第573次……69
21．平城京跡（左京八条三坊二坪）の調査 第574次……71
22．平城京跡（東市跡推定地）の調査 第33・34次……75
23．史跡大安寺旧境内の調査……78
(1) 東塔地区の調査 第114次……79
(2) 塔院地区の調査 第115次……87
(3) 花園院地区の調査 第116次……89
24．元興寺旧境内の調査……90
(1) 小塔院地区の調査 第61次……91
(2) 僧坊推定地区の調査 第62次……92
25．西大寺旧境内の調査（西面回廊推定地区） 第22次調査……95
26．東紀寺遺跡の調査 第9次調査……96
27．史跡瓢箪山古墳隣接地の調査 第3次調査……97
28．奈良山第51号窯の調査……98
29．平成18年度実施 試掘調査一覧……109
30．平成18年度実施 工事立会一覧……110

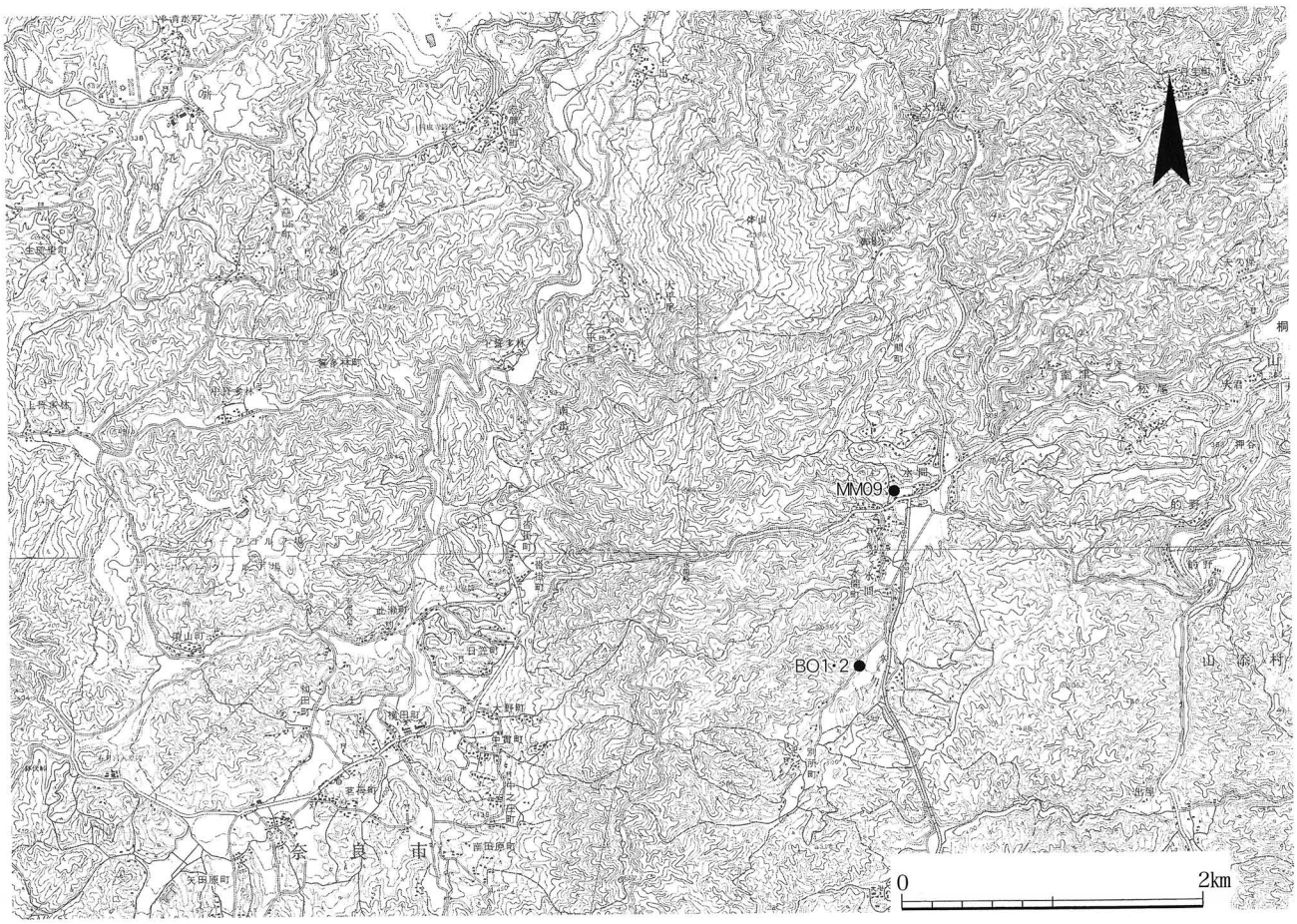
**第2章　自然科学分析報告**……119
1．平城京第552次調査における自然科学分析……121
2．平城京第557次調査における自然科学分析……127
3．平城京第563次調査における自然科学分析……134
4．平城京第557次調査出土金属製品の成分分析……137

**第3章　平成18年度保存活用事業報告**……139

**第4章　紀要**……147
1．率川古墳と外京条坊および出土埴輪……149
2．法華寺垣内古墳とその埴輪……159
3．大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦……166




平成 18 年度　発掘調査位置図Ａ　1/50,000




平成 18 年度　発掘調査位置図 B　1/50,000

# 平成 18(2006) 年度　奈良市教育委員会実施　埋蔵文化財発掘調査一覧

| No. | 調査次数 | 遺　跡　名 | 調　査　地 | 調査期間 | 調査面積 | 担当者 | 事業者 | 事業名 | 事業区分 | 届出(申請)番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | HJ548 次 | 平城京跡（左京五条三坊十一坪） | 恋の窪東町 156-6 | H18.4.11～H18.4.26 | 101㎡ | 池田裕 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 17. 3265 |
| 2 | HJ549 次 | 平城京跡（左京二条四坊十坪） | 法蓮町 364 他 | H18.4.18～H18.5.16 | 170㎡ | 原田憲 | 奈良市長 | 仮称法蓮南北線道路新設事業 | 公共 | H 18. 3006 |
| 3 | HJ550 次 | 平城京跡（左京四条二坊三坪） | 四条大路一丁目 7-1 他 | H18.5.15～H18.6.21 | 312㎡ | 武田 | 良家㈱ | 店舗付事務所新築 | 原因者 | H 17. 3107 |
| 4 | HJ551 次 | 平城京跡（左京五条四坊十四坪・東四坊大路） | 大安寺六丁目 782-1 他 | H18.5.15～H18.5.29 | 137㎡ | 安井 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 17. 3408 |
| 5 | HJ552 次 | 平城京跡（左京五条五坊二坪・東四坊大路） | 大森町 71-1 他 | H18.6.1～H18.8.29 | 868㎡ | 久保清 | 奈良市長 | ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理通常事業 | 公共 | H 12. 3145 |
| 6 | HJ553-1 次 | 平城京跡（左京五条四坊十五坪） | 大森町 80 他 | H18.6.1～H18.12.28 | 2,500㎡ | 宮崎・山前 | 奈良市長 | ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理連続立体交差関連公共施設整備事業 | 公共 | H 12. 3145 |
| 7 | HJ553-2 次 | 平城京跡（左京五条四坊十五坪） | 大森町 81 他 | H19.2.5～H19.3.1 | 150㎡ | 宮崎 | | | | |
| 8 | HJ554 次 | 平城京跡（左京二条五坊北郊） | 法蓮町 930-1 他 | H18.6.8～H18.6.14 | 34㎡ | 池田裕 | エヌ・ティ・ティ都市開発㈱ | 宅地造成 | 原因者 | H 17. 3470 |
| 9 | HJ555 次 | 平城京跡（右京四条三坊十坪） | 宝来町 948-1 他 | H18.6.12～H18.6.27 | 77㎡ | 安井 | 大和工商リース㈱ | 店舗付事務所新築 | 原因者 | H 17. 3442 |
| 10 | HJ556 次 | 平城京跡（左京三条六坊十一坪）・奈良町遺跡 | 小西町 24-1 他 | H18.6.19～H18.6.30 | 62㎡ | 池田裕 | 個人 | 賃貸住宅兼個人住宅新築 | 原因者・緊急 | H 17. 3428 |
| 11 | HJ557 次 | 平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪・五条条間北小路） | 大森町 127 他 | H18.7.10～H18.12.15 | 1,626㎡ | 原田憲 | 奈良市長 | ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理臨時交付金事業 | 公共 | H 12. 3145 |
| 12 | HJ558 次 | 平城京跡（左京二条七坊五坪）・奈良町遺跡 | 南半田西町 8 | H18.7.10～H18.8.7 | 131㎡ | 安井 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 18. 3005 |
| 13 | HJ559 次 | 平城京跡（左京三条六坊十坪）・奈良町遺跡 | 高天町 1-3 他 | H18.8.16～H19.1.31 | 810㎡ | 中島・池田裕 | ㈱南都銀行 | 店舗新築 | 原因者 | H 17. 3305 |
| 14 | HJ560 次 | 平城京跡（左京四条五坊十六坪・東五坊大路・三条大路） | 下三条町 28-1 他 | H18.8.21～H18.9.24 | 110㎡ | 武田 | ㈱津多家 | 店舗付共同住宅新築 | 原因者 | H 18. 3046 |
| 15 | HJ561 次 | 平城京跡（左京二条三坊十坪） | 法華寺町 28 他 | H18.9.4～H18.9.12 | 173㎡ | 安井 | ㈱八州エイジェント | 宅地造成 | 原因者 | H 18. 3108 |
| 16 | HJ562 次 | 平城京跡（左京一坊五条大路） | 柏木町 509-1 | H18.9.19～H18.10.7 | 173㎡ | 安井 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 18. 3119 |
| 17 | HJ563 次 | 杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊一坪） | 杏町 386 他 | H18.10.10～H18.11.30 | 279㎡ | 久保清 | 奈良市長 | 第 11 号（杏中）市営住宅建替事業 | 公共 | H 18. 3131 |
| 18 | HJ564 次 | 平城京跡（左京五条六坊二坪） | 西木辻町 5-2 | H18.10.16～H18.11.1 | 200㎡ | 武田 | 奈良市長 | 済美小学校校舎建設事業 | 公共 | H 17. 3180 |
| 19 | HJ565 次 | 平城京跡（左京五条四坊十五坪） | 大森町 85 他 | H18.10.30～H19.3.16 | 1,380㎡ | 山前 | 奈良市長 | ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理都市再生事業 | 公共 | H 12. 3145 |
| 20 | HJ566 次 | 平城京跡（左京三条四坊四坪） | 大宮町三丁目 203 | H18.11.7～H19.1.30 | 720㎡ | 武田 | JR西日本不動産開発㈱・野村不動産㈱ | マンション新築 | 原因者 | H 18. 3174 |
| 21 | HJ567 次 | 平城京跡（左京六条一坊十五坪） | 柏木町 451-2 | H18.12.4～H18.12.7 | 30㎡ | 三好・久保邦 | ㈱ホクシン | 宅地造成 | 原因者 | H 18. 3274 |
| 22 | HJ568 次 | 平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪・五条条間北小路） | 大森町 131 他 | H19.1.16～H19.3.14 | 400㎡ | 原田憲・久保清 | 奈良市長 | ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理関連公共施設整備事業 | 公共 | H 12. 3145 |
| 23 | HJ569 次 | 平城京跡（右京七条三坊一坪・西二坊大路） | 六条一丁目 452-3 | H19.1.9～H19.1.22 | 25㎡ | 秋山 | 奈良市長 | 仮称西ノ京六条線道路新設工事 | 公共 | H 18. 3232 |
| 24 | HJ570 次 | 平城京跡（西三坊坊間路） | 宝来二丁目 809－1 | H19.1.15～H19.1.31 | 101㎡ | 安井 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 18. 3285 |
| 25 | HJ571 次 | 平城京跡（左京三条五坊十二坪） | 油阪地方町 8-1・油阪町 2-3 他 | H19.2.5～H19.2.13 | 100㎡ | 中島 | 個人 | 店舗新築 | 原因者 | H 18. 3220 |
| 26 | HJ572 次 | 平城京跡（左京九条二坊十五坪） | 西九条町二丁目 11-5 他 | H19.2.13～H19.2.26 | 112㎡ | 安井 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 18. 3202 |
| 27 | HJ573 次 | 平城京跡（左京四条三坊十五坪） | 三条栄町 198-1 他 | H19.2.26～H19.3.23 | 340㎡ | 武田 | ㈱ユニホー | マンション新築 | 原因者 | H 18. 3305 |
| 28 | HJ574 次 | 平城京跡（左京八条三坊二坪） | 西九条町一丁目 2-6 他 | H19.3.13～H19.3.30 | 186㎡ | 安井・中島 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 18. 3287 |
| 29 | ＴＩ 33 次 | 平城京跡（東市跡推定地） | 東九条町 440-1 の一部他 | H18.10.10～H18.11.1 | 204㎡ | 安井 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 18. 3142 |
| 30 | ＴＩ 34 次 | 平城京跡（東市跡推定地） | 東九条町 442-1 の一部 | H18.11.27～H18.12.22 | 122㎡ | 安井 | 個人 | 共同住宅新築 | 原因者 | H 18. 3260 |
| 31 | DA114 次 | 史跡大安寺旧境内 | 東九条町 1322 他 | H18.10.27～H18.12.27 | 370㎡ | 松浦・秋山 | 奈良市教育委員会教育長 | 史跡大安寺旧境内保存整備事業 | 公共 | H18. 1031 |
| 32 | DA115 次 | 史跡大安寺旧境内 | 東九条町 1316 | H18.12.4～H18.12.6 | 5㎡ | 原田香 | (宗)八幡神社 | 神社施設改修 | 緊急 | H18. 1060 |
| 33 | DA116 次 | 史跡大安寺旧境内 | 東九条町 1373-4 | H19.2.19～H19.2.28 | 10㎡ | 池田裕 | 個人 | 個人住宅新築 | 緊急 | H18. 1078 |
| 34 | GG61 次 | 元興寺旧境内 | 西新屋町 43 | H18.7.10～H18.7.21 | 27㎡ | 武田 | 個人 | 個人住宅新築 | 緊急 | H18. 3028 |
| 35 | GG62 次 | 元興寺旧境内 | 北室町 7-1 | H19.2.26～H19.3.30 | 90㎡ | 池田裕 | 個人 | 個人住宅新築 | 緊急 | H18. 3349 |
| 36 | SD22 次 | 西大寺旧境内 | 西大寺小坊町 348-18 | H18.5.29～H18.6.1 | 3㎡ | 池田裕 | 個人 | 個人住宅新築 | 緊急 | H17. 3377 |
| 37 | HK9 次 | 東紀寺遺跡 | 東紀寺町一丁目 50-1 | H18.9.14～H18.9.27 | 50㎡ | 秋山 | 市立奈良病院 | 市立奈良病院リニアック棟新築工事 | 原因者 | H18. 3122 |
| 38 | HY3 次 | 史跡瓢箪山古墳隣接地 | 佐紀町 3241-3 | H18.9.25～H18.9.29 | 11㎡ | 池田裕 | 個人 | 個人住宅新築 | 緊急 | H17. 3138 |
| 39 | ＮＡＲＡ 51-1 次 | 奈良山第51号窯 | 秋篠町 1546-1 の一部他 | H18.5.9～H18.6.30 | 147㎡ | 中島 | 三和住宅㈱ | 宅地造成 | 原因者 | H17. 3297 |
| 40 | MM9 次 | 水間遺跡 | 水間町 1052 他 | H18.9.12～H18.12.8 | 805㎡ | 鐘方・大窪 | 奈良県北部農林振興事務所長 | 県営ほ場整備事業（田原東地区） | 原因者 | H13. 3153 |
| 41 | BO 1 次 | 別所大谷口遺跡 | 別所町 200 他 | H18.5.22～H18.6.28 | 941㎡ | 鐘方・大窪 | 奈良県北部農林振興事務所長 | 県営ほ場整備事業（田原東地区） | 原因者 | H13. 3153 |
| 42 | BO 2 次 | 別所大谷口遺跡 | 別所町 199 | H18.6.29～H18.9.5 | 800㎡ | 鐘方・大窪 | 奈良県北部農林振興事務所長 | 県営ほ場整備事業（田原東地区） | 原因者 | H13. 3153 |

# 第　1　章　　平成18年度埋蔵文化財調査概要報告

# 1．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査
# 平城京跡（左京五条四坊・五条五坊）の調査

奈良市教育委員会では、平成13年度からＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内（総面積14.6万㎡）の発掘調査を実施しており、平成17年度までの調査面積は、11箇所で計6,741㎡である。

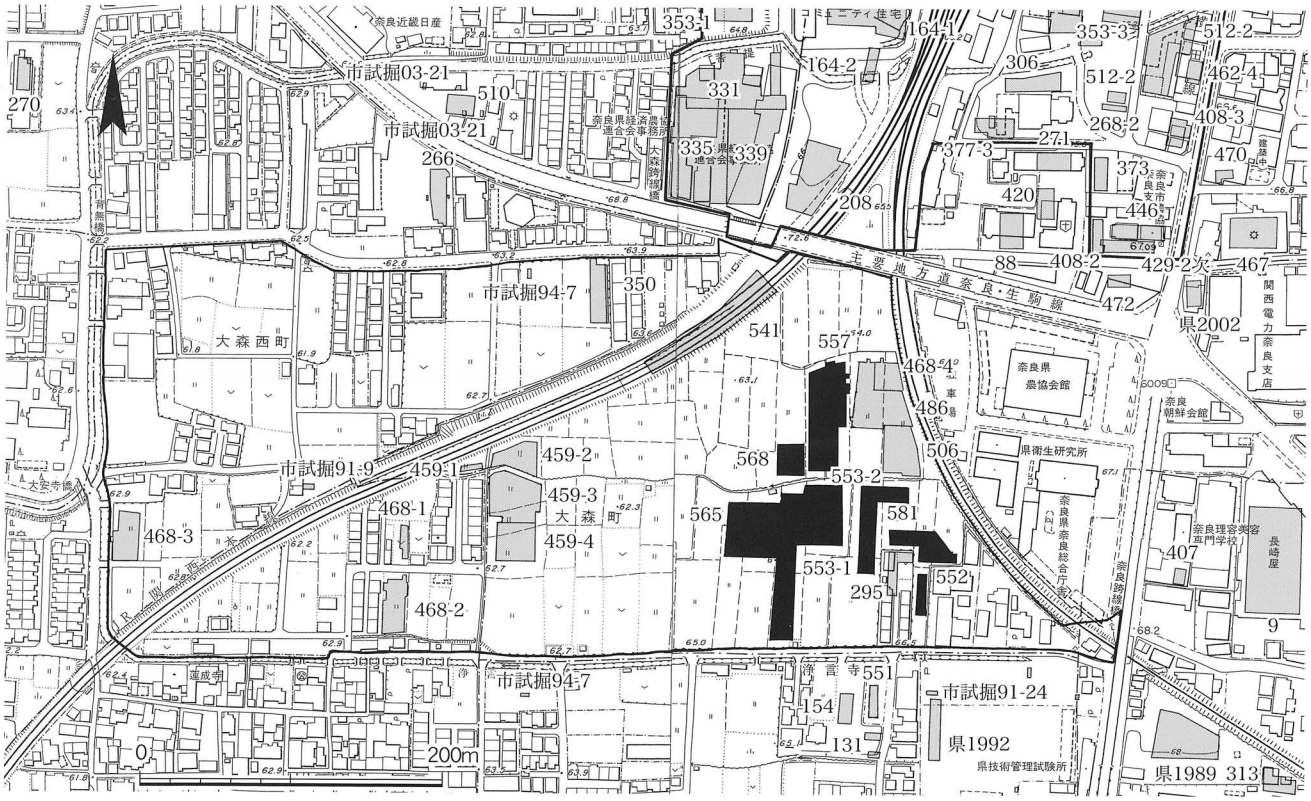
平成18年度は、平城京の条坊復原では、左京五条四坊の北半と左京五条五坊の範囲において発掘調査を実施した。調査位置は下記一覧表、位置図の通りである。平成17年度事業の繰越分として6,524㎡の調査を行い、平成18年度事業に係わる発掘調査として、連続立体交差関連公共施設整備事業で400㎡、計6,924㎡の調査を行った。このうち、今回報告する調査は、左京五条五坊二坪及び東四坊大路にあたるＨＪ第552次調査と、左京五条四坊十五・十六坪及び五条条間北小路にあたるＨＪ第557・568次調査である。

なお、平成19年度に実施したＨＪ第581次調査の一部が左京五条五坊二坪に含まれることから、その成果もあわせて報告する。上記以外の平成18年度に実施した調査については、今後報告する予定である。

報告に用いる遺構番号は、当事業地内で設定している番号であり、条坊遺構以外については基本的に坪ごとの通し番号とし、古墳時代以前の遺構には２桁を、奈良時代以降のものには３桁以上の番号を用いた。

平成18年度　ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内　発掘調査一覧表

| 遺　跡　名 | 調査次数 | 事　業　名 | 調　査　地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査担当者 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平城京跡（左京五条五坊二坪、東四坊大路） | ＨＪ第552次 | 通常事業 | 大森町71-1他 | H18.6.1～8.29 | 868㎡ | 久保清 |
| 平城京跡（左京五条四坊十五坪） | ＨＪ第553-1次 | 連続立体交差関連公共施設整備事業 | 大森町80他 | H18.6.1～12.28 | 2,500㎡ | 宮崎・山前 |
| | ＨＪ第553-2次 | | 大森町81他 | H19.2.5～3.1 | 150㎡ | 宮崎 |
| 平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪、五条条間北小路） | ＨＪ第557次 | 臨時交付金事業 | 大森町127他 | H18.7.10～12.15 | 1,626㎡ | 原田憲 |
| 平城京跡（左京五条四坊十五坪） | ＨＪ第565次 | 都市再生事業 | 大森町85他 | H18.10.30～H19.3.16 | 1,380㎡ | 山前 |
| 平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪、五条条間北小路） | HJ第568次 | 連続立体交差関連公共施設整備事業 | 大森町131他 | H19.1.16～3.14 | 400㎡ | 原田憲・久保清 |




ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内　発掘調査位置図　(1/5,000)

# (1) 平城京跡（左京五条五坊二坪・東四坊大路）の調査　第552・581次

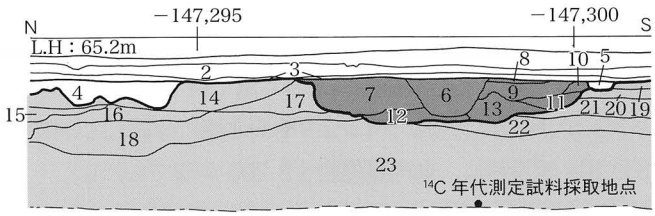
## Ⅰ　はじめに

調査地は、事業地の東端、平城京の条坊復原では左京五条五坊二坪の西端及び東四坊大路にあたる。これまでに、二坪内では2箇所において調査を実施しており、南発掘区の西隣で平成6年度に実施したＨＪ第295次調査では、東四坊大路東側溝の他、弥生時代の土坑、弥生時代後期～古墳時代初頭の流路を検出している。坪の北西隅部分で、平成15年度に実施したＨＪ第506次調査では、東四坊大路、五条条間北小路、宅地内素掘りの溝等を検出している。平成18年度はこれらの成果を基に、東四坊大路及び二坪内の様相、さらに弥生時代の遺構の有無を確認することを目的として、南北2箇所、計868㎡の発掘区を設定し、ＨＪ第552次調査を実施した。

なお、平成19年度に隣接地で実施したＨＪ第581次調査の二坪並びに東四坊大路東半部分の成果についても今回あわせて報告する。

## Ⅱ　基本層序

調査地は、東から西へと緩やかに低くなる沖積地上に位置し、その基本的な層序は、耕作土である黒灰色土の直下または、耕作土の下に灰色砂質土、灰茶色砂質土が堆積し、現地表下0.2～0.4ｍで黄褐色粘土、灰褐色砂、明燈灰色細砂の地山となる。ＨＪ第552次調査南発掘区南半では、灰色砂質土の下にはさらに灰茶色砂質土、暗褐色粘砂土が堆積し、現地表下0.3～0.4ｍで黄褐色粘土の地山となる。遺構の検出はすべて地山上面で行った。地山上面は北西に向かってやや下がっており、その標高は、ＨＪ第552次調査北発掘区東端で64.6ｍ、北発掘区西端及びＨＪ第581次発掘区東端で64.3ｍ、ＨＪ第552次調査南発掘区で64.6ｍである。




1　黒灰色土（耕作土）
2　灰色砂質土（旧耕作土）
3　灰色粘砂土（旧耕作土）
4　茶褐色土
5　灰色粘質土
6　黄灰色砂と灰色土の混合土
7　暗灰褐色シルト
8　黄灰色粘砂土
9　暗褐色粘土
10　灰茶褐色粘土
11　暗灰色シルト
12　灰色粗砂
13　淡灰色砂
14　明橙灰色細砂
15　暗褐色シルトと灰色砂礫の混合土
16　黄褐色粘土と灰色細砂の混合土
17　橙灰色シルト
18　灰色細砂
19　茶褐色粘土
20　暗褐色シルト
21　黄褐色粘土
22　灰色礫
23　灰色砂礫

6～13は弥生時代の河川2埋土
14～23は縄文時代の河川埋土

0　5m

ＨＪ第552次調査　南発掘区東壁土層図（1/100）

ＨＪ第552次調査では、地山上面で河川2条（河川1・2）の堆積が認められた。河川1は北発掘区南東隅において、北東から南西方向に流れ、幅2.7～3.3ｍ、長さ11ｍ分を検出した。深さは0.7ｍ前後であり、埋土は、暗褐色粘土の上層と灰色粗砂の下層に大きく分かれ、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器、サヌカイト製石鏃・削器が出土した。河川2は南発掘区において、幅3.3～3.9ｍ、長さ4.5ｍ分を検出した。南発掘区西側のＨＪ第295次調査で検出している流路の上流部分にあたり、南東から北西方向に流れると考えられる。深さは0.7ｍ前後、埋土は河川1とほぼ同じで、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器、サヌカイト製楔形石器が出土した。河川1・2は埋土の堆積状況や出土遺物の時期がほぼ同じことから、一連の河川になる可能性が高い。

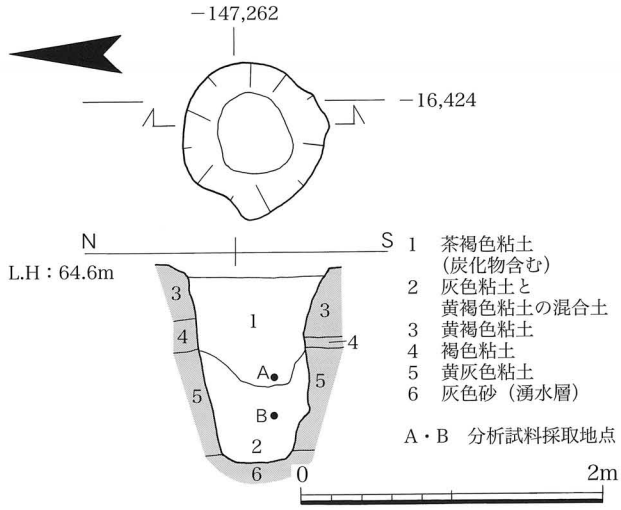
なお、弥生時代以前の旧地形と遺構の有無を確認するため、ＨＪ第552次調査北発掘区中央南半部分と南発掘区北半部分を掘り下げ、土層観察を行った結果、弥生時代以前の遺構及び遺物包含層はなく、奈良時代遺構面下0.8～1.0ｍで、河川埋土である灰色砂礫層が堆積していることが判明した。そこで、河川の埋没時期の下限を明らかにするため、灰色砂礫層内から流木をサンプル採取し、放射性炭素年代測定を実施したところ、補正$^{14}$C年代5,160±40（年.B.P.)、暦年代（cal B.C.）3,970年の値が得られた。(121頁参照)

## Ⅲ　検出遺構

検出遺構には、弥生時代と奈良時代のものがあり、各遺構の概要は、遺構一覧表に示す通りである。

以下、時代順で報告する。

**弥生時代の遺構**　溝10条、井戸2基、土坑6基がある。




1　茶褐色粘土（炭化物含む）
2　灰色粘土と黄褐色粘土の混合土
3　黄褐色粘土
4　褐色粘土
5　黄灰色粘土
6　灰色砂（湧水層）

A・B　分析試料採取地点

井戸ＳＥ02　平面・土層図（1/50）

溝及び土坑はいずれも削平されているために底部分のみが残る。埋土中からは後期後半から後期末頃の弥生土器・土製品が少量出土している。二坪内で検出したＳＥ01・02はいずれも素掘りの井戸で、埋土は大きく２層に分かれる。弥生時代後期後半から末頃の土器の他、ＳＥ01からは、鋳型外枠とみられる土製品片も１点出土した。

なお、当時の植生状況を明らかにするため、ＳＥ02埋土の一部をサンプル採取し、花粉分析を行った。（121～125頁参照）

**奈良時代以降の遺構**　東四坊大路及び同東側溝、掘立柱列３条、掘立柱建物８棟、溝５条、土坑12基がある。

以下、条坊遺構、二坪内の遺構の順で報告する。

**条坊遺構**　東四坊大路ＳＦ1013は、平成14年度に、二坪北側の五条四坊で実施したＨＪ第486次調査で、東西両側溝を検出しており、側溝心々間距離で17.4ｍの幅員があることが明らかになっている。ＨＪ第552次調査では東側溝ＳＤ1015を検出し、その西肩から５ｍ分の路面を検出した。ＨＪ第581次調査では、大路の両側溝を検出しており、五条四坊地点同様、側溝心々間距離が17ｍ前後であることが判明している。ＨＪ第552次調査南側のＨＪ第295次調査においても、東側溝を検出しているが、北側の調査地点よりも溝幅は狭く、浅い。今回は東側溝のみを報告する。

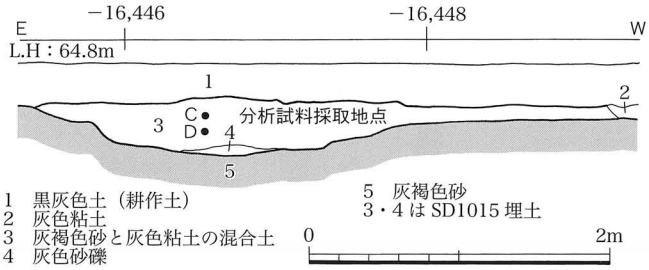
東側溝ＳＤ1015は路面側の西肩が宅地側の東肩に比べて、なだらかな傾斜をしている。最深部の標高はＨＪ第552次調査発掘区検出地点で64.0ｍ、ＨＪ第581次調査発掘区検出地点で63.6ｍと、北に向かって低くなっている。ＨＪ第552次調査で検出した側溝心の国土座標値は、Ｘ＝-147,266.25ｍ、Ｙ＝-16,446.70ｍで、調査地北側に位置するＨＪ第506次調査検出東側溝心（Ｘ＝-147,210.00ｍ、Ｙ＝-16,447.00ｍ）との振れは、国土方眼方位に対して（Ｎ0°18′20″Ｗ）となる。なお、東側溝西肩底では、溝状土坑ＳＫ603・604を検出している。

東側溝は、出土遺物から平安時代前半には廃絶しているとみられる。五条条間北小路南側溝心（Ｘ＝-147,217.45ｍ、Ｙ＝-16,440.00ｍ）から南に約38.5ｍ（約130小尺）に位置する地点では、埋土上面を南北幅1.0～1.2ｍ、東西幅2.9ｍの範囲において、８世紀の軒丸瓦（6313型式Ａ種）・軒平瓦（6572型式Ｄ種）及び丸瓦・平瓦と須恵器と少量の土師器の破片及び人頭大の石で敷き詰めている。これは廃絶後に完全に埋まりきっていない東側溝を渡るための整地と考えられる。

なお、当時の環境を調べるために東側溝堆積土の一部をサンプル採取し、花粉及び珪藻分析を行ったところ、珪藻密度については極めて低く、寄生虫卵は検出しなかった。（121～126頁参照）

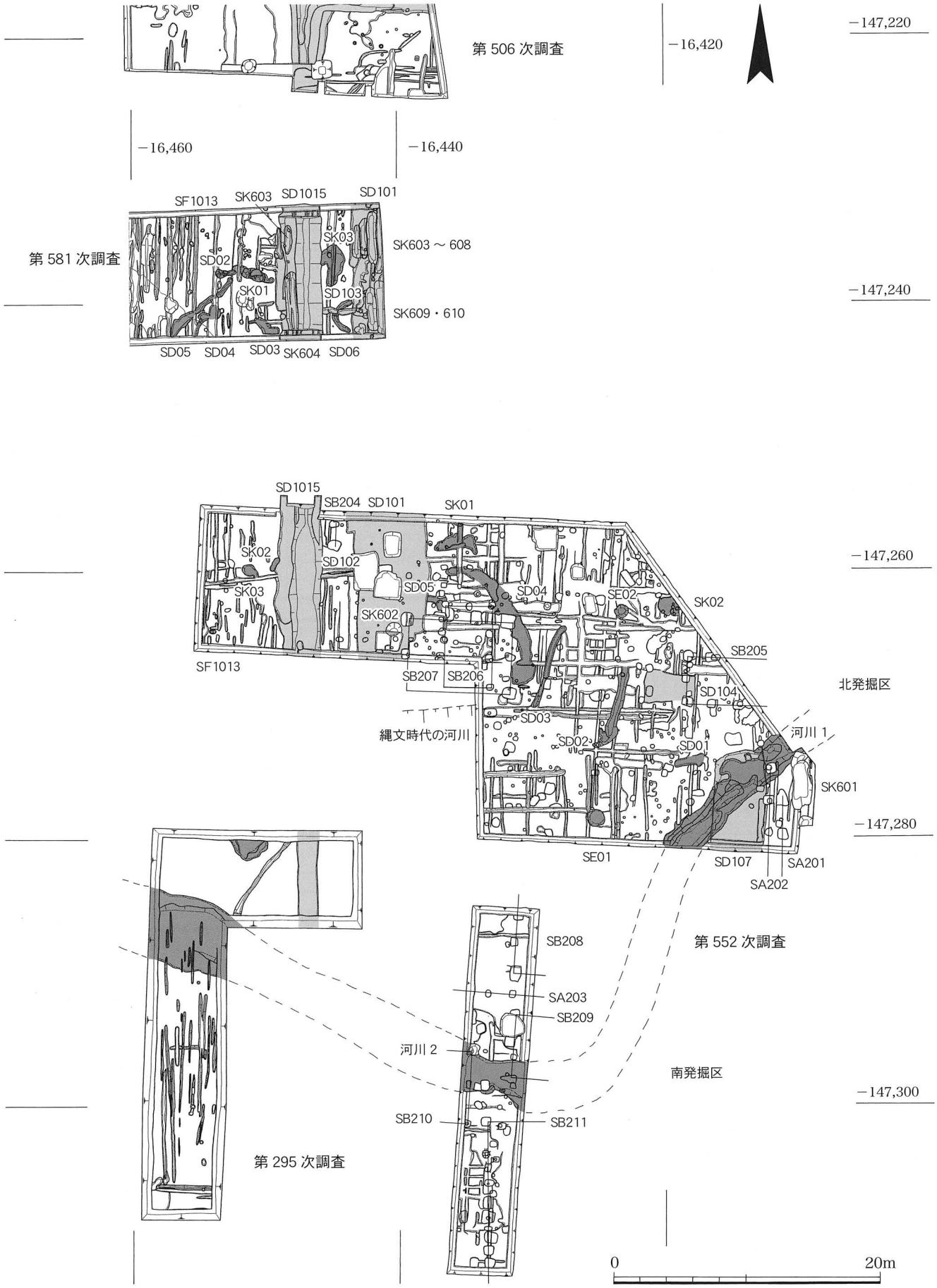
**二坪内の遺構**　二坪内では、掘立柱列・建物、溝、土坑がある。これらの遺構は重複関係から２時期以上の変遷がある。ＳＤ101は、東四坊大路東側溝ＳＤ1015の東側に沿う素掘りの南北溝である。両溝間は約2.4ｍあり、この間に二坪の西端をかぎる築地塀等の閉塞施設が想定される。ＳＤ101・1015に接続する東西溝ＳＤ102・103はその閉塞施設下を通す暗渠と考えられる。また、坪の南北1/3ライン付近で検出したＳＢ204は大路に開く門の可能性が考えられる。なお、ＳＤ101北端の溝底では、溝状土坑ＳＫ603～610を検出している。これらの土坑は、北から２基、４基、２基ずつが東西に並列するように掘られている。大路東側溝ＳＤ1015の西肩底でも、同様の溝状土坑ＳＫ603・604を検出している。これらは、大路に面した宅地端であることから、築地塀等の閉塞施設を構築するための土取りが目的で掘削されたと考える。ＳＤ101埋没後は東西棟建物ＳＢ207が建ち、土坑ＳＫ602が掘削される。

東西溝ＳＤ104と南北溝ＳＤ107は、宅地内を区画する溝と考える。ＳＤ104の溝心は、ＨＪ第506次調査の五条条間北小路南側溝心から南に約51ｍ（約170小尺）に位置している。ＳＤ107の西肩から大路東側溝ＳＤ1015東肩までの距離は29ｍ前後（約100小尺）、両側溝心々間では、約30.8ｍ（約104小尺）である。宅地の東西約1/4を区画すると思われる。また、溝ＳＤ107の北端は、第506次調査の五条条間北小路南側溝心から南に約56ｍ（約189小尺）で、坪の南北1/2ラインよりやや北側に位置している。ＳＤ104埋没後に、東西棟建物ＳＢ205が建てられる。




ＨＪ第552次調査　東四坊大路東側溝（ＳＤ1015）土層図1/50）

ＨＪ第552次調査　東四坊大路東側溝上面整地箇所（南から）




H J 第 295・506・552・581 次調査　遺構平面図（1/400）

## ＨＪ第552・581次調査　検出遺構一覧表（溝・井戸・土坑・道路）

| 遺構番号 | 掘形等 | | | 主な出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 平面形等 | 平面規模（m） | 深さ（m） | | |
| **弥生時代（条坊地点）** | | | | | |
| ＳＤ02 | 弧状溝？ | 長さ4.0以上、幅0.5～0.7 | 0.1～0.3 | 弥生土器甕・鉢 | ＳＫ01より古い。<br>埋没時期は弥生時代後期後半から古墳時代初頭。 |
| ＳＤ03 | 斜行溝？ | 長さ1.5以上、幅0.8 | 0.1 | 弥生土器片 | |
| ＳＤ04 | 斜行溝？ | 長さ3.0以上、幅0.7 | 0.2 | 出土遺物なし | ＳＤ1015より古い。 |
| ＳＤ05 | 斜行溝 | 長さ6.5以上、幅0.3～0.8 | 0.2 | 弥生土器甕・高杯 | 埋没時期は弥生時代後期後半。 |
| ＳＫ01 | 円形 | 径0.9 | 0.5 | 弥生土器甕・壷・高杯 | ＳＤ04より新しい。埋没時期は弥生時代後期後半。 |
| ＳＫ02 | 不整形 | 南北1.1×東西0.4 | 0.1 | 弥生土器甕 | 埋没時期は弥生時代後期後半。 |
| ＳＫ03 | 不整形 | 南北1.0×東西1.3 | 0.05 | 弥生土器壷 | 〃 |
| **弥生時代（二坪地点）** | | | | | |
| ＳＤ01 | 斜行溝 | 長さ2.3、幅0.6 | 0.05 | 弥生土器高杯 | 埋没時期は弥生時代後期。 |
| ＳＤ02 | 斜行溝 | 長さ6.0以上、幅0.6～1.0 | 0.2 | 弥生土器甕・壷・高杯 | 埋没時期は弥生時代後期末頃。 |
| ＳＤ03 | 斜行溝 | 長さ6.5以上、幅0.3 | 0.2 | 弥生土器壷 | ＳＤ04の約5m西側で平行する。<br>埋没時期は弥生時代後期末頃 |
| ＳＤ04 | 弧状溝？ | 長さ11.0、幅1.0～1.8 | 0.1 | 弥生土器壷・鉢 | 埋没時期は弥生時代後期後半。 |
| ＳＤ05 | 弧状溝？ | 長さ2.1、幅0.8 | 0.1 | 弥生土器甕・壷・高杯・土製品 | 〃 |
| ＳＤ06 | 弧状溝 | 長さ3.5以上、幅0.3 | 0.1 | 弥生土器片 | ＳＤ101より古い。 |
| ＳＥ01 | 不円整形 | 南北1.2×東西1.4 | 1.1 | 弥生土器甕・壷・高杯・器台・ミニチュア壷 | 素掘りの井戸。埋没時期は弥生時代後期末頃。 |
| ＳＥ02 | 円形 | 南北0.9×東西1.0 | 1.3 | 弥生土器甕・壷・高杯・有孔鉢・ミニチュア壷・土製品 | 〃 |
| ＳＫ01 | 不整形 | 南北2.2×東西3.2 | 0.1～0.15 | 弥生土器甕・壷・高杯・サヌカイト剥片 | 埋没時期は弥生時代後期後半。 |
| ＳＫ02 | 不整形 | 南北1.9×東西1.6以上 | 0.1 | 弥生土器甕 | 〃 |
| ＳＫ03 | 不整形 | 南北3.1×東西1.8 | 0.1 | 弥生土器甕 | ＳＤ1015より古い。埋没時期は弥生時代後期後半。 |
| **条坊関連** | | | | | |
| ＳＦ1013 | 南北道路 | 長さ34.0以上×路面幅13.0m前後 | | | 東四坊大路。舗装などの造作なし。 |
| ＳＤ1015 | 南北溝 | 長さ34.0以上、幅3.0～4.0 | 0.4～0.5 | 土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・壷・甕、製塩土器、土馬、軒丸瓦（6272Ｂ）、軒平瓦（6572Ｄ）、神功開寶（765年初鋳）、隆平永宝（796年初鋳） | 東四坊大路東側溝。<br>最深部座標値（Ｘ=-147,266.25、Ｙ=-16,446.70）。<br>埋没時期は平安時代初頭。 |
| ＳＫ603 | 溝状土坑 | 南北2.1×東西0.6 | 0.1 | 須恵器甕、平瓦片 | SD1015溝底で検出。 |
| ＳＫ604 | 溝状土坑 | 南北4.7以上×東西0.8 | 0.3 | 土師器杯ヵ皿、須恵器杯ヵ皿 | 〃 |
| **二坪内** | | | | | |
| ＳＤ101 | 南北溝 | 長さ34.0以上、幅4.5～5.5 | 0.1 | 土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・皿・蓋・甕・円面硯、製塩土器、軒丸瓦（6272Ｂ・6308Ｉ）、平瓦 | 二坪の西辺を限る南北溝。<br>重複関係からＳＢ207・ＳＫ602よりも古い。 |
| ＳＤ102 | 東西溝 | 長さ2.4、幅0.3 | 0.1 | 土師器甕 | ＳＤ1015とＳＤ101を接続する暗渠と考えられる。 |
| ＳＤ103 | 東西溝 | 長さ2.4、幅0.4 | 0.1～0.3 | 平瓦 | 〃　。溝底凹凸著しい。 |
| ＳＤ104 | 東西溝 | 長さ3.8以上、幅1.8～2.4 | 0.05 | 土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・甕・壷 | 重複関係からSB205より古い。<br>溝心座標値（Ｘ=-147,268.82、Ｙ=-16,420.00） |
| ＳＤ107 | 南北溝 | 長さ7.3以上、幅3.7～4.3 | 0.3～0.5 | 弥生土器甕・高杯・有孔鉢・手焙り形土器、土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・皿・蓋・甕・円面硯、竈、フイゴ羽口、平瓦 | 重複関係から河川1より新しい。<br>溝心座標値（Ｘ=-147,280.00、Ｙ=-16,414.60） |
| ＳＫ601 | 不整形 | 南北2.3×東西1.3 | 0.4 | 土師器皿・甕、須恵器杯、軒平瓦（型式不明） | 重複関係から河川1より新しい。 |
| ＳＫ602 | 円形 | 径1.1 | 0.45 | 土師器皿・甕、須恵器甕 | 重複関係からSD101より新しい。 |
| ＳＫ603 | 溝状土坑 | 南北0.4以上×東西0.5以上 | 0.2 | 出土遺物なし | ＳＤ101溝底で検出。 |
| ＳＫ604 | 溝状土坑 | 南北0.5以上×東西0.4 | 0.2 | 〃 | 〃 |
| ＳＫ605 | 溝状土坑 | 南北2.5×東西0.4～0.6 | 0.4 | 土師器片、平瓦片、サヌカイト剥片 | 〃 |
| ＳＫ606 | 溝状土坑 | 南北3.0×東西0.5 | 0.3 | 弥生土器甕、須恵器杯ヵ皿・蓋・甕 | 〃 |
| ＳＫ607 | 溝状土坑 | 南北3.9×東西0.7 | 0.4 | 土師器甕 | 〃 |
| ＳＫ608 | 溝状土坑 | 南北5.3以上×東西0.5以上 | 0.4 | 弥生土器甕、須恵器杯蓋、土師器杯ヵ皿、須恵器杯ヵ皿、サヌカイト剥片 | 〃 |
| ＳＫ609 | 溝状土坑 | 南北3.2以上×東西0.7 | 0.4 | 弥生土器甕、土師器杯ヵ皿・甕、須恵器甕・壷、平瓦 | 〃 |
| ＳＫ610 | 溝状土坑 | 南北4.5×東西0.6以上 | 0.5 | 弥生土器甕・高杯、須恵器杯ヵ皿、平瓦片 | 〃 |

## ＨＪ第552次調査　検出遺構一覧表（二坪内の奈良時代の掘立柱建物・列）

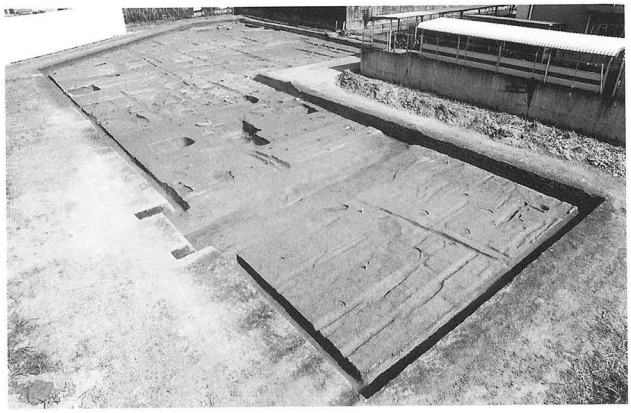
| 遺構番号 | 棟方向 | 規模（間） | 桁行全長 | 梁行全長 | 柱間寸法（m） | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 桁行×梁行 | （m） | （m） | 桁行 | 梁行 | |
| ＳＡ201 | 南北 | 1以上 | 2.4 | | | | 柱穴深さ0.2m。 |
| ＳＡ202 | 南北 | 2以上 | 4.8 | | 2.4等間 | | 河川1より新しい。柱穴深さ0.1～0.3m。 |
| ＳＡ203 | 東西 | 1以上 | 2.1 | | | | 柱穴深さ0.2m。 |
| ＳＢ204 | 南北 | 1以上 | 1.5 | | | | 門の可能性あり。柱穴深さ0.3～0.5m。 |
| ＳＢ205 | 東西 | 2以上×2 | 4.2以上 | 3.6 | 2.1等間 | 1.8等間 | ＳＤ104より新しい。柱穴深さ0.3～0.5m。 |
| ＳＢ206 | 南北 | 3×2 | 5.85 | 3.6 | 2.55等間 | 2.55等間 | ＳＤ04・05より新しい。柱穴深さ0.2～0.5m。 |
| ＳＢ207 | 東西 | 3×2 | 7.65 | 5.1 | 1.95等間 | 1.8等間 | ＳＤ04・05・101より新しい。軒平瓦6682Ｃ1点出土。<br>柱穴深さ0.4～0.7m。 |
| ＳＢ208 | 南北？ | 2以上×1以上 | 4.2以上 | | 2.1等間 | | 柱穴深さ0.1～0.3m。 |
| ＳＢ209 | 東西？ | 1以上×2 | | 4.5 | | 北から2.1-2.4 | 河川2より新しい。柱穴深さ0.4m。 |
| ＳＢ210 | 東西？ | 1以上×2 | | 5.7 | | 2.85等間 | 河川2より新しい。柱穴深さ0.4m。 |
| ＳＢ211 | 南北 | 4以上×1以上 | 7.2 | 2.7以上 | 北から2.25-2.25-2.7 | | 軒平瓦6721Ｈ1点出土。柱穴深さ0.3～0.4m。 |

## Ⅳ　出土遺物

出土遺物には、弥生時代の土器・土製品・石器・石製品、飛鳥時代の須恵器、奈良～平安時代初頭の土師器・須恵器・製塩土器・土製品・黒色土器・瓦塼・銭貨などが合計で遺物整理箱42箱分ある。今回墨書土器は7点出土したが、判読できるものはなかった。以下、瓦塼と河川1・2出土土器について記す。　（久保清子）

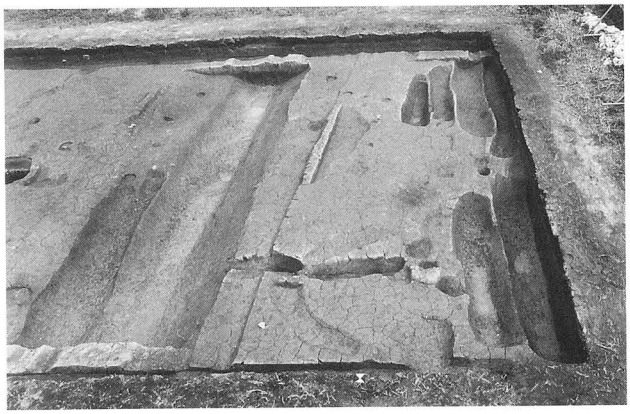
**瓦塼**　出土瓦塼のうち、軒瓦について述べる。軒瓦は23点ある。軒丸瓦の内訳は6272型式A種2点、6272型式B種5点、6308型式I種1点、6313型式A種1点、型式不明3点で合計12点ある。軒平瓦の内訳は6572型式D種4点、6644型式A種1点、6671型式Ⅰa種1点、6682型式C種1点、6721型式H種1点、型式不明3点で合計11点ある。このうち6272型式A種、6272型式B種、6644型式A種は長屋王邸所用瓦で、特に二坪での出土が目立つ。また出土量が多い軒平瓦6572型式D種はすべて東四坊大路東側溝SD1015からの出土である。　（原田憲二郎）

**河川1・2出土土器**　河川1から出土した土器には遺物整理箱10箱分の弥生土器がある。ほとんどが破片の状態で出土したが完存するものもある。器種は、甕、広口壷、長頸壷、短頸壷、細頸壷、無頸壷、鉢、有孔鉢、台付鉢、高杯、器台、結合形土器、手焙り形土器、ミニチュ



ＨＪ第552次調査　北発掘区（北西から）

ＨＪ第552次調査　南発掘区（南から）



ＨＪ第581次調査　二坪北西部（南から）

ＨＪ第552次調査　垂直写真（上が北）

ＨＪ第552次調査　河川1全景（南西から）

ア土器（甕）とさまざまであるが、甕が出土量の大半を占める。これらは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃のものが主体であり、弥生時代前期末から中期初頭、中期末から後期前半のものも若干含まれる。甕は、体部外面にタタキを残すものが大半であるが、中には、体部外面をハケ調整で仕上げているものがある。壷には、把手が付くもの、体部外面に竹管文や櫛描き文、口縁端部に凹線文や、竹管押圧円形浮文、棒状浮文を施すものなどがある。有孔鉢には尖底化したものも見られる。高杯には、脚部が筒状のものと裾部に向かって緩やかに広がるもの、杯部は皿形と椀形のものがある。

河川２から出土した土器は、遺物整理箱３箱分の弥生土器で、器種は甕、広口壷、長頸壷、短頸壷、壷蓋、鉢、高杯、ミニチュア土器（甕・高杯）がある。ほとんどが破片である。弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃のものが主体で、弥生時代前期のものも若干含まれる。

## Ⅴ　調査所見

今回調査地南半で、埋没時期の下限が縄文時代中期頃とみられる河川を確認した。その上面で検出した弥生時代の河川は、その最終段階にあたる可能性が高い。

弥生時代については、今回の調査では、弥生時代後期末頃の井戸の他に複数の溝を検出した。ただ、溝の大半が削平を受けていたため、本来の規模や性格についてはわからないが、集落内の区画溝か竪穴建物の周溝もしくは方形周溝墓の一部であった可能性が考えられる。また、河川の出土遺物から、調査地周辺に弥生時代前期から後期前半にかけての遺構が存在するとみられる。

奈良時代（平城京跡）については、東四坊大路東側溝は、調査地北側、五条条間北小路との交差点に向かって排水されており、側溝堆積土内の土壌分析結果から、溝内は、雨水が一時的に流れる状況であったことがわかった。

二坪内については、東四坊大路に面して築地塀が設けられ、門が開く可能性があることや、宅地（二坪）内を溝で区画して利用していた可能性が高いことがわかった。

（久保清子）

ＨＪ第552次調査　河川１・２出土土器

## (2) 平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪・五条条間北小路）の調査　第557·568次

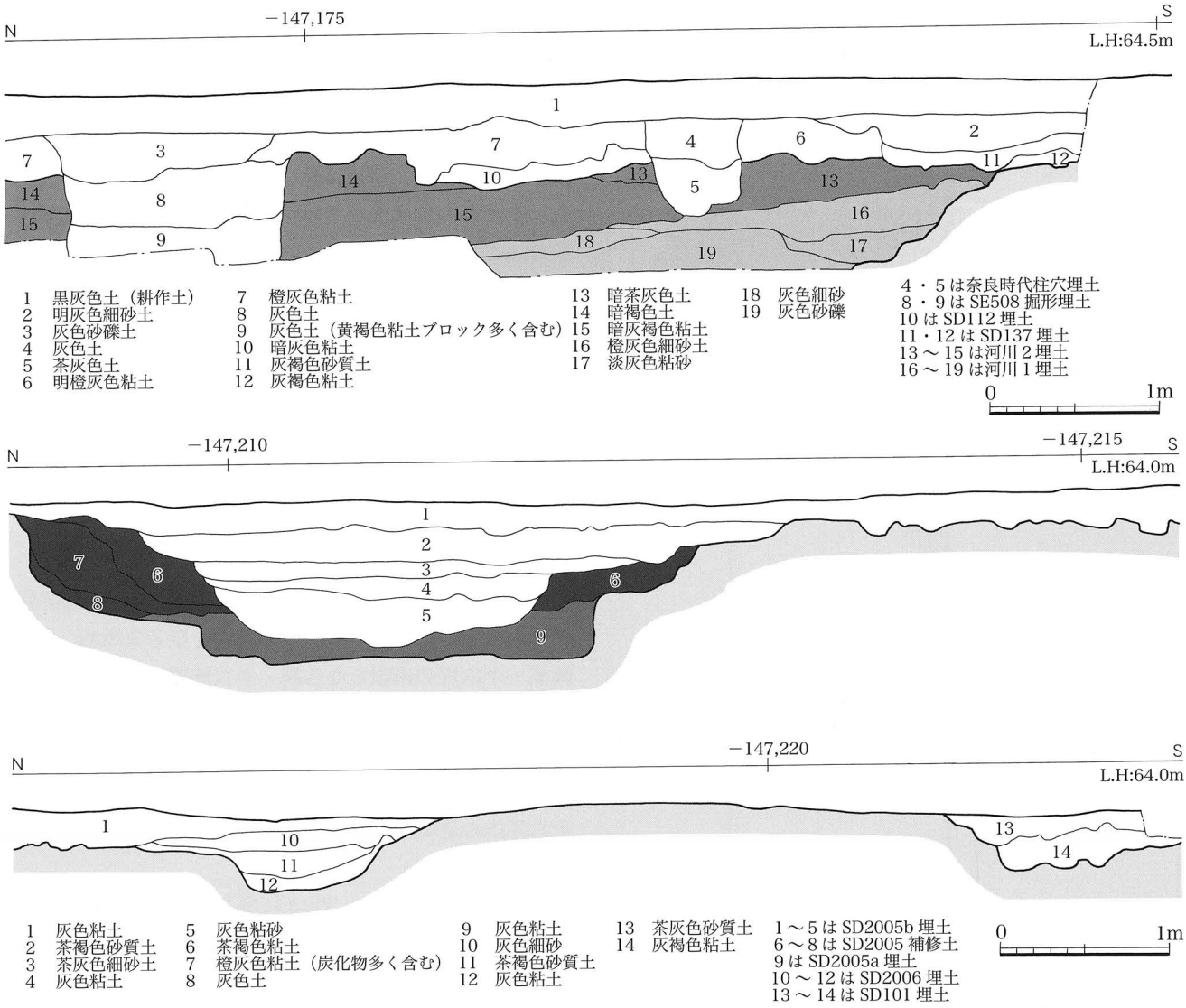
### Ⅰ　はじめに

ＨＪ第557・568次調査区は、ＨＪ第486次（平成14年度）調査区の西隣であり、平城京の条坊復原では左京五条四坊十六坪の南半中央付近、および十五坪と十六坪とを画する五条条間北小路にあたる。十六坪ではＨＪ第468-４次(平成13年度)、ＨＪ第486次、ＨＪ第541次(平成17年度）の３次にわたる調査が行われており、坪内東部では大きく南北1/2に分割され、さらに溝および掘立柱塀により、1/4に細分利用されていることが判明している。五条条間北小路については、今回の調査区の西方、ＨＪ第459-２次(平成13年度)調査区で左京五条四坊九・十坪間での条間北小路が、今回の調査区の東方ではＨＪ第506次（平成15年度）調査区で左京五条五坊一・二坪間での条間北小路が確認されており、左京五条四坊九・十坪間では側溝心々間距離で約6.0ｍ、左京五条五坊一・二坪間では側溝心々間距離で約6.7ｍの幅員であることが確認されている。これらの成果をうけて、今回の調査は十六坪内と五条条間北小路の様相解明を目的とした。特に十六坪は北が四条大路、東が東四坊大路に面しており、ＨＪ第568次調査区は、十六坪南辺の東西1/2の位置にあたることから、五条条間北小路から十六坪内へ入る施設、門・橋等の遺構が想定できる。

また、ＨＪ第468-４次調査では弥生時代後期の溝と河川を、ＨＪ第486次調査では縄文時代晩期と弥生時代後期の河川を、ＨＪ第541次調査では弥生時代後期の河川を検出していることから、古墳時代以前の遺構の確認も目的とした。

### Ⅱ　基本層序

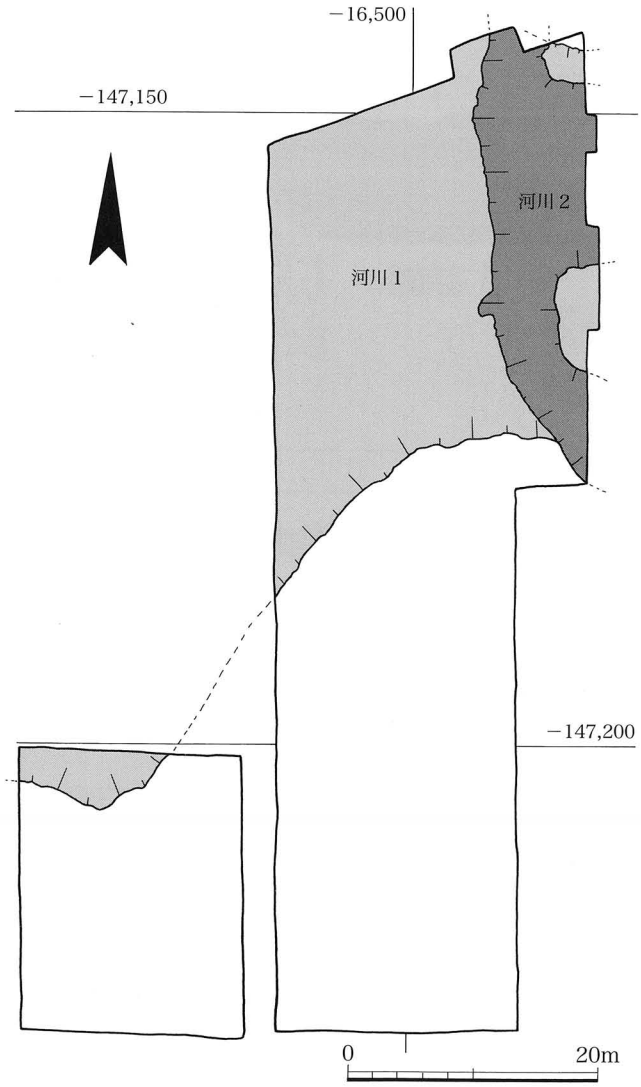
発掘区内での基本的な層序は、耕作土である黒灰色土以下、灰茶色砂質土または橙灰色粘土と続き、地表下0.3




ＨＪ第557次調査　発掘区条坊遺構土層図（1/40）

～0.5 mで黄褐色粘土または黄褐色礫土の地山となる。遺構面はこの地山上面で、東から西へ向かって緩やかに下がっており、その標高は63.6～63.8 mである。

ＨＪ第557次調査区北部とＨＪ第568次調査区北西辺では、黄褐色粘土の地山上に、下から順に灰色砂礫、橙灰色細砂土の堆積が認められ、東から西へ流れる河川であることがわかった。河川１と呼称する。河川１はＨＪ第557次調査区では幅約30.0 mで、長さ約25.0 m分を、ＨＪ第568次調査区では幅約4.5 m分、長さ約10.7 m分を検出した。深さは約2.5 mである。灰色砂礫層からは縄文時代中期末から弥生時代中期初頭の土器が出土した。東に隣接するＨＪ第486次調査区でも同様の埋土で、縄文時代の石器・土器を包含する河川の一部を検出しており、これと一連のものとみることができる。灰色砂礫層からは、他に流木が出土し、河川１の埋没時期を明らかにする為、放射性炭素年代測定を行い、あわせて流木の樹種同定を行った。結果、流木は補正$^{14}$Ｃ年代3,710±40（Ｙ．Ｂ．Ｐ）（ＢＣ2130、ＢＣ2080、ＢＣ2060）の年代値が得られ、樹種はケヤキと判明。また灰色砂礫層は種実・葉を多く含む泥質砂層をはさんでいたため、この層に含まれる花粉の分析と種実・葉の同定を行った。結果、川辺の低地にはサワグルミ・ムクノキ・トチノキ等からなる林が、微高地にはイチイガシを主とするカシ林が形成されていたことがわかった。（127～134頁参照）



河川検出状態（1/600）

また、ＨＪ第557次調査区北部東辺では、河川１の堆積土の上に暗灰色粘土が堆積していた。南から北に流れる河川で、河川２とした。河川２は幅約10.0 mで、長さ約34.0 m分を検出した。埋土からは弥生時代後期の土器が出土した。東に隣接するＨＪ第468・486次調査区でも同様の埋土で、弥生時代後期の土器を包含する河川を検出しており、これと一連のものとみることができる。

発掘区北半では部分的に、河川２の埋土の上に、茶褐色土が堆積していた。厚さは約0.2 mである。この堆積土からは奈良時代の土器が出土した。奈良時代の整地土と考える。

## Ⅲ　検出遺構

検出遺構には、弥生時代の土坑、奈良時代以降の道路・溝・掘立柱建物・掘立柱塀・掘立柱列・井戸・土坑・木橋・埋納遺構がある。遺構は黄褐色粘土の地山上面で検出した。ただし発掘区北半では河川１・２の埋土、奈良時代整地土が広がっており、この上面で検出した。以下に検出遺構の概要を述べるが、規模等は表にまとめた。

### 弥生時代の遺構

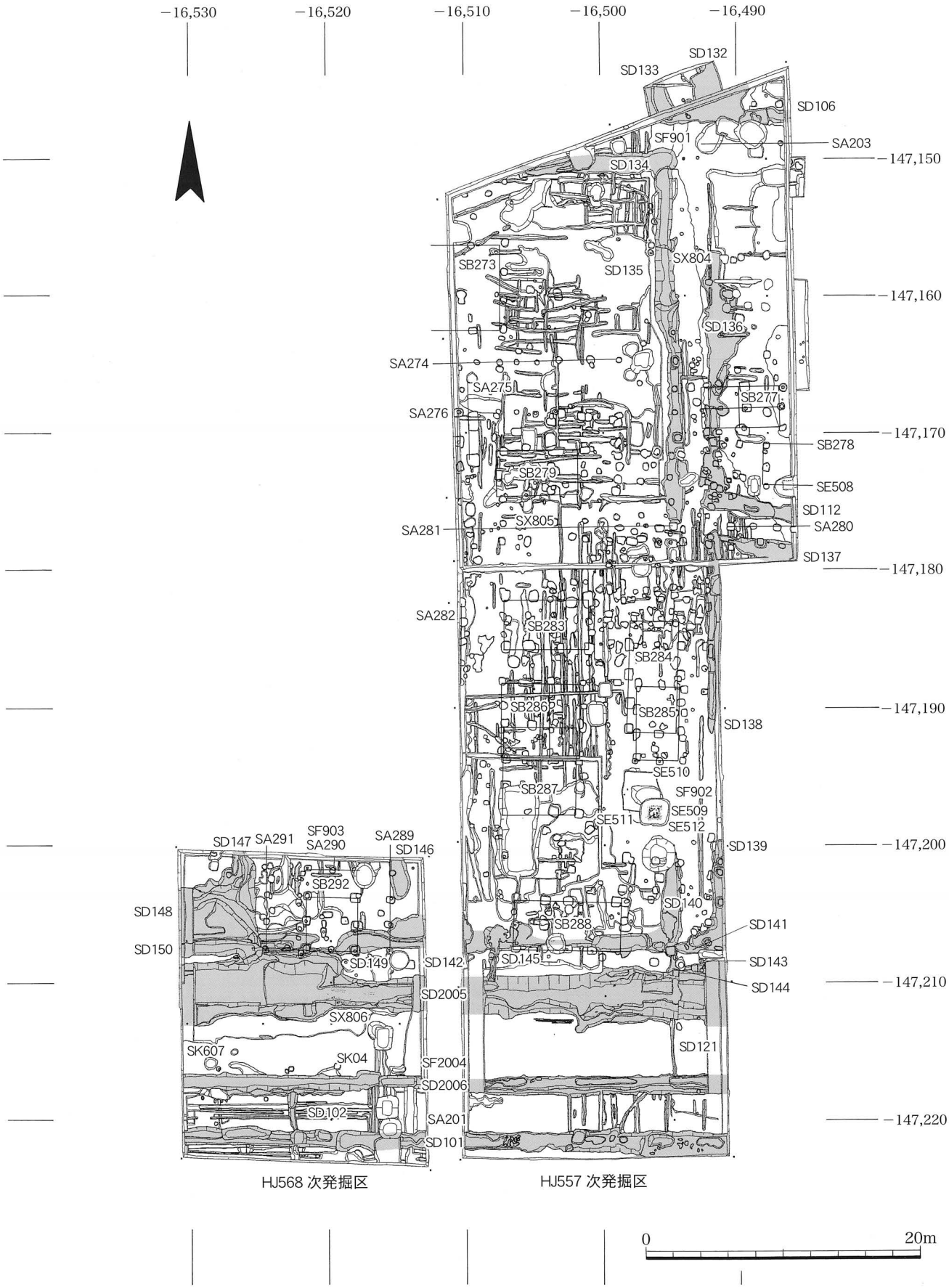
土坑ＳＫ04がある。南西部が中世以降の遺構により削平をうけているが、径約1.3 mとみることができる。検出面からの深さは約0.6 m。埋土は下から黒灰色粘土、淡茶灰色粘土、茶褐色粘土で、黒灰色粘土層から、生駒山西麓産の弥生時代中期末葉の台付鉢が出土した。

### 奈良時代以降の遺構

検出した主な遺構には五条条間北小路・同南北両側溝・北側溝に架かる木橋・十五坪の北面を限る築地塀・同雨落溝・十六坪の南限となる溝・十六坪内を分割する坪内道路とこの両側の溝および掘立柱塀・十六坪南面の門・掘立柱建物・掘立柱塀・掘立柱列・井戸・溝・土坑・埋納遺構がある。以下に条坊関連遺構・十五坪内の遺構・十六坪内の遺構の順に報告する。

### 条坊遺構

五条条間北小路ＳＦ2004は南北両側溝を検出し、側溝心々間距離で6.0～6.6 mの幅員があることがわかった。路面は十六坪宅地面より約0.3 m低く、路面上には後述する条間北小路北側溝最終埋土である灰色粘土が広




ＨＪ第557･568次調査　発掘区遺構平面図（1/400）

## ＨＪ第557・568次調査　検出遺構一覧表（土坑・溝・道路・井戸等）

| 遺構番号 | 掘形等 | | | 主な出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 平面形等 | 平面規模（m） | 深さ（m） | | |
| **弥生時代** | | | | | |
| ＳＫ04 | 円形 | 径1.3 | 0.6 | 弥生土器台付鉢 | |
| **条坊関連** | | | | | |
| ＳＦ2004 | 東西道路 | 長さ41.0以上、幅6.0～6.6 | — | — | 五条条間北小路。 |
| ＳＤ2005 a | 東西溝 | 長さ41.0以上、幅1.6～4.4 | 1.3～1.7 | 軒平瓦（6702Ｇ）塼、土師器杯・皿・壺・竈・甑・ミニチュア竈、須恵器蓋・壺・甕、製塩土器、墨書土器、人面墨書土器、土馬、鉄製刀子、フイゴ羽口、坩堝、銅滓、木製斎串・曲物・箸・漆塗椀、獣骨、桃種 | 五条条間北小路北側溝。補修前をａ、補修後をｂとした。ＳＤ2005ｂは掘立柱塀ＳＡ291・掘立柱建物ＳＢ292より新しい。ＳＤ2005ｂには木橋ＳＸ806が架かる。 |
| ＳＤ2005 b | | 長さ41.0以上、幅1.6～2.8 | 0.8～1.2 | 軒平瓦（6641Ｃ･6664Ｄ･6671Ａ･6671Ｉａ･6691Ａ･6702Ｇ）、塼、土師器杯・皿・椀・盤・高杯・壺・甕・竈・甑・ミニチュア竈・ミニチュア甑、須恵器杯・蓋・皿・盤・高杯・鉢・壺・平瓶・甕・羽釜・ミニチュア椀、黒色土器杯・皿、三彩陶器椀・ミニチュア長頸壺、製塩土器、墨書土器、土馬、土錘、銅製鈴、銭貨（和同開珎・萬年通寶・神功開寶）、フイゴ羽口、ガラス溶解用坩堝、取瓶、溶銅、銅滴、銅滓、鉄滓、木製人形・斎串・横櫛・曲物・糸巻・漆塗椀・漆塗皿、石鏃、砥石、玉髄、水晶、獣骨、桃種、瓜種 | |
| ＳＤ2006 | 東西溝 | 長さ41.0以上、幅1.0～1.8 | 0.4～0.6 | 軒丸瓦（6308Ａ）、須恵器鉢、土馬 | 五条条間北小路南側溝。 |
| ＳＤ121 | 南北溝 | 長さ4.0、幅0.2 | 0.3 | 須恵器杯・蓋・甕、製塩土器 | 五条条間北小路南側溝から北側溝への排水施設。 |
| ＳＫ607 | 円形 | 径1.0 | 0.2 | | |
| ＳＸ806 | — | | — | — | 五条条間路北側溝ＳＤ2005ｂに架かる木橋。 |
| **十五坪内** | | | | | |
| ＳＤ101 | 東西溝 | 長さ41.0以上、幅1.2 | 0.2～0.6 | 軒丸瓦（6316Ｈ）、塼、土師器竈 | 十五坪北面築地雨落溝。 |
| ＳＤ102 | 南北溝 | 長さ3.0、幅0.6 | 0.1～0.3 | 塼、須恵器蓋・椀・甕、製塩土器 | 十五坪内から、五条条間北小路南側溝への排水施設。 |
| ＳＡ201 | — | 長さ41.0以上×幅3.0 | — | — | 十五坪北面築地塀。 |
| **十六坪内** | | | | | |
| ＳＤ106 | 東西溝 | 長さ10.0以上、幅1.5 | 0.4 | 須恵器蓋、三彩陶器ミニチュア壺、土馬 | 東西道路ＳＦ901と第468－４次掘立柱塀ＳＡ203の北側溝。 |
| ＳＤ112 | 東西溝 | 長さ7.0以上、幅1.0 | 0.2 | 須恵器甕、製塩土器 | 掘立柱塀ＳＡ280の北側溝。 |
| ＳＤ132 | 南北溝 | 長さ2.0以上、幅2.0 | 0.4 | 土師器皿、須恵器蓋 | 南北道路ＳＦ902東側溝。 |
| ＳＤ133 | 南北溝 | 長さ1.3以上、幅1.4 | 0.4 | 土師器蓋、須恵器蓋 | 南北道路ＳＦ902西側溝。 |
| ＳＤ134 | 東西溝 | 長さ13.0以上、幅1.8 | 0.4 | 須恵器蓋・甕 | 東西道路ＳＦ901南側溝。 |
| ＳＤ135 | 南北溝 | 長さ27.0、幅約1.0 | 0.2 | 軒丸瓦（6316Ｈ）、土師器甕・竈、須恵器杯・壺・甕、製塩土器 | 南北道路ＳＦ902西側溝。 |
| ＳＤ136 | 南北溝 | 長さ18.5、幅1.0～3.0 | 0.2 | 土師器竈、須恵器甕、製塩土器 | 南北道路ＳＦ902東側溝。 |
| ＳＤ137 | 東西溝 | 長さ6.5以上、幅1.2 | 0.2 | 土師器皿・甕、須恵器蓋・甕 | 掘立柱塀ＳＡ280の南側溝。 |
| ＳＤ138 | 南北溝 | 長さ14.5、幅0.3以上 | 0.3 | 土師器蓋・甕、須恵器椀、製塩土器 | 南北道路ＳＦ902東側溝。 |
| ＳＤ139 | 南北溝 | 長さ8.0以上、幅1.0 | 0.4 | 土師器皿・甕、須恵器杯、製塩土器、羽口 | 南北道路ＳＦ902東側溝。 |
| ＳＤ140 | 南北溝 | 長さ6.5、幅2.0 | 0.3 | 土師器蓋、須恵器杯・蓋・鉢・製塩土器 | 南北道路ＳＦ902西側溝。 |
| ＳＤ141 | 東西溝 | 長さ1.8、幅0.9 | 0.2 | 土師器片、須恵器片 | 南北道路ＳＦ902東西両側溝を繋ぐ溝。 |
| ＳＤ142 | 東西溝 | 長さ24.7、幅1.0～3.0 | 0.3～0.4 | 土師器蓋・皿・椀・高杯・甕・竈・甑、須恵器杯・蓋・椀・甕・羽釜・墨書土器、製塩土器 | 坪南限の溝。掘立柱建物ＳＢ288、門ＳＢ292、掘立柱塀ＳＡ289より新しい。 |
| ＳＤ143 | 南北溝 | 長さ0.5、幅0.3 | 0.3 | 遺物出土せず | 南北道路東側溝ＳＤ139と五条条間北小路北側溝ＳＤ2005を繋ぐ溝。 |
| ＳＤ144 | 南北溝 | 長さ1.4、幅0.3 | 0.3 | 須恵器蓋 | 南北道路西側溝ＳＤ140と五条条間北小路北側溝ＳＤ2005を繋ぐ溝。 |
| ＳＤ145 | 南北溝 | 長さ2.2、幅0.5 | 0.2～0.5 | 土師器甕、須恵器杯 | 坪南限の溝ＳＤ142と五条条間北小路北側溝ＳＤ2005を繋ぐ溝。ＳＤ2005との合流部に木樋を設置。 |
| ＳＤ146 | 南北溝 | 長さ3.0以上、幅1.4 | 0.4 | 土師器皿・甕、須恵器杯・蓋、製塩土器 | 南北道路ＳＦ903ｂ東側溝。掘立柱塀ＳＡ289より新しい。 |
| ＳＤ147 | 南北溝 | 長さ5.0以上、幅1.4 | 0.4 | 須恵器甕、製塩土器 | 南北道路ＳＦ903ｂ西側溝。 |
| ＳＤ148 | 東西溝 | 長さ10.5以上、幅1.0～4.3 | 0.3～0.7 | 土師器皿・椀、須恵器椀・壺、墨書土器 | 坪南限の溝。門ＳＢ292、掘立柱塀ＳＡ291より新しい。 |
| ＳＤ149 | 南北溝 | 長さ1.0以上、幅0.3 | 0.2 | 土師器片、須恵器片 | 坪南限の溝ＳＤ142と五条条間北小路北側溝ＳＤ2005を繋ぐ溝。門ＳＢ292より新しい。 |
| ＳＤ150 | Ｌ字溝 | 長さ5.0以上、幅1.2 | 0.8～0.9 | 塼、土師器壷、須恵器壷・甕、製塩土器、石包丁、桃種 | 西端に木樋残存。五条条間北小路北側溝ＳＤ2005ａ・坪南限の溝ＳＤ148より新しい。条間北小路北側溝ＳＤ2005ｂから坪内への導水施設。 |
| ＳＥ508 | 長円形 | 南北1.6×東西1.5以上 | 1.0 | 枠内：須恵器甕、製塩土器、木製横櫛・曲物、金銅製山形金具、銭貨（和同開珎）、桃種・梅種 | 方形縦板組横桟留め。枠内法一辺0.6ｍ。東側縦板材のうち１枚は扉板の転用品。掘立柱建物ＳＢ278より新しい。 |
| ＳＥ509 | 隅丸方形 | 一辺長2.2 | 1.7 | 枠内：土師器甕・製塩土器、木製斎串・曲物・漆塗椀、鏟形鉄製品、鉄製刀子、鉄製金具、ガラス製丸玉、瓢箪・栗皮 | 方形縦板組横桟留め。枠内法一辺0.9ｍ。枠内底礫敷き。井戸ＳＥ510より新しい。 |
| ＳＥ510 | 隅丸方形 | 一辺長2.8 | 1.5 | 枠抜き取り痕：土師器皿、須恵器甕 | 枠抜き取り。井戸ＳＥ511より新しい。 |
| ＳＥ511 | 不明 | 東西0.7以上×南北0.7以上 | 1.2 | 遺物出土せず | |
| ＳＥ512 | 円形 | 径3.0 | 1.0 | 土師器杯・皿、須恵器蓋・甕・杯 | 枠抜き取り穴の底に縦板材の一部が残存。南北道路西側溝ＳＤ140より新しい。 |
| ＳＸ804 | 長円形 | 南北0.3×東西0.2 | 0.1 | 土師器甕、銭貨（神功開寶・萬年通寶） | |
| ＳＸ805 | 円形 | 径0.2 | 0.1 | 須恵器杯 | |
| ＳＦ901 | 東西道路 | 長さ5.0以上、幅2.2 | — | — | 坪内南北1/2分割ラインに位置する。北側溝ＳＤ106と南側溝ＳＤ134の間。 |
| ＳＦ902 | 南北道路 | 長さ64.0以上、幅2.0 | — | — | 坪内東西1/4分割ラインに位置する。東側溝ＳＤ132・136・138・139と西側溝133・135・140の間。 |
| ＳＦ903 a | 南北道路 | 長さ5.0以上、幅9.0 | — | — | 坪内東西1/2分割ラインに位置する。ＳＦ903ａは東側掘立柱塀ＳＡ289と西側掘立柱塀ＳＡ291の間、ＳＦ903ｂは東側溝ＳＤ146と西側溝ＳＤ147の間。 |
| ＳＦ903 b | | 長さ5.0以上、幅9.3 | — | — | |

ＨＪ第557・568次調査　検出遺構一覧表（十六坪内の奈良時代の掘立柱建物・塀・列）

| 遺構番号 | 棟方向 | 規模（間） | 桁行全長 | 梁行全長 | 柱間寸法（m） | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 桁行×梁行 | (m) | (m) | 桁行 | 梁行 | |
| ＳＢ273 | 南北 | 1以上×3 | 東西2.1以上 | 南北6.3 | 2.1 | 2.1等間 | 柱穴深さは約0.2 m。 |
| ＳＡ274 | 東西 | 7 | 11.7 | | 東から2間は2.1等間、以西は1.5等間 | | 柱穴深さは約0.2 m。 |
| ＳＡ275 | 南北 | 2 | 6 | | 3.0等間 | | 発掘区外西側へ続く掘立柱建物の東側柱の可能性を考える。柱穴深さは0.2～0.6 m。 |
| ＳＡ276 | 南北 | 3 | 6.6 | | 北から2.1－2.1－2.4 | | 北から2つ目と南端の柱穴は深さ約0.1 mと浅い。その他は柱穴深さ約0.3 m。また南1間分は柱間が広いことから、北から2つ目の柱穴を身舎妻柱と、南端の柱穴は廂の柱穴とみて、発掘区外西側へ続く南廂付掘立柱建物の東側柱の可能性を考える。 |
| ＳＢ277 | 東西 | 2×2 | 東西5.4 | 南北3.0 | 東西2.7等間 | 南北1.5等間 | 総柱建物。坪内道路東側溝ＳＤ136より新しい。柱穴深さは約0.3 m。 |
| ＳＢ278 | 東西 | 1以上×2 | 東西2.4以上 | 南北3.0 | 2.4 | 南北1.5等間 | 柱穴深さは約0.2 m。 |
| ＳＢ279 | 東西 | 3×2 | 6.0 | 3.6 | 東から2.1－2.1－1.8 | 1.8等間 | 柱穴深さは0.1～0.4 m。 |
| ＳＡ280 | 東西 | 3以上 | 4.8以上 | | 東から1.5－1.5－1.8 | | 坪南北1/4分割ラインに位置するが、東側のＨＪ第468－4・486次調査区で検出されている掘立柱塀ＳＡ225とは柱筋が通らない。柱穴深さは0.2～0.6 m。 |
| ＳＡ281 | 東西 | 6以上 | 15.0以上 | | 東から1.5－3.0－3.0－2.1－2.1－3.3 | | 坪南北1/4分割ラインに位置する。柱穴深さは0.2～0.5 m。 |
| ＳＡ282 | 南北 | 4 | 6.0 | | 1.5等間 | | 発掘区外西側へ続く掘立柱建物の東側柱の可能性を考える。柱穴深さは0.3～0.4 m。 |
| ＳＢ283 | 東西 | 3×2 | 6.3 | 3.6 | 2.1等間 | 1.8等間 | 柱穴深さは約0.5 m。東西妻柱は約0.2 mと浅い。 |
| ＳＢ284 | 南北 | 4×2 | 8.4 | 3.6 | 2.1等間 | 1.8等間 | 柱穴深さは0.3～0.4 m。 |
| ＳＢ285 | 南北 | 3×2 | 5.4 | 3.0 | 1.8等間 | 1.5等間 | 柱穴深さは約0.3 m。 |
| ＳＢ286 | 南北 | 3×2 | 5.4 | 3.6 | 1.8等間 | 1.8等間 | 東廂（廂の出2.1 m）。身舎柱穴は深さ約0.4 mで、廂の柱穴は約0.2 mと浅い。 |
| ＳＢ287 | 東西 | 3×2 | 5.4 | 4.2 | 1.8等間 | 2.1等間 | 北廂（廂の出2.4 m）。掘立柱建物ＳＢ286より新しい。柱穴深さ0.2～0.4 m。 |
| ＳＢ288 | 東西 | 4×2 | 7.8 | 3.6 | 2.1－1.8－1.8－2.1 | 1.8等間 | 柱穴深さは0.2～0.5 m。 |
| ＳＡ289 | 南北 | 3 | 5.4 | | 1.8等間 | | 坪内道路ＳＦ903ｂの東を画する掘立柱塀。柱穴深さは約0.4 m。 |
| ＳＡ290 | 東西 | 2 | 3.6 | | 1.8等間 | | 発掘区外北側へ続く掘立柱建物の南側柱の可能性。柱穴深さは約0.4 m。 |
| ＳＡ291 | 南北 | 3 | 5.4 | | 1.8等間 | | 坪内道路ＳＦ903ｂの西を画する掘立柱塀。柱穴深さは0.3～0.4 m |
| ＳＢ292 | 南北 | 2×1 | 4.2 | 3.6 | 2.1等間 | 3.6 | 坪東西1/2分割ライン南端に位置する。四脚門。柱穴深さは約0.5 m。 |

がっており、両側溝埋没後、道路全体が水路となっていたとわかる。路面上では、土坑ＳＫ607と、路面を横断する南北方向の溝ＳＤ121を検出した。溝ＳＤ121は条間北小路北側溝と、同南側溝を繋ぐ溝である。溝底は南から北へ向って緩やかに下り、この傾斜から、条間北小路南側溝から同北側溝に排水する施設と考える。路面上という位置関係から、暗渠の可能性が考えられる。

五条条間北小路北側溝ＳＤ2005は、側溝心の国土座標値がＸ＝-147,210.80 m、Ｙ＝-16,494.00 mである。両岸とも浸食により崩壊したあと、補修工事を行っており、補修前の溝をＳＤ2005ａ、補修後の溝をＳＤ2005ｂとする。ＳＤ2005ａは発掘区東辺では幅約4.4 mであるが、中央部で幅約1.6 mと狭くなり、それ以西は大きく浸食をうけ、幅約3.7 mに広がっている。発掘区東辺と西辺は灰色砂礫、中央部では下から順に灰色細砂、灰色粘土で埋まる。この後、岸崩壊部に茶褐色粘土、暗茶褐色土、暗茶褐色礫土を補修のため充填していた。補修土から木製編物の断片が出土したことから、補修土充填に際して土嚢を使用した可能性が考えられる。補修後の溝ＳＤ2005ｂは発掘区東半では幅約2.8 mで、西半では幅約1.6 mと狭くなる。埋土は下から順に灰色粘砂、灰色粘土、茶灰色細砂土、茶褐色砂質土で、この上に路面側へと溢れ、条間北小路南側溝上にまで溜まる灰色粘土がある。ＳＤ2005ｂには木橋ＳＸ806が架けられていたことが確認できた。橋板は崩落していたが、流されず、溝内に落ち込んでいたもの４枚を確認した。いずれも厚さ約２㎝である。南北両岸補修土内には残存長約1.8 m、径約15㎝の丸太材が埋め込まれていた。両岸の丸太材の上に橋桁を渡し、橋板を置いた構造と考える。丸太材周辺の溝岸には杭が打ち込まれていた。また丸太材周辺の補修土にも人頭大の石や軒平瓦（6671型式Ｂ種）が埋め込まれていた。これらは桁橋という構造上、橋上の重力が両岸に掛かることを考慮したうえでの護岸施設とうかがえる。

五条条間北小路南側溝ＳＤ2006は側溝心の国土座標値がＸ＝-147,217.40 m、Ｙ＝-16,494.00 mである。北側溝に比して非常に浅く、路面上に溝ＳＤ121が掘削されていたことからも、五条条間北小路での基幹排水路は北側溝であったとわかる。埋土は茶灰色砂質土である。

**十五坪内の遺構**

条間北小路南側溝ＳＤ2006と溝ＳＤ101に挟まれた幅3.0 mの空閑地では、西辺で築地添柱とみられる小柱穴を検出し、十五坪の北面を限る築地塀ＳＡ201の存在を考える。このことから築地塀ＳＡ201南側の溝ＳＤ101は築地の雨落溝と考える。深さは0.2～0.6 mと一定せず、溝底にも傾斜がないことから、築地塀ＳＡ201築造に際して、土取りの目的も兼ねて掘削された跡であると考える。埋土は上から茶灰色砂質土、灰褐色粘土である。築地塀ＳＡ201上では、条間北小路南側溝ＳＤ2006と雨落溝ＳＤ101とを繋ぐ溝ＳＤ102を検出した。

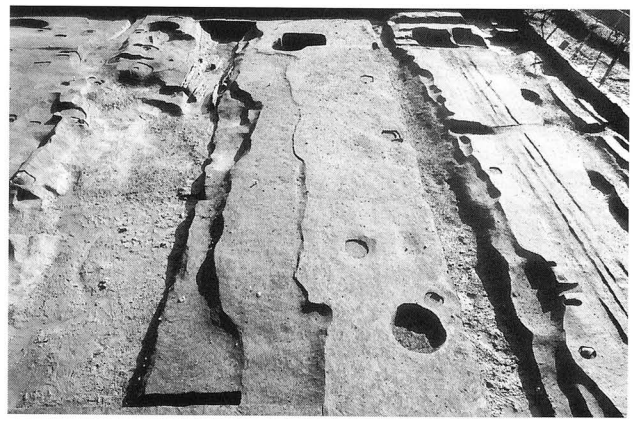
ＨＪ第557次調査　発掘区南半（北から）

ＨＪ第568次調査　発掘区全景（北から）

ＨＪ第557次調査　発掘区南半（南から）

ＨＪ第568次調査　発掘区全景（南から）

ＨＪ第557次調査　発掘区北半（北から）



ＨＪ第568次調査　条間北小路（西から）

溝底は北に向かって緩やかに下る。位置関係から築地塀ＳＡ201下の暗渠と考える。もとは暗渠の蓋材であったのであろうか、溝北辺の埋土から塼が1点出土した。

**十六坪内の遺構**

十六坪内では南北1/2ラインで溝・掘立柱塀・坪内道路を、南北1/4ラインで溝・掘立柱塀を、東西1/4ラインで坪内道路を、東西1/2ラインで門･坪内道路を確認し、坪内を分割または区画して利用していたと判った。

十六坪の南北にある条坊道路の側溝、推定四条大路南側溝心と五条条間北小路北側溝心を基準とした南北1/2ラインでは塀ＳＡ203を確認した。十六坪の東西1/4付近で途切れる。塀ＳＡ203北側では、これに平行する東西溝ＳＤ106を確認した。ＨＪ468-4・486次調査では、塀ＳＡ203の南側にもこれと平行した溝ＳＤ107が確認されているが、今回の調査区には無かった。溝ＳＤ107はＨＪ486次調査区と、今回の調査区の間の未調査地で南へ屈曲し、ＨＪ468-4・486次で確認されている方形区画を構成しているものと考える。溝ＳＤ106も、その東端は十六坪西限の南北溝ＳＤ105と接続しており、溝ＳＤ107西端屈曲部との対称位置で南北溝が接続していることが想定できる。ただし溝ＳＤ106自体は塀ＳＡ203とは異なり、十六坪の東西1/4付近にある南北溝ＳＤ

132・ＳＤ133と繋がりながら、調査区外西へ続く。十六坪の東西1/4ライン以西では溝ＳＤ106南側に、これと平行する東西溝ＳＤ134がある。溝ＳＤ106・134の間にある幅約2.2ｍの空閑地は、十六坪の南北にある道路の側溝心を基準とした南北1/2ラインに位置していることから、ここには坪内東西道路ＳＦ901が想定できる。

十六坪の南北にある道路の側溝を基準とした南北1/4ラインでは、ＨＪ第468-４・486次で確認されていた東西塀ＳＡ225の続きは、今回の調査区には無かった。ただし、この北１ｍほどで東西塀ＳＡ280を確認した。この塀を挟み南北両側に東西溝ＳＤ112・137が平行している。東西溝ＳＤ112・137ともに、西端となる十六坪の東西1/4付近で、東西溝ＳＤ112は南北溝ＳＤ136南端と、東西溝ＳＤ137は南北溝ＳＤ138北端と接続する。東西塀ＳＡ280も東西溝ＳＤ112・137と同様に、十六坪の東西1/4付近で途切れるが、これ以西では同じく坪南北1/4ラインで、東西塀ＳＡ281があり、調査区外西へ続く。

十六坪の東西にある道路の側溝、東四坊大路西側溝心と四坊坊間東小路東側溝心を基準とした東西1/4付近では北から南北溝ＳＤ132・136・138・139を検出した。この西側では平行する南北溝、北からＳＤ133・135・140を検出した。東側の南北溝ＳＤ132・136・138・139を東側溝と、西側の溝ＳＤ133・135・140を西側溝とみて、この間の幅約2.0ｍの空閑地を坪内南北道路ＳＦ902と考える。坪内道路ＳＦ902の東側溝であるＳＤ138は、南へ約14.5ｍで途切れ、それ以南８ｍ程の間隔をとって、同東側溝ＳＤ139が掘られている。東側溝ＳＤ139の南端は東西溝ＳＤ141東端・南北溝143北端と接続する。坪内道路ＳＦ902の西側溝であるＳＤ140の南端は、十六坪南限の東西溝ＳＤ142東端・東西溝141西端・南北溝144北端と接続する。坪内道路ＳＦ902南端路面上では東西溝ＳＤ141を検出した。坪内南北道路東側溝ＳＤ139と西側溝ＳＤ141を繋ぐ、坪内道路上の暗渠と考える。

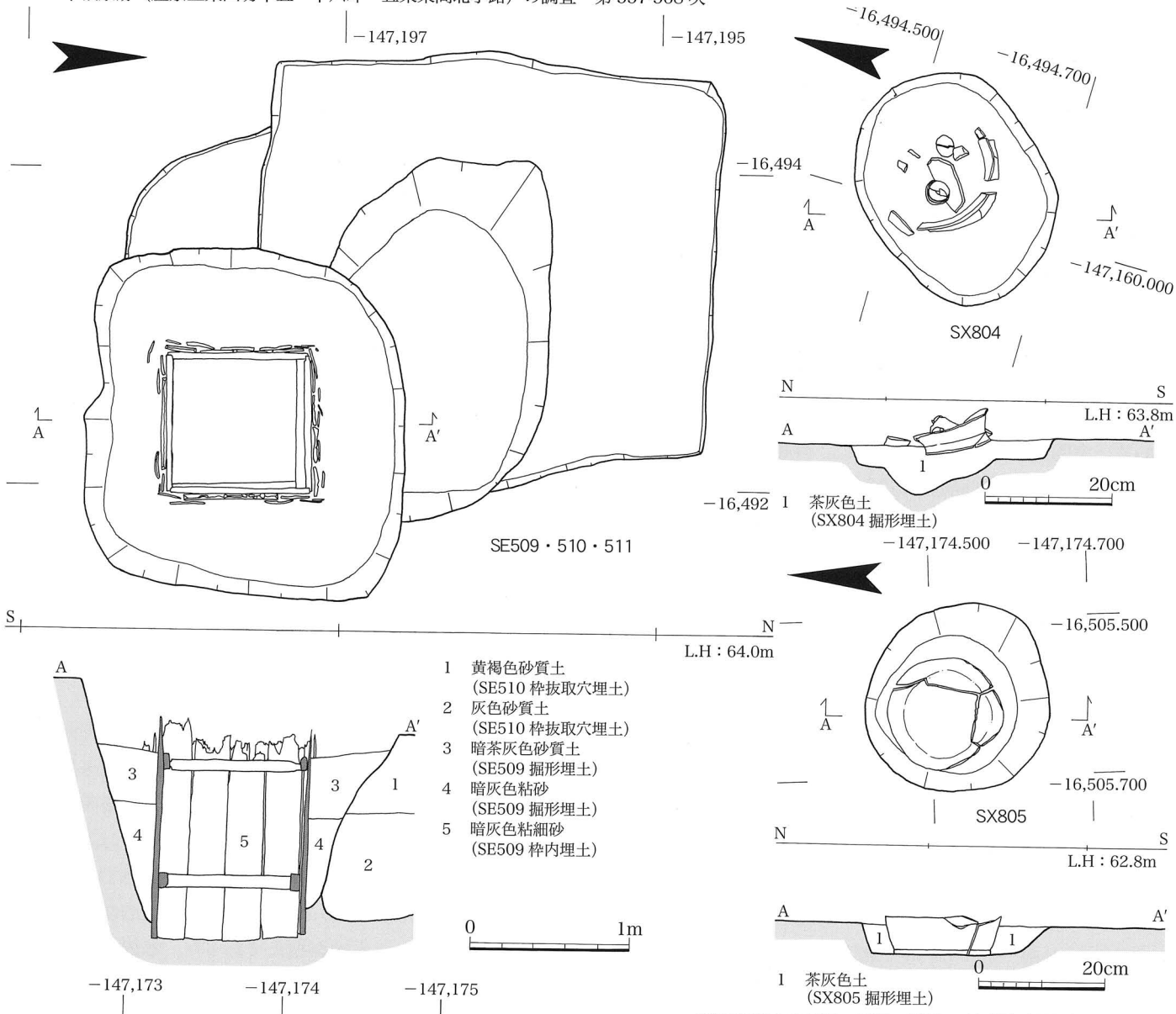
十六坪の東西にある道路の中心を基準とした1/2ライン南端では東西１間、南北２間の掘立柱建物ＳＢ292を検出した。坪内での位置関係から、東西中央の柱を親柱と、その南北の柱を控柱とみて四脚門と考える。門心の国土座標値はＸ＝-147,207ｍ、Ｙ＝-16,520ｍである。門ＳＢ292の東側柱から東へ2.7ｍ（９尺）離れた位置では、これに平行する南北方向の掘立柱列ＳＡ289を、門ＳＢ292西側柱筋から西へ同じく2.7ｍ離れた位置では、これに平行する南北方向の掘立柱列ＳＡ291を検出した。この両掘立柱列を塀とみて、その間の幅約9.0ｍを坪内南北道路と考える。また門ＳＢ289の両側には南北溝ＳＤ146・147を確認した。東側の溝ＳＤ146を東側溝、西側の溝ＳＤ147を西側溝とみて、両溝間も坪内南北道路と考える。掘立柱塀ＳＡ289と南北溝ＳＤ146には重複関係があり、南北溝ＳＤ146の方が新しいことがわかる。以上のことから掘立柱塀ＳＡ289・291で区画する時期の坪内南北道路をＳＦ903ａと、南北溝ＳＤ146・147で区画する時期の坪内南北道路をＳＦ903ｂとする。

十六坪南限の東西溝ＳＤ142は条間北小路北側溝ＳＤ2005の北側に位置し、これに平行している。十六坪の東西にある道路心を基準とした東西1/2付近の坪内道路ＳＦ903にあたるところで途切れる。東西溝ＳＤ142の西端から約２ｍ西側で東西溝ＳＤ148を確認した。東西溝ＳＤ148は東端では幅約1.0ｍであるが、発掘区西端では北に広がり、幅約4.3ｍになる。溝ＳＤ142・148と条間北小路北側溝ＳＤ2005の間は1.5～2.0ｍで、ここに坪の南面を画する築地塀を想定できるが、その痕跡は無かった。ただし、門ＳＢ292を検出したことから、これに取り付く何らかの遮蔽施設があった可能性は考えられる。

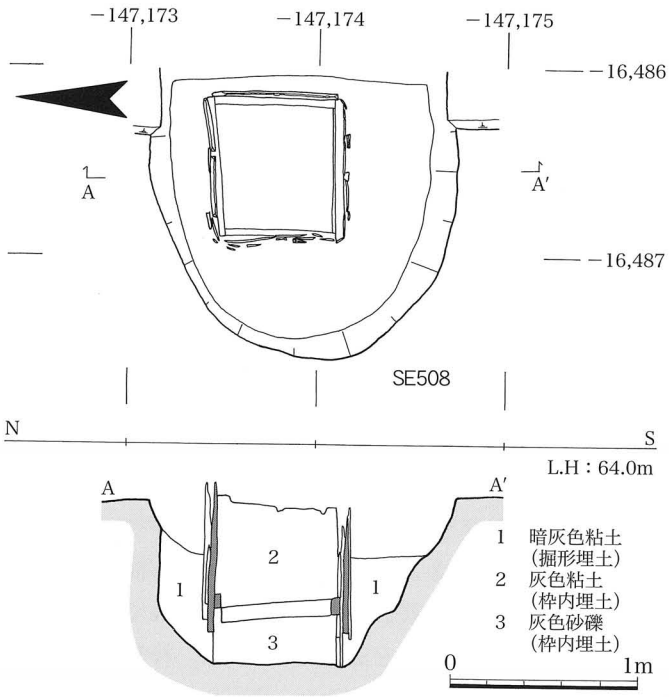
南北溝ＳＤ143は条間北小路北側溝ＳＤ2005と坪内南北道路東側溝ＳＤ139を繋ぐ溝である。南北溝ＳＤ144は条間北小路北側溝ＳＤ2005と坪内南北道路西側溝ＳＤ140を繋ぐ溝である。南北溝ＳＤ145・149は条間北小路北側溝ＳＤ2005と十六坪の南限の東西溝ＳＤ142を繋ぐ溝である。南北溝ＳＤ145はＳＤ2005との合流部に丸太材を刳りぬいた木樋が据えてあった。木樋は残存幅約0.2ｍ、残存長は約1.1ｍである。これら南北溝ＳＤ143・144・145・149の溝底は、いずれも条間北小路北側溝に向って下っており、十六坪内から基幹排水路である条間北小路北側溝への排水を企図したものと考える。

十六坪の南限となる溝ＳＤ148の西部では、これとほぼ重なる位置で、溝ＳＤ150を検出した。溝東端は南に曲折して条間北小路北側溝ＳＤ2005と繋がる。遺構の重複関係から、条間北小路北側溝ＳＤ2005ａ・十六坪南限の東西溝ＳＤ148の埋没後に掘削されたものとわかる。西端では、底と両側に板を用いた木樋が残存していた。位置関係・溝底の高低差から十六坪内に水を引くための施設と考える。

ＳＥ508は掘形平面形が隅丸長方形の井戸である。掘形埋土は灰色土である。井戸枠の構造は方形縦板組横桟留めである。東側の縦板１枚は扉板の転用品で、片側の端面を丸く仕上げ、軸を造り出している。枠内埋土は上から灰色粘土、灰色砂礫である。井戸ＳＥ509は掘形平面形が隅丸方形である。掘形埋土は上から、暗茶灰色




埋納遺構ＳＸ804・805　平面・立面図（1/10）




井戸ＳＥ508～511 平面・立面図（1/40）

砂質土、暗灰色粘砂である。井戸枠の構造は方形縦板組横桟留めである。枠内埋土は暗灰色粘細砂である。枠内底には浄水のためであろう拳大の礫がまばらに敷かれていた。井戸ＳＥ510は掘形平面形が隅丸方形である。掘形埋土は上から淡黄褐色砂礫土、灰色粘砂である。井戸枠は抜き取られている。井戸枠抜き取り穴は東西約2.3 m、南北1.4 mの平面長円形である。枠抜き取り穴の埋土は上から黄褐色砂質土、灰色砂質土である。遺構の重複関係から井戸ＳＥ509より古く、井戸ＳＥ511より新しいことがわかる。井戸ＳＥ511は井戸ＳＥ509・510により大きく削平を受けており、平面規模は東西・南北ともに0.7 m程度を確認したに過ぎない。枠部分も失われていたが、壁がほぼ垂直に立ち上がっていたことから、井戸と考える。井戸ＳＥ512は掘形平面形が円形である。枠は抜き取られていたが、枠抜き取り穴の底には、幅約0.1 m、残存長約1.1 m、厚さ2.0 cmの縦板材とみられる板が残っていた。

ＳＸ804は南北約0.3ｍ、東西約0.2ｍの平面形長円形の掘形に、銭貨を置き、その上から、口縁部を下にした土師器甕を被せた埋納遺構である。遺構検出面からの深さは約0.1ｍで、大きく削平を受けており、土師器甕は口縁部と胴部の一部が残るのみである。銭貨は9枚あり、うち4枚が重なった状態で出土した。出土銭貨の内訳は萬年通寶4枚、神功開寶4枚と銭文不明品が1枚である。ＳＸ805は径約0.2ｍの平面円形の掘形に、口縁部を上にした須恵器杯を置く埋納遺構である。遺構検出面からの深さは約0.1ｍである。土器内には土が充満しているのみで、内容物は検出できなかった。

## Ⅳ　出土遺物

ＨＪ第557・568次両調査併せて、遺物整理箱172箱分の遺物が出土した。出土遺物の大半は、条間北小路北側溝ＳＤ2005から出土した。出土遺物には瓦、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製品、金属製品、木製品がある。整理未了の為、以下、主要な遺物を述べる。

**瓦塼類**　遺物整理箱67箱分出土した。大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦11点、軒平瓦18点、塼17点がある。以下軒瓦について述べる。

軒丸瓦は5型式5種7点で、他に型式不明のものが4点ある。軒丸瓦の内訳は6134型式Ａａ種1点、6308型式Ａ種1点、6313型式Ａａ種2点、6282型式Ｂａ種1点、6316型式Ｈ種2点である。軒平瓦は7型式10種17点で、型式不明のものが1点ある。内訳は6641型式Ｃ種1点、6664型式Ｄ種1点、6664型式Ｆ種2点、6671型式Ａ種1点、6671型式Ｂ種2点、6671型式Ｉａ種5点、6691型式Ａ種1点、6702型式Ｇ種2点、6711型式Ｂ種1点、6721型式Ｋ種1点である。6671型式Ａ種は興福寺創建瓦で、段顎であることが知られているが、今回出土したものは曲線顎Ⅱである。また京都府瀬後谷瓦窯産として知られる6671型式Ｉａ種が多いことも特筆できる。なお、遺構より出土したものは、検出遺構一覧表に掲げた。　（原田憲二郎）

**土器類**　縄文時代・弥生時代・奈良時代から平安時代にかけての土器について、以下、時代順に報告する。

**縄文土器・土製品**　中期末～晩期後半の縄文土器が総数3640点出土した。便宜的にⅠ群―中期末、Ⅱ群―後期前半、Ⅲ群―後期後半～末、Ⅳ群―晩期前半、Ⅴ群―晩期後半の5群に分類をおこない、各調査・遺構ごとの出土点数は別表に示した。以下、器種ごとに報告する。

**深鉢**（1～35）　1・2はⅠ群である。1は幅8㎜程の蛇行する沈線を縦位に施すもので、破片左下には斜位の沈線も認められる。2は器面の劣化が顕著であるが、外面に縄文LRを縦位に施した帯縄文が認められる。いずれも北白川Ｃ式に比定される。

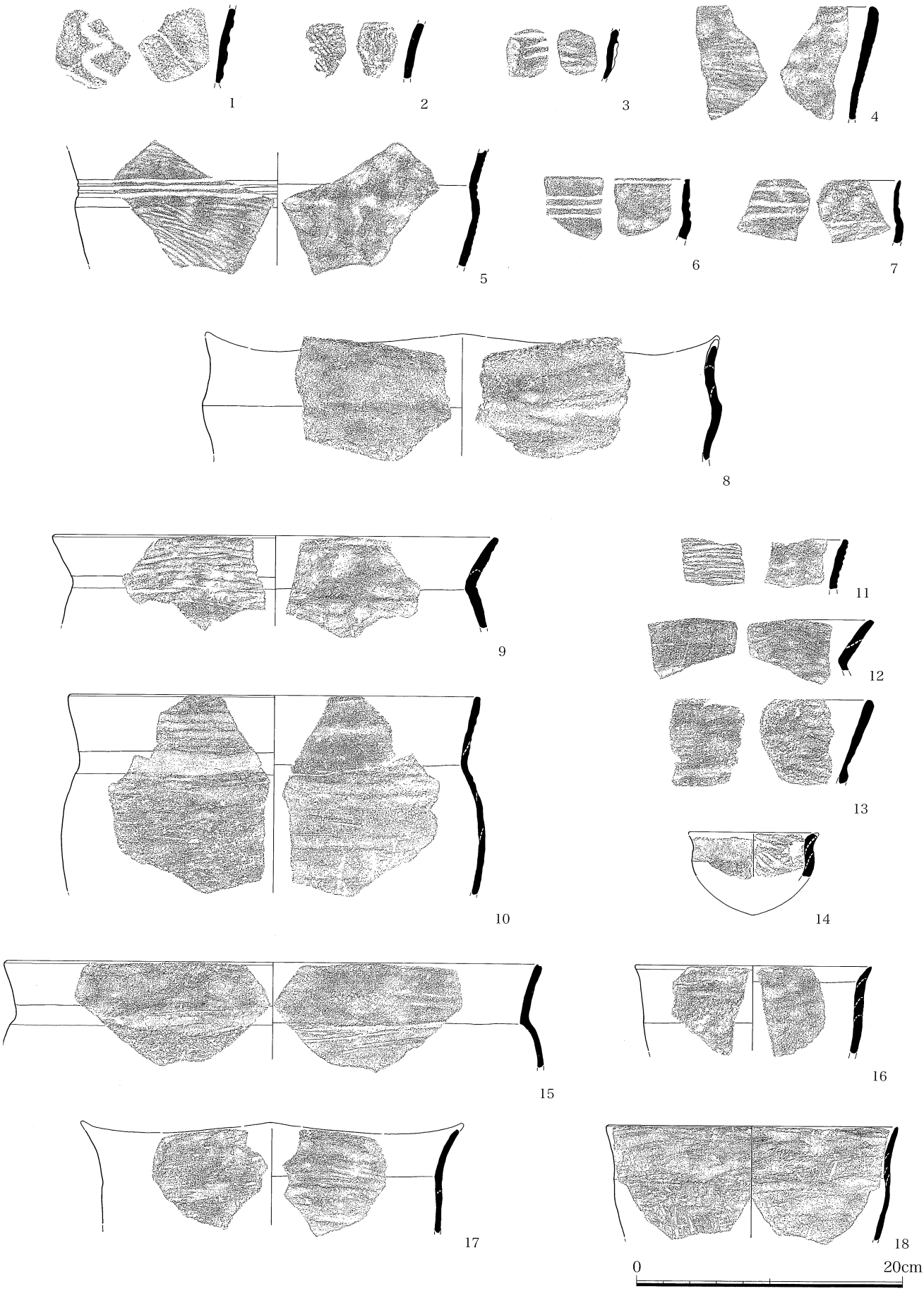
3～8はⅢ群である。3は幅4㎜程の沈線を横位に施し、巻貝の押圧による扇状圧痕を施すもので、後期後半の宮滝式に比定される。4は口縁部が直行外反する器形の深鉢で、口縁部はやや肥厚する。外面は二枚貝を用いた条痕を施し、内面はナデとユビオサエで調整され僅かに指頭圧痕が認められる。

5～7は頸部に幅2㎜程の沈線を3条巡らすものである。6・7は口縁部片で、6は口唇部を面取りし、内面は口縁に沿って沈線を巡らす。口縁部はやや内傾してまっすぐ立ち上がる器形である。対して、7は内傾してからやや外反して立ち上がる器形で、端部は先尖状を呈する。内面には指頭圧痕と頸部の屈曲に伴う沈線が認められる。5は頸胴部片で、二枚貝を用いた条痕を右下から左上に斜位に施した後に沈線を巡らしている。頸部は条痕をナデ消している。8は緩い波状を呈する口縁部片で、端部はやや先尖り気味に丸くおさめている。5～7とは異なり頸部には沈線を施さず、内外をナデのみで調整している。4～8は後期末の滋賀里Ⅰ式に比定される。

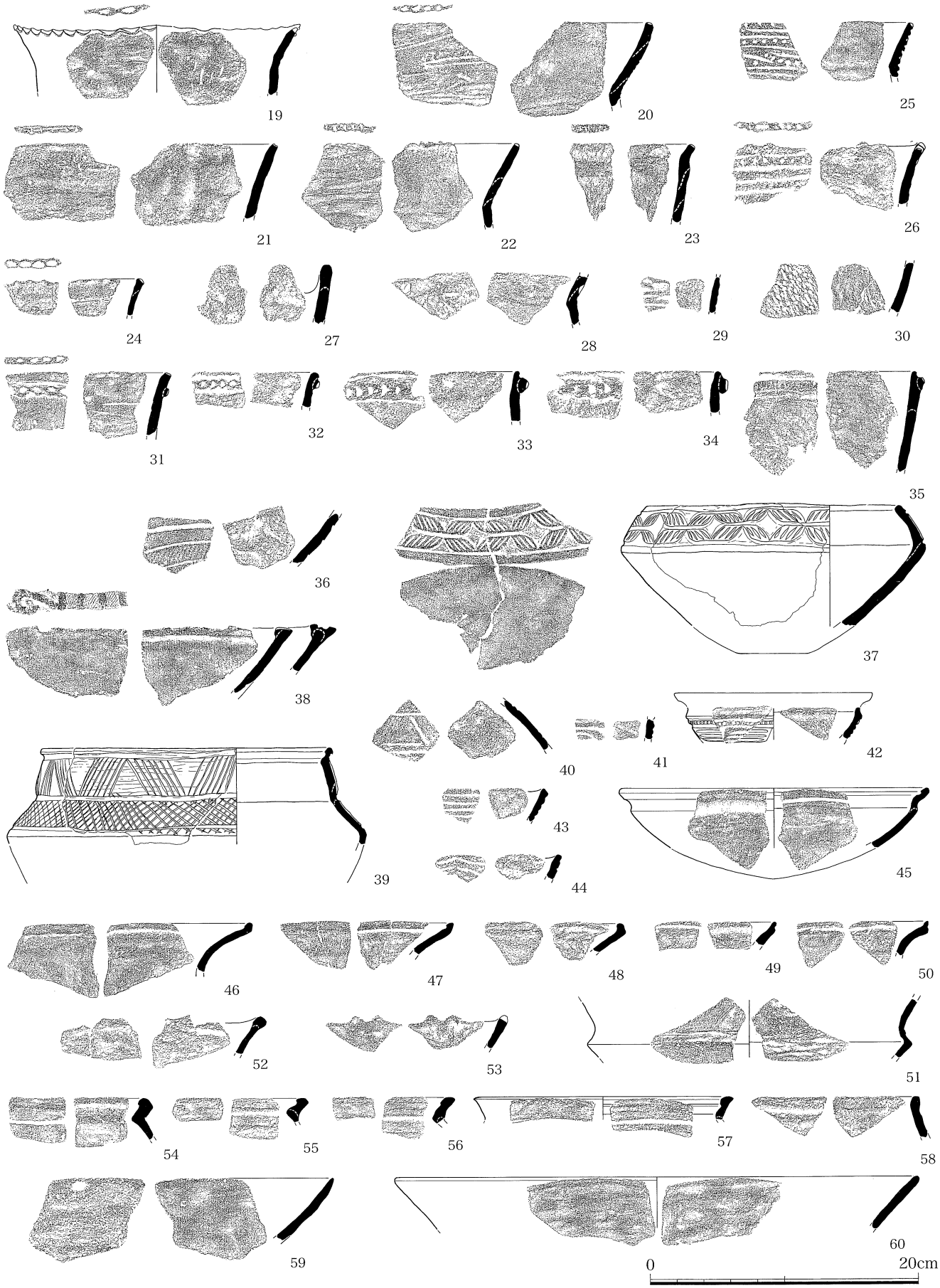
9～30はⅣ群と考えられるものである。9～18は口唇部に刻みを施さないもので、そのうち9～11は口縁部を二枚貝による条痕で調整をおこない、9・10は部分的に条痕をナデ消している。また頸部以下は、9はナデ、10はケズリで調整をおこなっている。10の胴部内面には幅1.3㎝程のナデの単位が顕著に認められる。12～14・16は内外をナデで調整し、12・13は頸部に強いナデが施され、断面が凹線状を呈している。14は小型ないしミニチュア、16は中型の深鉢で、口縁端部は両指で摘みながら外反させ、先尖状を呈する。15・18は口縁部外面をナデ、頸部以下をケズリで調整するもので、15は口唇部の断面が凹線状を呈し、頸部のナデも強い。また頸部内面には条痕が認められる。18は器壁が薄く、頸部の屈曲も緩やかである。17は頸胴部界の稜が不明瞭で、外面をケズリのみで調整している。

19～24は口唇部に刻みを施すもので、19・20・24はＯ字状、21～23は断面がＶ字状の細かい刻みを施す。20は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、外面には条痕が認められる。23は口縁部が短く屈曲し、すぐ端部に至る。9～24は篠原式に比定される。

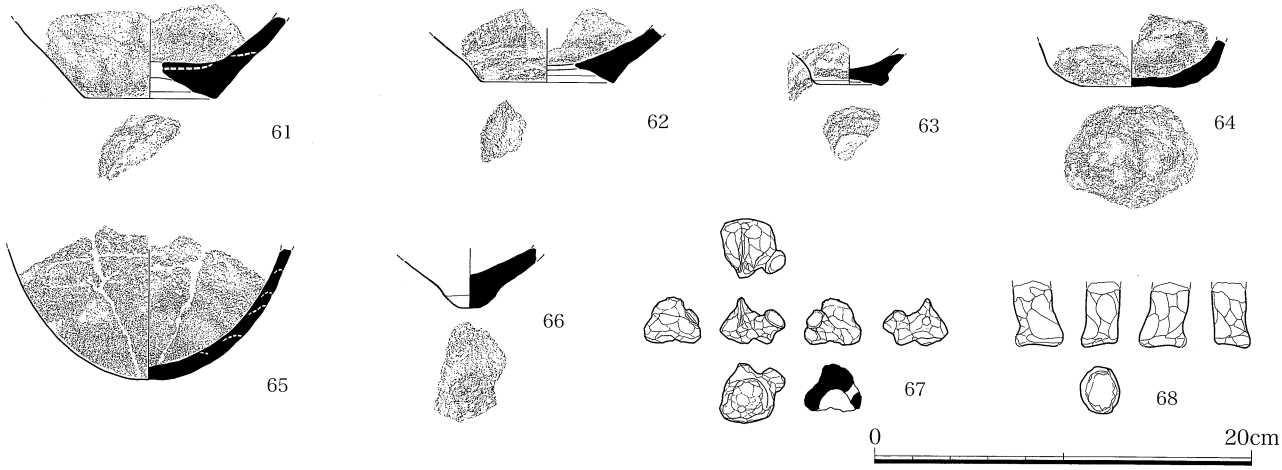
25・26は外面に文様を施すもの、25は口唇から口縁上端にかけて刺突を施し、口縁部には幅2㎜程の横走する沈線と斜行する沈線を描き、その間に円形の刺突を施す。斜行する沈線と刺突は羊歯状文が崩れたものと考える。器面は内外ともにナデにより平滑に仕上げられてい




ＨＪ第557・558次調査　河川１出土縄文土器１（１／４）




ＨＪ第557・558次調査　河川１出土縄文土器２（１／４）




ＨＪ第557・558次調査　河川１出土縄文土器３（１／４）

縄文土器出土点数表

| 地点 | 分類 | Ⅰ群 | Ⅱ群 | Ⅲ群 深鉢 | Ⅲ群 浅鉢 | Ⅳ群 深鉢 口縁無刻 | Ⅳ群 深鉢 口縁有刻 | Ⅳ群 深鉢 大洞系 | Ⅳ群 深鉢 頸部 | Ⅳ群 深鉢 底部付近 | Ⅳ群 深鉢 凹底 | Ⅳ群 深鉢 平底 | Ⅳ群 深鉢 丸底 | Ⅳ群 深鉢 他 | Ⅳ群 浅鉢 北陸系 | Ⅳ群 浅鉢 口縁 | Ⅳ群 浅鉢 肩部 | Ⅳ群 浅鉢 頸部 | Ⅳ群 浅鉢 胴部 | Ⅳ群 浅鉢 底部 | Ⅳ群 土製品 | Ⅴ群 | 不明 胴部 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 557次 | 河川１ | | 1 | 5 | | 152 | 21 | 2 | 126 | 29 | 22 | 2 | 10 | 4 | 1 | 25 | 1 | 20 | 1 | 1 | 2 | 3 | 1872 | 2300 |
| | 上層遺構他 | | | 1 | | 14 | 10 | | 25 | 3 | 4 | 2 | | | | 8 | | | | | | 6 | 609 | 682 |
| 568次 | 河川１ | 2 | | 1 | 1 | 19 | 7 | | 38 | 4 | 5 | | 6 | 2 | | 3 | | 1 | | | | | 569 | 658 |
| 合計 | | 2 | 1 | 7 | 1 | 185 | 38 | 2 | 189 | 36 | 31 | 4 | 16 | 6 | 1 | 36 | 1 | 21 | 1 | 1 | 2 | 9 | 3050 | 3640 |

る。26は口唇部に刻みを施し、２個１対の突起を有する。口縁部には幅４㎜程の沈線を数条施巡らし、口縁部直下の沈線間に円形の刺突を一列施している。内面はナデにより平滑に仕上げられている。両者は大洞式に比定されるもので、25はＢＣ式、26はＣ１式に比定される。

27～30はⅣ群としながらも、位置づけが曖昧なものである。27は口縁部の突起部分で、波頂部がやや肥厚する。内外とも摩滅が著しい。28は頸部片で、破片左端に刺突を一点施す。頸部が屈曲し、胴部をケズリで調整する特徴から篠原式に比定される。29は横位に沈線を施すものであるが、文様意匠が判然としない。浅鉢の可能性も考えられる。30は外面に縄文を施すが、撚の方法、また施文方向が判然とせず、帰属時期も不確実である。

31～35は凸帯文土器で、31は面取りをした口唇部に刻みを施し、口唇部からやや下がった位置に凸帯を貼り付けて幅広の刻みを施している。32～35は口縁に接するか、やや下がった位置に凸帯を貼り付けるものである。32はＯ字状、33・34はＤ字状、35はＣ字状の細かい刻みを凸帯上に施している。31は滋賀里Ⅳ式、32～35は船橋式ないし長原式に比定されると考えられる。

**浅鉢（36～60）**　36は平行する沈線間に縄文LRを施すもので、Ⅱ群に位置づけられる。

37・38は北陸系の土器で、37は「く」字状に屈曲する器形で、口縁部に横走する沈線と三角形刳込文を施す。また、沈線と三角形刳込文に区画された木の葉状の部分に斜位の沈線を数条施す。器面は平滑に仕上げられており、胴部にはミガキが施されていると考えるが、単位が判然としない。後期末の八日市新保式に比定される。38は口唇部に隆帯を貼付けて渦巻文と平行する区画帯を作り、区画内に縄文LRを充填している。器面は内外ともに平滑に仕上げられている。御経塚式に比定される。

39は壺形を呈する浅鉢で、口縁部はミガキ調整の後斜沈線により山形状の文様を描き、肩部には斜格子文を施す。口縁～肩部界の横走する沈線はこれらの文様施文後に巡らされる。口縁部内面にも沈線を１条巡らせている。40は横走する沈線間に斜行する沈線を施すが、文様意匠が判然としない。41・42はいわゆる橿原式文様を有するものである。42は浅鉢の胴部で、頸部直下に横位の刻み列を施す。対向する三角形刳込文が交互に配されるものと考える。43･44は波状口縁で、口縁部に沿って沈線を数条巡らす。46～50は頸部が外反し、口縁部が短く屈折する器形で、49・50は口縁部に沈線を一条巡らす。52・53は突起を有するもので、52はリボン状の突起の一部と考える。54～58は肩部が「く」字状に屈曲し、内湾してから口縁部が立ち上がるもので、54～57は口縁部が玉縁状を呈し、内面には沈線を１条巡らす。59・60は皿状を呈するもので、59はケズリ、60はナデで調整している。

縄文土器観察表

| 報告番号 | 調査次数 | 出土遺構等 | 分類 | 時期・型式 | 器種 | 調整・施文 | | 器厚（cm） | | 胎土 | | | 色調 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外面 | 内面 | 最大 | 最小 | 砂粒 | 雲母 | 角閃石 | 外面 | 内面 | 断面 |
| 1 | 568 次 | 河川 1 | Ⅰ群 | 北白川 C 式 | 深鉢 | 沈線 | | 0.65 | 0.5 | ◎ | ○ | | 5Y6/1 | 2.5Y6/2 | 5Y6/1 |
| 2 | 568 次 | 河川 1 | Ⅰ群 | 北白川 C 式 | 深鉢 | 縄文 LR・ナデ | ナデ | 0.6 | 0.5 | ◎ | ○ | | 2.5Y2/1 | 2.5Y3/1 | 2.5Y2/1 |
| 3 | 568 次 | 河川 1 | Ⅲ群 | 宮滝式 | 深鉢 | 沈線・巻貝押圧 | ナデ | 0.8 | 0.35 | ◎ | ○ | | 10YR5/2 | 10YR3/1 | 5Y2/1 |
| 4 | 557 次 | 河川 1 | Ⅲ群 | 滋賀里Ⅰ式 | 深鉢 | 二枚貝条痕・ナデ | ナデ・ユビオサエ | 0.8 | 0.4 | ◎ | ○ | ○ | 2.5Y3/1 | 10YR3/2 | 2.5Y2/1 |
| 5 | 557 次 | 河川 1 | Ⅲ群 | 滋賀里Ⅰ式 | 深鉢 | 二枚貝条痕・ナデ・沈線 | ナデ | 0.7 | 0.5 | ◎ | ◎ | ○ | N2/ | 10YR3/2 | 5Y3/1 |
| 6 | 557 次 | 河川 1 | Ⅲ群 | 滋賀里Ⅰ式 | 深鉢 | ナデ・沈線 | ナデ・沈線 | 0.7 | 0.45 | ◎ | △ | ◎ | 10YR4/2 | 10YR4/2 | 2.5Y4/1 |
| 7 | 557 次 | 河川 1 | Ⅲ群 | 滋賀里Ⅰ式 | 深鉢 | ナデ・沈線 | ナデ・ユビオサエ | 0.6 | 0.3 | ○ | | ◎ | 2.5Y3/1 | 10YR2/1 | 10YR2/1 |
| 8 | 557 次 | SA274 柱穴 | Ⅲ群 | 滋賀里Ⅰ式 | 深鉢 | ナデ | ナデ | 0.9 | 0.6 | ◎ | ○ | | 10YR6/3 | 2.5Y7/4 | 5Y3/1 |
| 9 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | 二枚貝条痕・ナデ | ナデ | 0.8 | 0.5 | ◎ | ○ | | N2/ | 10YR7/3 | 5Y4/1 |
| 10 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | 二枚貝条痕・ナデ・ケズリ | ナデ | 0.6 | 0.4 | ◎ | | | 10YR6/2 | N2/ | 2.5Y5/1 |
| 11 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | 二枚貝条痕 | ナデ | 0.7 | 0.45 | ○ | ○ | | 10YR6/4 | 2.5Y7/3 | 2.5Y7/3 |
| 12 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | ナデ | ナデ | 0.7 | 0.5 | ○ | ○ | | 10YR7/3 | 7.5Y2/1 | 7.5Y2/1 |
| 13 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | ナデ | ナデ | 0.8 | 0.35 | ◎ | | | N1.5/ | 7.5Y2/1 | 10Y2/1 |
| 14 | 568 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | ナデ | ナデ | 0.7 | 0.55 | ◎ | △ | | 10YR4/2 | 10YR4/2 | 2.5Y3/1 |
| 15 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | ナデ・ケズリ | ナデ・条痕 | 0.7 | 0.3 | ◎ | ○ | | 10YR6/2 | 10YR6/2 | 10YR6/2 |
| 16 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | ナデ | ナデ・ユビオサエ | 0.75 | 0.5 | ◎ | ○ | | 10YR7/4 | 5Y5/1 | N4/ |
| 17 | 568 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | ケズリ | ナデ | 0.6 | 0.45 | ◎ | ◎ | | 2.5Y5/2 | 2.5Y3/1 | 2.5Y4/1 |
| 18 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | ナデ・ケズリ | ナデ・ユビオサエ | 0.65 | 0.2 | ◎ | ◎ | | 2.5Y3/1 | 5Y2/1 | 5Y3/1 |
| 19 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ・ユビオサエ | ナデ・ユビオサエ | 0.65 | 0.4 | ◎ | ◎ | | 10YR5/3 | 10YR5/3 | 2.5Y3/1 |
| 20 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | ナデ・条痕 | ナデ | 0.8 | 0.65 | ◎ | ◎ | | 2.5Y6/2 | 2.5Y7/2 | 10YR5/4 |
| 21 | 557 次 | SB283 柱穴 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ・ケズリ | ナデ・ユビオサエ | 0.7 | 0.4 | ◎ | ○ | | 2.5Y7/2 | 10Y2/1 | 10Y2/1 |
| 22 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ・ケズリ | ナデ | 0.7 | 0.5 | ◎ | | | 10YR6/3 | N1.5/ | 10YR6/3 |
| 23 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ | ナデ | 0.85 | 0.4 | ○ | △ | | 10YR5/3 | 10YR5/3 | 7.5YR3/1 |
| 24 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ | ナデ | 0.5 | 0.4 | ○ | | | 10YR4/2 | 10YR3/1 | 10YR6/3 |
| 25 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 大洞 BC 式 | 深鉢 | 刻み・刺突・ナデ・沈線 | ナデ | 0.7 | 0.45 | ○ | ○ | ○ | 10YR7/2 | 10YR6/1 | 10YR5/1 |
| 26 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 大洞 C1 式 | 深鉢 | 刻み・刺突・沈線 | ナデ | 0.6 | 0.3 | ◎ | ○ | | 7.5YR5/6 | 10YR6/4 | 5Y5/1 |
| 27 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群？ | 晩期前半？ | 深鉢 | ナデ | ナデ | 1.0 | 0.65 | ◎ | ○ | | 7.5Y2/1 | 10YR8/3 | 7.5Y2/1 |
| 28 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 篠原式？ | 深鉢 | 刺突・ナデ・ケズリ | ナデ | 0.8 | 0.55 | ◎ | ○ | | 2.5Y3/1 | 2.5Y3/1 | 2.5Y3/1 |
| 29 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群？ | 晩期前半？ | 深鉢？ | 沈線 | ナデ | 0.5 | 0.3 | ○ | | | 5YR5/6 | 5YR5/6 | 10YR5/3 |
| 30 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群？ | 晩期前半？ | 深鉢 | 縄文 | ナデ | 0.7 | 0.6 | ◎ | ○ | | 2.5Y7/3 | 10YR7/4 | 10YR7/3 |
| 31 | 557 次 | 河川 1 | Ⅴ群 | 滋賀里Ⅳ式 | 深鉢 | 刻み・ナデ | ナデ | 0.8 | 0.5 | ○ | ○ | ○ | 2.5Y6/2 | 5Y3/1 | 7.5Y5/1 |
| 32 | 557 次 | 河川 1 | Ⅴ群 | 船橋～長原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ | ナデ・ユビオサエ | 0.65 | 0.55 | ○ | ○ | | 2.5Y6/2 | 10YR6/3 | 5Y5/1 |
| 33 | 557 次 | 河川 1 | Ⅴ群 | 船橋～長原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ | ナデ | 0.8 | 0.6 | ◎ | ○ | | 10YR5/1 | 10YR4/1 | 5Y3/1 |
| 34 | 557 次 | 遺物包含層 | Ⅴ群 | 船橋～長原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ | ナデ | 0.75 | 0.65 | ◎ | ◎ | | 10YR3/1 | 2.5Y4/1 | 2.5Y4/1 |
| 35 | 557 次 | 近世土坑 | Ⅴ群 | 船橋～長原式 | 深鉢 | 刻み・ナデ | ナデ | 0.85 | 0.65 | ◎ | △ | | 10YR7/2 | 2.5Y5/1 | 10YR5/2 |
| 36 | 557 次 | 河川 1 | Ⅱ群 | 後期前半 | 浅鉢 | 縄文 LR・ナデ | ナデ | 0.7 | 0.6 | ○ | | ○ | 10YR6/1 | 2.5Y5/1 | 2.5Y5/1 |
| 37 | 568 次 | 河川 1 | Ⅲ群 | 八日市新保式 | 浅鉢 | ナデ・沈線・ミガキ？ | ナデ | 1.0 | 0.6 | ◎ | △ | | 2.5YR4/6 | 2.5YR6/8 | 7.5YR4/1 |
| 38 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 御経塚式 | 浅鉢 | 縄文 LR・沈線・ナデ | ナデ | 0.65 | 0.5 | ○ | | | 2.5Y7/2 | 2.5Y6/3 | 10YR3/1 |
| 39 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | 沈線・ミガキ | ナデ・沈線 | 0.8 | 0.35 | ○ | ○ | ○ | 10YR5/3 | 10YR3/2 | 10YR3/2 |
| 40 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ・沈線 | ナデ | 0.6 | 0.5 | ◎ | ○ | | 2.5Y3/2 | 2.5Y5/2 | 2.5Y5/2 |
| 41 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | 沈線 | ナデ | 0.55 | 0.5 | ○ | | ◎ | 2.5Y5/3 | 7.5YR5/4 | 10YR4/2 |
| 42 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ・刻み・沈線 | ナデ | 0.6 | 0.35 | ○ | | ○ | 5Y3/1 | 5Y3/1 | 5Y5/2 |
| 43 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ・沈線 | ナデ | 0.6 | 0.45 | ◎ | ○ | ◎ | 10YR5/3 | 10YR5/3 | 10YR5/3 |
| 44 | 557 次 | 遺物包含層 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | 沈線 | ナデ | 0.55 | 0.4 | ○ | ○ | ◎ | 10YR3/2 | 10YR3/2 | 10YR3/2 |
| 45 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ・沈線 | 0.55 | 0.45 | ◎ | ○ | | 2.5Y6/2 | 10Y6/2 | 7.5Y4/1 |
| 46 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ | 0.65 | 0.4 | ○ | ○ | ○ | 2.5Y3/2 | 2.5Y4/1 | 2.5Y3/2 |
| 47 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ・沈線 | 0.6 | 0.5 | ○ | ○ | | 5Y4/1 | 2.5Y4/1 | 2.5Y3/1 |
| 48 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ | 0.5 | 0.4 | ◎ | ○ | | 2.5Y4/1 | 2.5Y4/1 | 2.5Y4/1 |
| 49 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ・沈線 | ナデ | 0.65 | 0.5 | ◎ | ○ | | 7.5YR5/4 | 2.5Y4/1 | 2.5Y4/1 |
| 50 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ・沈線 | ナデ | 0.6 | 0.5 | ○ | | ○ | 2.5Y4/2 | 2.5Y4/2 | 2.5Y3/1 |
| 51 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ | 0.55 | 0.2 | ○ | ○ | | 10YR5/1 | N2/ | N2/ |
| 52 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ | 0.5 | 0.4 | ○ | ○ | | 2.5Y6/2 | 2.5Y6/3 | 2.5Y6/3 |
| 53 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ | 0.7 | 0.4 | ○ | | | 10YR7/2 | 10YR7/2 | 5Y3/1 |
| 54 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ・沈線 | 0.95 | 0.5 | ○ | ○ | | 2.5Y7/1 | 2.5Y4/1 | 2.5Y7/1 |
| 55 | 557 次 | 遺物包含層 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ・沈線 | 0.7 | 0.5 | ○ | ○ | | 2.5Y5/1 | 2.5Y5/1 | 2.5Y5/1 |
| 56 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ・沈線 | 0.8 | 0.65 | ○ | ○ | | 2.5Y5/3 | 2.5Y3/1 | 2.5Y7/2 |
| 57 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ・沈線 | 0.7 | 0.6 | ○ | | ○ | 10YR6/4 | 2.5Y6/2 | 10YR5/2 |
| 58 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ | 0.7 | 0.5 | ◎ | ○ | | N2/ | 5Y6/1 | 5Y4/1 |
| 59 | 557 次 | SA276 柱穴 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ・ケズリ | ナデ | 0.7 | 0.5 | ◎ | ○ | | 2.5Y3/1 | 2.5Y3/1 | 7.5Y2/1 |
| 60 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 浅鉢 | ナデ | ナデ・ユビオサエ | 0.75 | 0.5 | ◎ | ◎ | | 10YR6/2 | 10YR5/2 | 2.5Y5/1 |
| 61 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 深鉢 | ナデ・ユビオサエ | ナデ | 2.0 | 0.6 | ◎ | △ | | 10YR6/3 | 2.5Y4/1 | 10YR6/2 |
| 62 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 深鉢 | ナデ・ケズリ | ナデ | 1.1 | 0.8 | ◎ | △ | | 10YR4/2 | 2.5Y3/1 | 2.5Y4/1 |
| 63 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 深鉢 | ナデ・ユビオサエ | ナデ | 1.3 | 0.7 | ○ | △ | | 10YR5/3 | 10YR5/3 | 5Y3/1 |
| 64 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 鉢 | ナデ・ユビオサエ | ナデ・ユビオサエ | 1.0 | 0.5 | ◎ | ○ | | 2.5Y6/2 | 2.5Y5/2 | 5Y3/1 |
| 65 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 深鉢 | ナデ | ナデ | 0.9 | 0.4 | ◎ | ◎ | | 7.5YR7/4 | 10YR7/3 | 5Y4/1 |
| 66 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 深鉢 | ナデ | ナデ | 1.8 | 0.8 | ○ | △ | | 7.5Y7/6 | 10YR7/4 | 2.5Y3/1 |
| 67 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 土製品 | ナデ | ナデ | | | ○ | △ | | 2.5Y4/1 | 2.5Y4/1 | 10YR3/1 |
| 68 | 557 次 | 河川 1 | Ⅳ群 | 晩期前半 | 土偶 | ナデ・ユビオサエ | | | | ○ | △ | | 10YR6/4 | | 2.5Y6/1 |

**底部（61 ～ 66）**　61 ～ 63 は凹底で、いずれも二段にわたって凹んでいる。64 は平底で、底面は指頭圧痕による凹凸が顕著に認められる。65・66 は丸底で、65 は砲弾形で底面が僅かに凹む。66 は尖底に近い丸底である。

**土製品（67・68）**　67 は冠形を呈するもので、鶏冠状と円柱状の突起を有する。本来は左右に円柱状の突起を配置していたものと考えられるが、貼付痕跡は不明瞭である。後頭部部分には焼成前の穿孔が認められる。

68 は土偶の脚部で、右足と考えられる。ナデで括れ

させて足首を作り出しており、また、足の裏をユビオサエによって凹ませることにより表現している。(熊谷博志)

**弥生土器**　壺（1～3）は河川1、壷（4）、甕（5）、台付鉢(6)はＳＫ04から出土した。1は削出の段をもち、段の下位にヘラ描き沈線を２条以上施す。段の下位が欠損しているため、削出突帯の可能性もある。２は貼付突帯を２条以上巡らせ、突帯上に刻み目を加える。１・２は大和Ⅰ－２様式。３は口縁端部にヘラ状工具で斜め方向の刺突文を加える。大和Ⅱ－１～２様式。４は幅0.9㎝間に７条の櫛描き直線文を５帯めぐらせる。５はいわゆる瀬戸内系甕で、口縁端部を上方にややつまみ上げる。４・５は大和Ⅲ－１～２様式。６は口縁端部が肥厚する段状口縁を呈し、口径約18㎝をはかる。口縁部と体部外面に櫛描き簾状文を２帯めぐらせ、その下位に櫛描き原体による斜め方向の刺突文を加える。さらに、体部外面には簾状文を施した後、刻み目をもつ縦位の棒状浮文を貼り付ける。また、色調が茶褐色を呈し、胎土に角閃石を含む。こうした土器の諸特徴から、生駒山西麓産の土器と考える。河内Ⅳ－２～３様式。

奈良市内で生駒山西麓産の土器が出土した例はなく、本資料が初出である。奈良県内では出土量の多寡はあるものの、唐古・鍵、坪井・大福、平等坊・岩室遺跡など盆地内の拠点集落やその墓域から出土する場合が多い。そのため、今後、当調査区周辺で拠点集落が発見される可能性も想定できる。　(大木要)

**奈良～平安時代の土器・土製品**　ここでは主にＳＤ2005から出土した土器・土製品についてふれる。ＳＤ2005からは遺物整理箱にして30箱分の土器・土製品が出土しており、土師器、須恵器、黒色土器、三彩陶器、土製品がある。遺構の項でも述べているように溝には補修があり、補修後（ＳＤ2005ｂ）の溝に補修前（ＳＤ2005ａ）の遺物が含まれている。両者を勘案することで溝の埋まった過程を考えることができると思われる。これらの遺物は現在整理の途中ではあるが、主なものを図示し、概述する（7～28・30・32～39）。

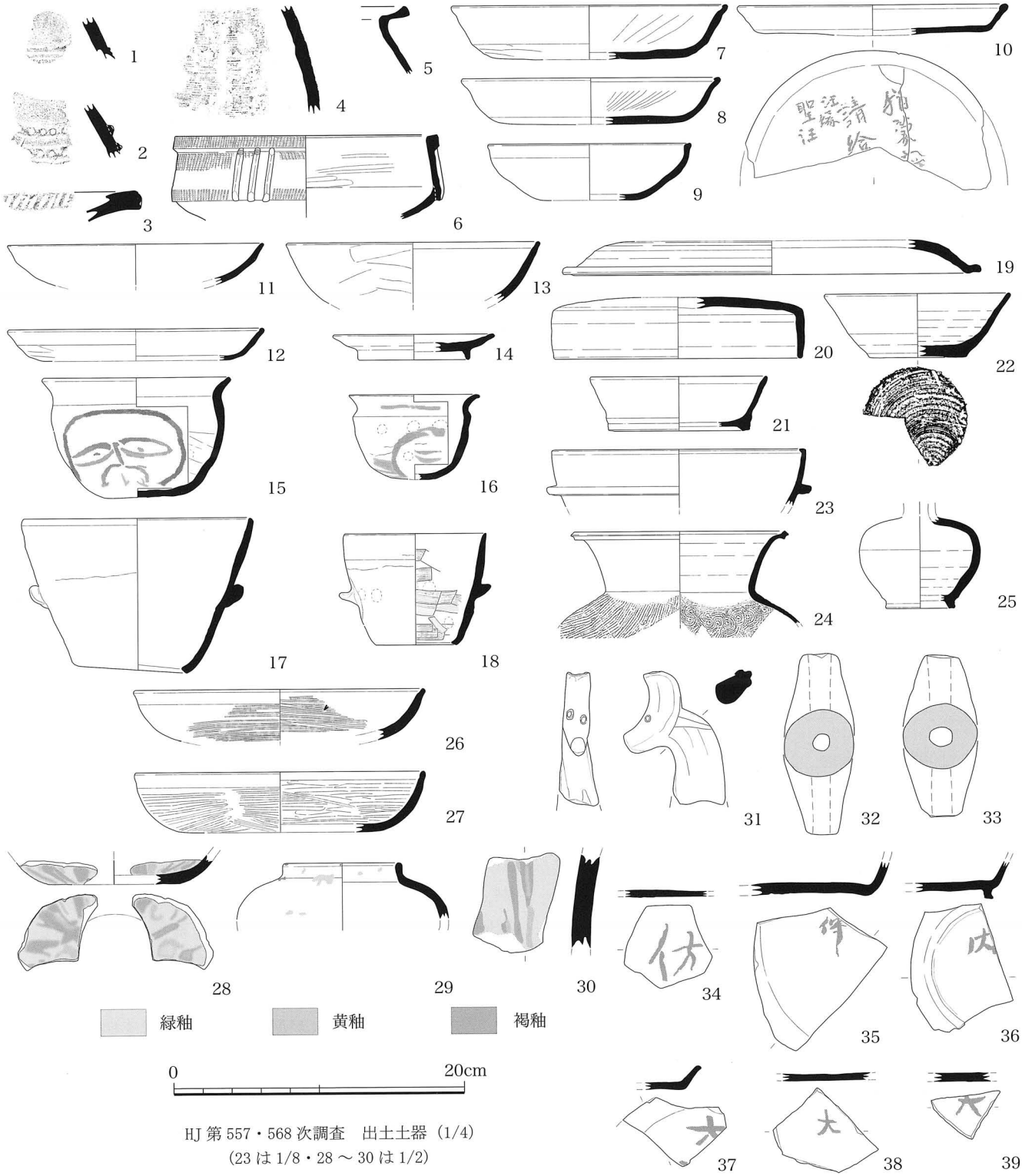
出土した器種は、土師器には杯蓋、皿蓋、杯Ａ（7・8）・Ｂ・皿Ａ（10～12）・Ｂ（14）・Ｅ、椀Ａ（13）・Ｃ（9）、盤、高杯、壷Ｂ（15･16）、甕、甑（17･18）、須恵器には杯蓋、皿蓋（19）、杯Ａ・Ｂ（21）・Ｃ・Ｅ・Ｌ、皿Ａ・Ｂ・Ｃ、椀Ａ（22）、高杯、盤、鉢Ａ･Ｆ、平鉢、平瓶、壷Ａ･Ｅ･Ｇ･Ｈ・Ｋ・Ｌ・Ｍ（25）・Ｑ、壷Ａ蓋（20）、甕Ａ（24）・Ｃ、長胴甕、羽釜（23）、黒色土器には杯、皿（26・27）、三彩陶器には椀（28）、ミニチュア長頸壷（30）、製塩土器、土製品には土馬、土錘（32・33）がある。34～39は墨書土器である(この他にも墨痕のある土器が墨書土器、人面墨書土器をあわせて約140点出土しているが、文字が判読できるものについては別表に掲げた)。8・10・15・16はＳＤ2005ａから、それ以外はＳＤ2005ｂから出土したものである。

土師器杯Ａは口縁部外面がヨコナデであるが、底部外面は7がヘラケズリ、8が木の葉圧痕を残す。内面には一段の斜放射暗文が施されるが、7は間隔が広い。皿Ｂは浅い皿部に幅の狭い断面が三角形に近い形状の高台が付く器形である。口径11.2㎝(復原)、器高1.8㎝。摩滅のため調整は不明である。黒色土器はＡ類しか出土していない。須恵器皿蓋は灰白色を呈し、やや軟質の焼き上がりである。ＨＪ第557次調査とＨＪ第568次調査で出土した破片が接合した。２点ともにＳＤ2005bから出土しており、その出土地点は約10ｍ離れている。椀は暗赤褐色を呈し、硬質の焼き上がりである。底部外面は糸切りで、体部から口縁部は粘土紐を積み上げた跡が明瞭に残る。壷蓋とともに尾張産と考えられる。23は羽釜としたが、別の器種の可能性も考えられる。ＳＤ2005ｂとＳＤ142から出土した破片が接合した。類似品が兵庫県加古川市の志方窯跡群投松２号窯から出土している。

全体を通してみると、土師器杯、皿類の形態や調整手法、椀Ｃが9世紀になるとあまりみられない器種であること、須恵器壷Ｍはすべて肩が張る胴部に高台がつく形態で、底部外面はヘラ切りの調整がないことから、これらは8世紀中頃～後半に位置づけられ、これがＳＤ2005ａの埋没時期を示すものと思われる。11・12をはじめとする土師器杯・皿類は器厚がやや薄手で、椀Ａを含め外面をヘラケズリするｃ手法のものが多い。出土土師器食器類の形態、調整手法からみて多くはこの部類に属するもので、須恵器皿蓋、杯Ｂ、黒色土器もこれらと同時期と考えられ、ＳＤ2005ｂは8世紀末から9世紀前半には概ね埋まっていたと考えられる。皿Ｂ（14）、椀（22）は9世紀前半～中頃のものと思われるが出土量は少ない。出土土器では最も新しい時期のものである。

三彩ミニチュア壷Ａ（29）はＳＤ106から、土馬（31）は遺物包含層から出土したものである。　(池田裕英)

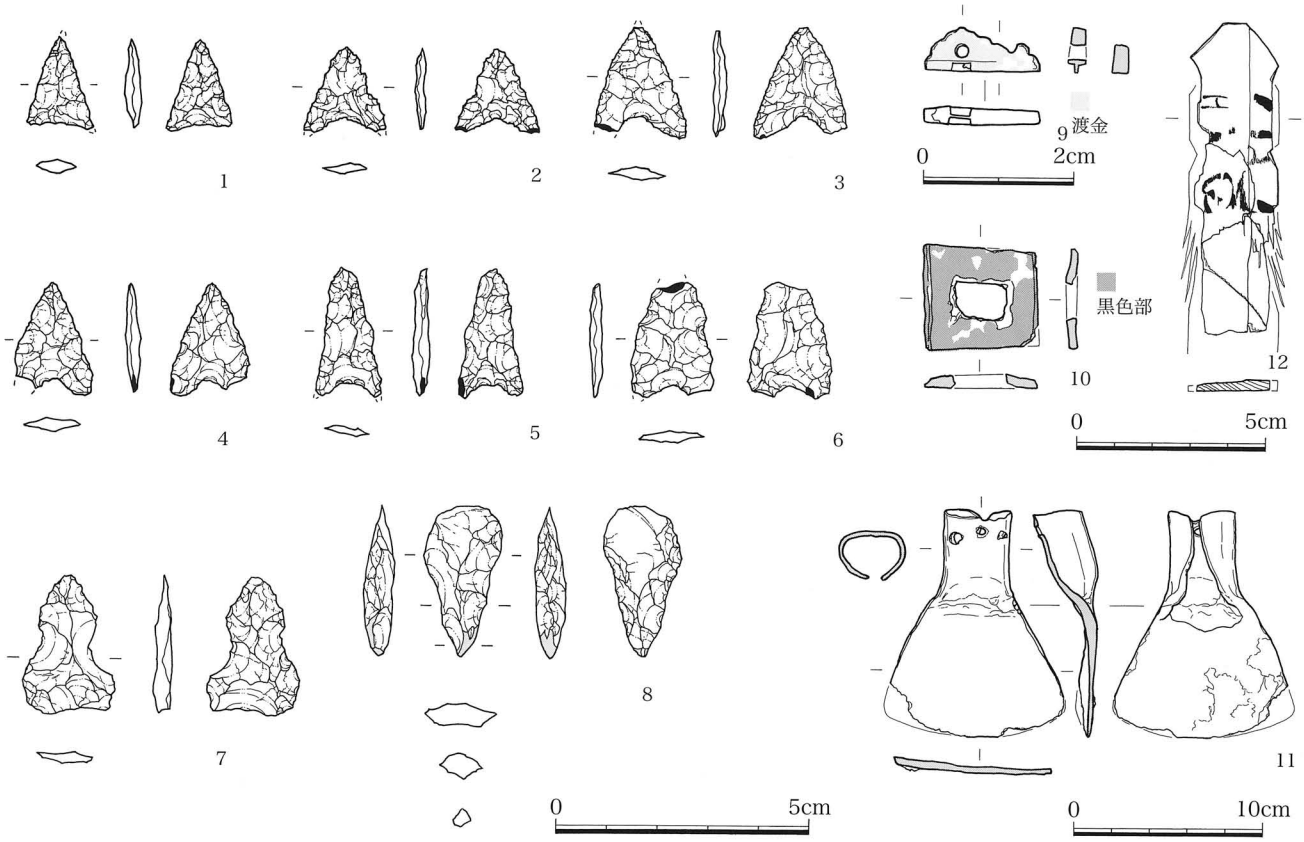
**石器**　石鏃26点（未製品含む）、錐1点、削器5点、抉入石器1点、楔形石器9点、石核14点、加工痕有剥片9点、使用痕有剥片6点、剥片142点、敲石1点、石包丁2点がある。これらは、抉入石器が珪岩製、敲石が砂岩製、石包丁が流紋岩製と緑色片岩製である以外は、全てサヌカイト製である。今回は縄文時代の石器のうち、




HJ 第 557・568 次調査　出土土器（1/4）
（23 は 1/8・28 ～ 30 は 1/2）

出土墨書土器一覧表

| 調査次数 | 出土遺構 | 種類 | 器種 | 記載位置 | 釈文 | 図版 | 調査次数 | 出土遺構 | 種類 | 器種 | 記載位置 | 釈文 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 557 次 | SD2005a | 土師器 | 皿A | 底部外面 | 聖汪 / 汪縁 / 請給 / 猶蒙慈 | 10 | 557 次 | SD2005b | 土師器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | □人 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯A | 底部外面 | 伴 | 35 | | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | 飛 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯B | 底部外面 | 内 | 36 | | 近世土坑 | 須恵器 | 壷 | 底部外面 | 千 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 皿A | 底部外面 | 大 | 37 | 568 次 | SD2005b | 土師器 | 不明 | 底部外面 | □〔大ヵ〕 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | 大 | 38 | | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | □〔大ヵ〕 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | 大 | 39 | | SD2005b | 須恵器 | 杯B | 底部外面 | □〔大ヵ〕 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | 大 | | | SD2005b | 須恵器 | 壷ヵ | 底部外面 | □〔大ヵ〕 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯A | 底部外面 | 大 | | | SD2005b | 須恵器 | 杯蓋 | 縁部外面 | □〔大ヵ〕 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯A | 底部外面 | 大 | | | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | □〔東ヵ〕 | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | 大一 | | | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | × | |
| | SD2005b | 土師器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | □〔金または金偏〕 | | | SD2005b | 須恵器 | 杯蓋 | 頂部外面 | 川または小ヵ | |
| | SD2005b | 須恵器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | □〔大ヵ〕 | | | SD148 | 土師器 | 杯ヵ皿 | 底部外面 | 佐 | 34 |




ＨＪ第557・568次調査　出土石器・金属製品・木製品（1～8は2/3、9は1/1、10・12は1/2、11は1/4）

比較的遺存状態の良い石鏃７点（１～７）と錐１点（８）を報告する。

１～６は凹基無茎鏃で、１・２は全長が２㎝以内に収まる小型のものである。２は粗雑な調整ではあるが、側縁を鋸歯状に仕上げている。３～６は基部に浅い抉りを入れるもので、側縁が外彎し、脚部の内側が膨むもの（３・４・６）と、側縁がやや内彎し、脚端部が先鋭となるもの（５）がある。７はいわゆる「五角形鏃」であり、屈曲し、抉りの入る側縁と平坦な基部をもつ。ただし、いずれも数回の剥離で調整しており、形態も不整形であることから未製品の可能性も残る。８は厚い横長剥片を素材にした錐で、錐部と頭部の区分が不明瞭なものである。背腹両面に素材剥片のポジティブな剥離面が残るが、このうち腹面側が素材剥片の主要剥離面と考えられる。錐部は両側縁から調整を施しており、先端には明瞭な摩耗痕が観察できる。１・２・３が遺物包含層、４・７・８が中世以降の素掘小溝、５が奈良時代以降の柱穴、６がＳＤ2005ｂから出土した。（大窪淳司）

**金属製品・木製品**　９は金銅製山形金具で、刀子の帯執金具の部品とみられる。下面を除いて鍍金が残る。山形の中央に貫通孔があり、ここに環金具を取り付ける例が正倉院御物にある[1]。貫通孔の下から縁にかけて表裏に刀子の鞘を固定するための金具をはめ込む四角い刳りがあり、間は薄い板状になる。板状の隅に孔があるが腐食によるものとみられる。10は鉄製金具である。表面から裏面の外縁部にかけて黒色を呈する。黒漆塗りである可能性がある。平面形は台形で左右の辺は平行、上下辺は左に向けやや八の字に広がる。中央に長方形の透孔がある。上下側面は直立、左右側面は傾斜して下に広くなるが、左側は途中で段になる。11鏟形鉄製品である。基本的には鉄斧と同様の作りであるが、身部は袋部に対して、くの字に曲がり、刃先に向かって広くなる。袋部に目釘穴が３つあり、中央の穴は外に向けて開けられている。左右の２つはめくれがなく、穿孔方向は不明である。当初は中央の穴のみで、後から補強のために他の２つが開けられた可能性がある。12は木製人形である。墨で顔などのようなものが描かれ、頭は台形に作り、首はＶ字の切り欠き、手は斜め下からの切り込みで表現する。下半身は欠損。頭部と顔部の境部分で、板の角に斜め上から切り込みが入れてあり、Ｖ字の切り欠きに復原したが、欠損の仕方から切り込みのみの可能性もある。９はＳＥ508枠内、10・11はＳＥ509枠内、12はＳＤ2005ｂから出土した。（原田香織）

## Ⅴ　調査所見

今回は縄文時代の遺物を包含する河川を確認した。河川出土土器には、摩滅が無く、外面に煤が残るものがあ

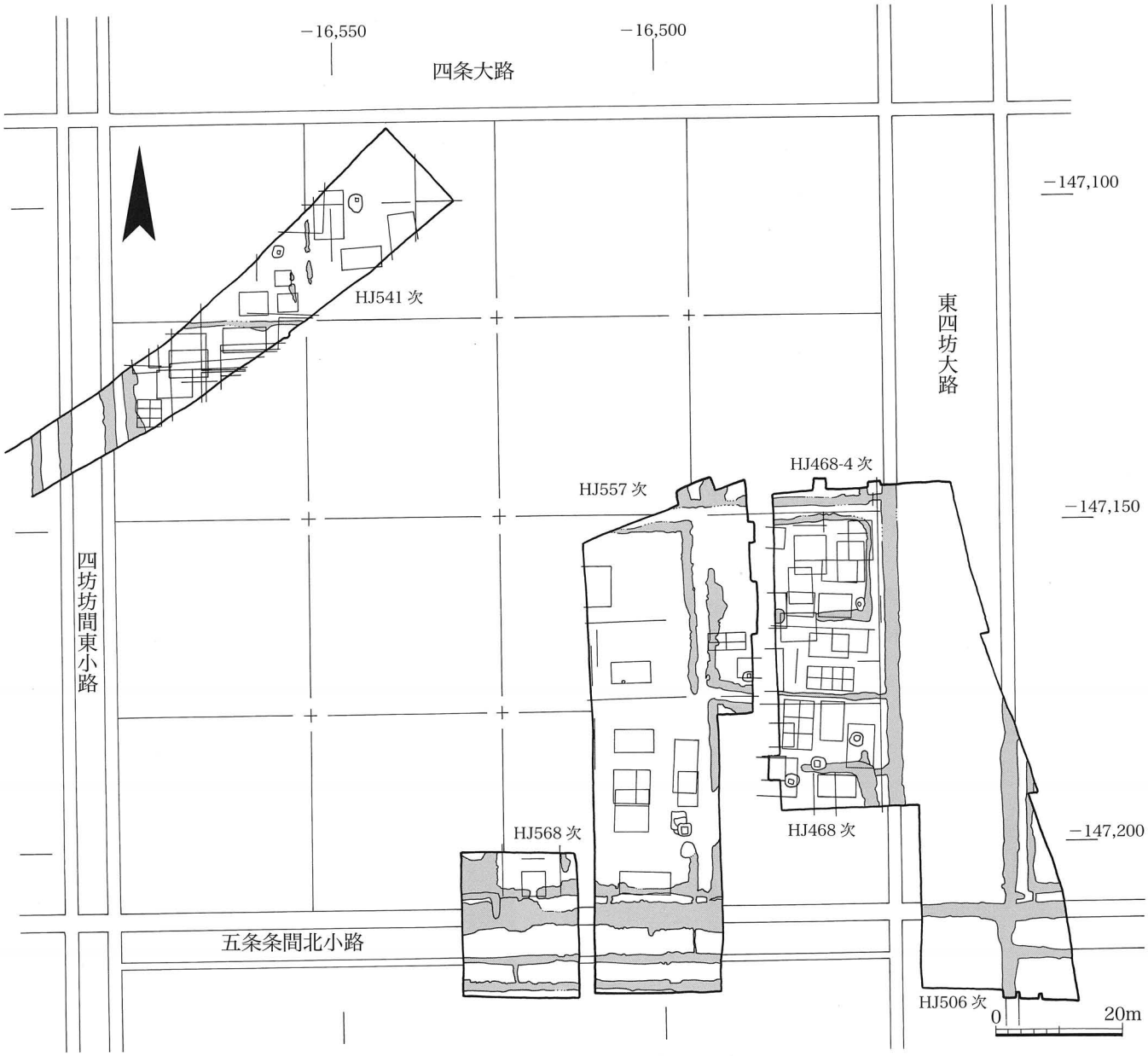
ることから、調査地付近で人が生活していたことが想定でき、今後は低湿地型貯蔵穴や、堅果類のアク抜きをするための水場遺構などの発見が期待できる。

奈良時代の成果としては、初めて左京五条四坊十五・十六坪間での五条条間北小路とその両側溝を確認した。北側溝が南側溝と比較して著しく幅広で、深いことは、本調査区西方の左京五条四坊九・十坪間、東方の左京五条五坊一・二坪間の五条条間北小路調査例でも同様であり、北側溝がこの地域の基幹排水路であったとみてよく、平城京の条坊施工計画を考える一資料となる。

左京五条四坊十六坪内の様相については、これまでの発掘調査により、東部は宅地を南北1/4に細分して利用されている可能性が指摘されていた。今回の調査では新たに東西1/4ラインで南北方向の坪内道路を、東西1/2ラインでは南北方向の坪内道路と門が確認でき、十六坪内を東西南北それぞれ4分割した1/16坪の区画を最小単位として、宅地利用していた可能性が高まった。ただし、坪東西1/2ラインで検出した門・坪内南北道路は、坪の東西にある道路の中心を基準とした1/2ラインであり、その他の1/4ラインに位置する坪内道路・塀は四周の条坊道路側溝を基準としているのとは時期差があるともみることができる。HJ第468-4・486次調査で検出されていた溝で囲繞された方形区画については、今回の調査区には無かったことから、1辺約15mの規模であると考えることができ、十六坪を16分割したうち、東から1列目の南北4区画にのみ存在する可能性が考えられる。

（原田憲二郎）

1）正倉院中倉　斑犀把金銀鞘刀子・斑犀把緑牙撥鏤鞘金銀荘刀子など




左京五条四坊十六坪の遺構配置図（1/1,000）

## 2．平城京跡（左京五条三坊十一坪）の調査　第548次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業名 | 共同住宅新築 | 調査期間 | 平成18年4月11日～4月26日 |
| 届出者名 | 個人 | 調査面積 | 101㎡ |
| 調査地 | 奈良市恋の窪東町156番6 | 調査担当者 | 池田裕英 |

### Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京五条三坊十一坪にあたる。本調査に先立ち、遺構の有無の確認のための試掘調査（05-14次）を行い、遺構面が残っていることが判明したために発掘調査を行った。

### Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、黒灰色土（耕作土）、茶橙色土・灰色粘土混合土、灰色粘土、灰褐色砂と続き、現地表下約0.8ｍで暗黄茶色土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。地山上面の標高は57.8mである。

### Ⅲ　検出遺構

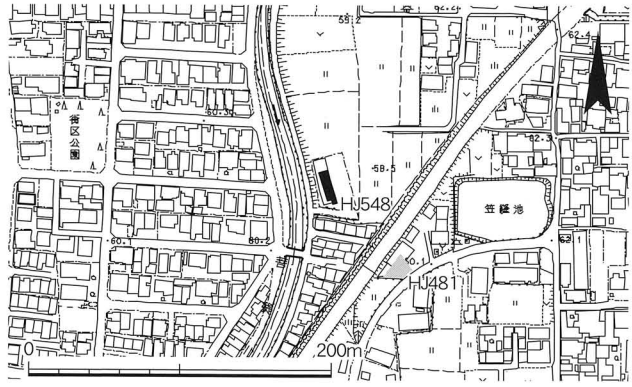
検出した遺構は河川、土坑である。SD01は調査地のすぐ西を流れる菩提川の旧流路と考えられる。幅5ｍ以上、深さは1.8ｍ以上である。埋土から奈良時代の遺物が出土したが、平安時代以降の遺物はみられず、奈良時代のうちに埋められている可能性が高い。SK02は東西1.3ｍ、南北2ｍ、深さ0.1ｍの土坑である。奈良時代の遺物が出土したが、小片が多く、詳細な時期は不明である。

### Ⅳ　出土遺物

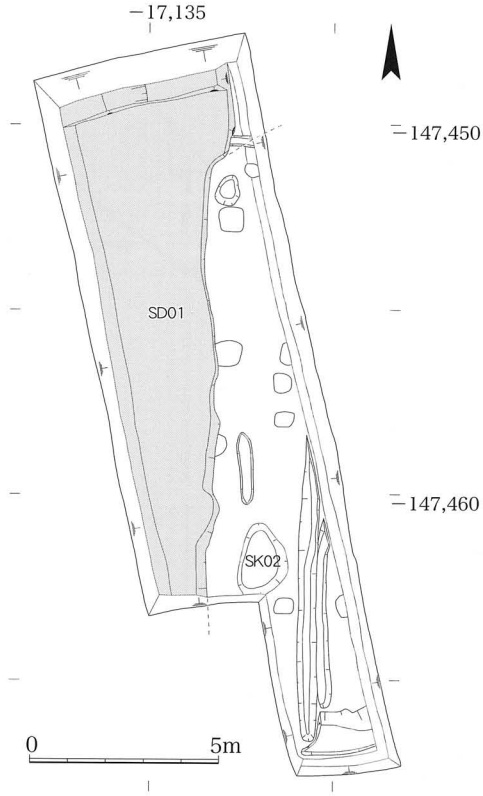
遺物は遺物整理箱で1箱分出土したが、遺構から出土した遺物はSD01から軒丸瓦（6282E）が1点出土した他は小片が多く、奈良時代のいつ頃かは特定できない。

### Ⅴ　調査所見

今回の調査では菩提川の旧流路を検出した。平城京の景観復原を考える際、新たな資料となろう。（池田裕英）

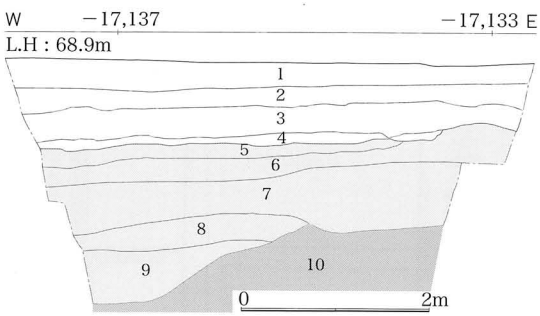



ＨＪ第548次調査　発掘区位置図（1/5,000）




ＨＪ第548次調査　発掘区遺構平面図（1/200）

発掘区全景（北から）




1 黒灰色土　2 茶橙色土・灰色粘土混合土　3 灰色粘土
4 灰褐色砂　5 茶灰色粘土　6 茶黄色粘質土　7 灰褐色土
8 灰褐色砂質土　9 暗灰褐色粘土　10 暗黄茶色土（5～9はSD01埋土）

ＨＪ第548次調査　発掘区北壁土層図（1/80）

# 3．平城京跡（左京四条二坊三坪）の調査　第550次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業名 | 店舗付事務所新築 | 調査期間 | 平成18年5月15日～6月21日 |
| 届出者名 | 良家（株） | 調査面積 | 312㎡ |
| 調査地 | 四条大路一丁目7-1他 | 調査担当者 | 武田和哉 |

## Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条二坊三坪の南辺の中央よりやや東寄り付近に該当している。調査地の西隣では平成7年度に調査を実施しており[1)]、弥生時代の溝、古墳1基、奈良時代の掘立柱建物7棟、掘立柱塀1条、井戸2基を検出していることから、今回の調査でも古墳時代や奈良時代の遺構の存在が予測された。

## Ⅱ　基本層序

発掘区西側では、造成土（0.5～0.6 m）以下、黒褐色土（旧耕作土）、暗灰色土（旧床土）と続き、地表下約0.7～0.8 mで黄褐色粘質細砂または粘土の地山へと至る。古墳時代および奈良時代の遺構は地山上面で検出した。発掘区西側の地山の標高は約58.9 mである。

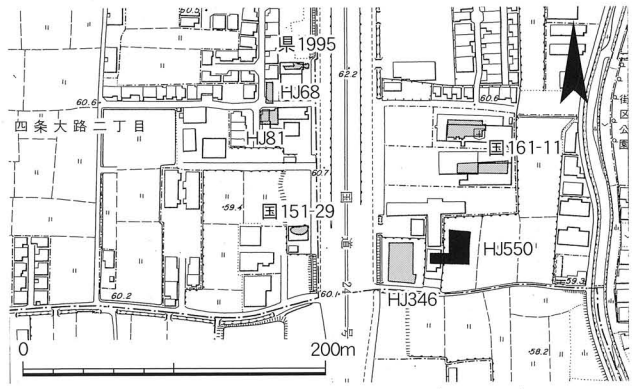
一方、発掘区中央～東側では、造成土(0.5～0.6 m)以下、黒褐色土（旧耕作土）、暗灰色土（旧床土）、暗黄褐色土（旧床土）、暗灰褐色土、暗灰色土、暗灰褐色土、茶褐色粘土と続き、地表下約1.0～1.1 mで灰褐色粘土の整地層に至る。奈良～平安時代前半の遺構面はこの層の上面であり、標高は59.5～59.7 mである。その灰褐色粘土の下には暗灰褐色粘土（整地層）があり、その下が黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は58.2～58.4 mである。

## Ⅲ　検出遺構

検出した主要遺構は、古墳時代の溝2条、奈良～平安時代の掘立柱建物3棟、掘立柱列2条、河川跡1条、鎌倉時代の井戸1基である。以下、主要遺構の概要を記す。遺構規模・出土遺物等の詳細は次頁各表を参照されたい。

**ＳＤ01**　発掘区の西側で検出した東西方向の溝で、東端付近では遺構面が下るに従って徐々に浅くなり最終的には消滅する。反対の西側は発掘区外へと続く。比較的残存状態の良い西側では、溝中央部がＶ字状に一段深くなる様相を呈する。一方、遺構面が徐々に下がる東側では、上部が削平されＶ字状を呈した溝底だけが残存する。埋土からは5世紀中葉～後葉頃の円筒埴輪の破片が出土。

**ＳＤ02**　発掘区西側で検出した南北方向の溝で、約6 m分を検出した。前述のＳＤ01に接続するとみられるが、その合流地点付近がコンクリート擁壁により破壊されており、重複関係などは明確でない。埋土の様相はＳＤ01上層に酷似するが、溝底は平坦で比較的浅い。




ＨＪ第550次調査 発掘区位置図（1/5,000）

また一部は0.6～0.9 mの幅に狭まりつつ南側へ続く。埋土から5世紀中葉～後葉頃の円筒埴輪の破片が出土した。

**河川03**　発掘区の東半で確認した南北方向の河川跡で、発掘区中央で西肩を検出。数カ所で部分的に確認調査を行った結果、東側・北側・南側は発掘区外へと続くことが判明。深さは発掘区北辺付近で約1.8 m。埋土は概ね3層に大別され、下層は砂礫が主体であり、中層は自然に堆積した粘土、上層は人為的に埋めたとみられる堆積状況である。下層からは奈良時代前半の遺物とともに木簡および削屑等が出土。埋土の様相から、奈良時代前半から中頃にかけての時期に埋め立てたものとみられ、その上から後述のＳＢ05･06とＳＡ07が構築されている。

**ＳＸ04**　発掘区北東部分で検出した性格不明の落ち込みである。河川03の埋没後に形成されている。発掘区内では南西側の肩を検出したのみで、発掘区外へと続く。幅は不明で、深さは約0.2～0.3 mある。出土遺物は少なく、奈良時代の須恵器・土師器が数点のみである。遺構の重複関係から、後述の井戸ＳＥ10よりも古い。

**ＳＢ05**　発掘区東側中央で検出した東西棟の北庇付掘立柱建物である。身舎の規模は、東西4間×南北2間。

**ＳＢ06**　発掘区東南部で検出した総柱の東西棟掘立柱建物で、東側は発掘区外へと続く可能性がある。

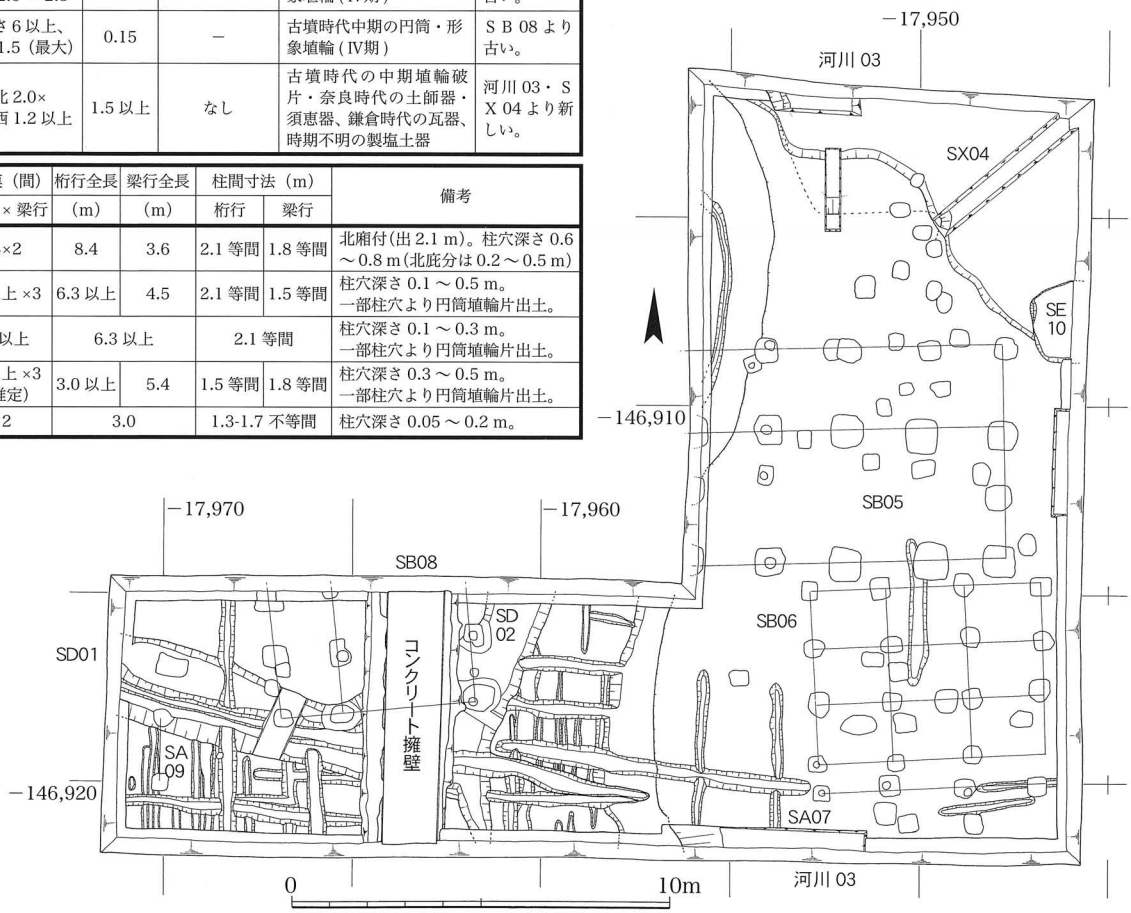
**ＳＡ07**　発掘区の東南部、ＳＢ06の南側で検出した東西方向の掘立柱列。ＳＢ06とは0.6～0.9 m程度の距離をおいてほぼ並行する位置関係にある。ＳＢ06と並存していたか否かは不明だが、同様に東側へ続く可能性がある。

**ＳＢ08**　発掘区西側で検出した南北棟の西庇付掘立柱建物。一部が擁壁で破壊されていて確定できないが、

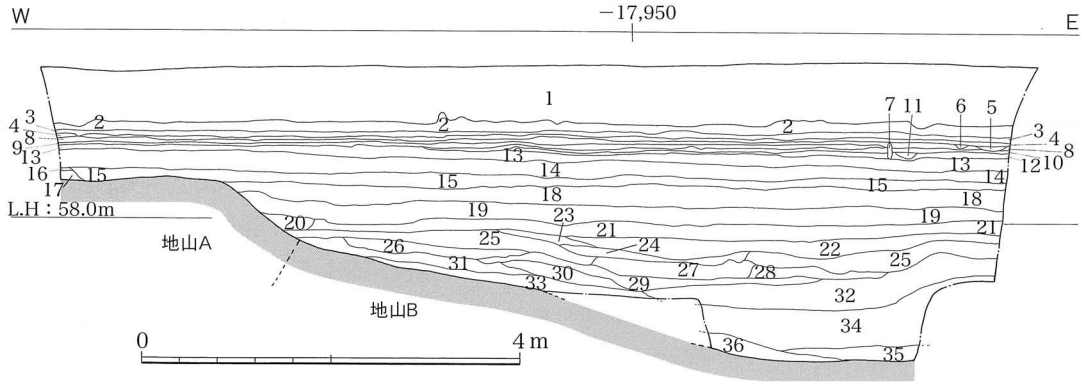
ＨＪ第550次調査　検出遺構一覧表

| 遺構番号 | 掘形 | | | 井戸枠 | | 主な出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平面形 | 平面規模（m） | 深さ（m） | 構造 | 内法（m） | | |
| ＳＤ01 | 斜行溝 | 長さ14以上、幅2.0～2.3 | 0.40 | － | | 古墳時代中期の円筒・形象埴輪（Ⅳ期） | ＳＢ08より古い。 |
| ＳＤ02 | 斜行溝 | 長さ6以上、幅1.5（最大） | 0.15 | － | | 古墳時代中期の円筒・形象埴輪（Ⅳ期） | ＳＢ08より古い。 |
| ＳＥ10 | 隅丸方形 | 南北2.0×東西1.2以上 | 1.5以上 | なし | | 古墳時代の中期埴輪破片・奈良時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の瓦器、時期不明の製塩土器 | 河川03・ＳＸ04より新しい。 |

| 遺構番号 | 棟方向 | 規模（間） | 桁行全長 | 梁行全長 | 柱間寸法（m） | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 桁行×梁行 | （m） | （m） | 桁行 | 梁行 | |
| ＳＢ05 | 東西 | 4×2 | 8.4 | 3.6 | 2.1等間 | 1.8等間 | 北廂付（出2.1 m）。柱穴深さ0.6～0.8 m（北庇分は0.2～0.5 m） |
| ＳＢ06 | 東西 | 3以上×3 | 6.3以上 | 4.5 | 2.1等間 | 1.5等間 | 柱穴深さ0.1～0.5 m。一部柱穴より円筒埴輪片出土。 |
| ＳＡ07 | 東西 | 3以上 | 6.3以上 | | 2.1等間 | | 柱穴深さ0.1～0.3 m。一部柱穴より円筒埴輪片出土。 |
| ＳＢ08 | 南北 | 2以上×3（推定） | 3.0以上 | 5.4 | 1.5等間 | 1.8等間 | 柱穴深さ0.3～0.5 m。一部柱穴より円筒埴輪片出土。 |
| ＳＡ09 | 南北 | 2 | 3.0 | | 1.3-1.7不等間 | | 柱穴深さ0.05～0.2 m。 |




ＨＪ第550次調査　発掘区遺構平面図（1/200）




1　造成土
2　黒褐色土（旧耕作土）
3　黒褐色土（旧耕作土・黒い）
4　暗灰色土（旧床土）
5　灰褐色土（砂多い）
6　灰褐色土
7　暗褐色土（杭痕）
8　暗黄褐色土（旧床土）
9　暗灰褐色土（やや砂質）
10　暗灰褐色土（やや暗い）
11　暗灰色土
12　暗灰褐色土（やや淡い）
13　暗灰褐色土（やや茶色）
14　茶褐色粘土
15　茶灰色砂（ＳＸ04埋土）
16　灰褐色粘土（整地層）
17　暗灰褐色粘土（整地層）
18　橙茶灰色粘土（河川03最終埋立整地層）
19　暗茶灰色土（奈良時代土師器包含・河川03埋立整地層）
20　暗灰色砂（粗い）
21　暗灰色粘土（炭包含）
22　暗灰色粘土（暗い）
23　暗灰色砂
24　暗灰色砂（やや暗い）
25　暗灰色粘質細砂
26　暗灰色細砂
27　暗灰色粘質細砂（炭と木片包含）
28　暗灰色細砂
29　暗灰色砂
30　暗灰色砂（細かい）
31　暗灰色砂（暗灰色粘土包含）
32　暗灰色砂（粗い）
33　暗灰色粘質細砂
34　暗褐色粘土（炭包含）
35　暗褐色粘質細砂（炭包含）
36　灰色粗砂

〔18～36＝河川03埋土〕

地山Ａ：黄灰色粘土
地山Ｂ：青灰色粘質細砂またはシルト

ＨＪ第550次調査　発掘区北壁土層図（1/80）

総柱建物であった可能性もある。北側は発掘区外へ続く。

**ＳＡ09**　発掘区西端で検出した南北方向の掘立柱列。遺構の重複関係から、前述のＳＤ01より新しい。西に延び．東西棟の掘立柱建物となる可能性もある。

**ＳＥ10**　発掘区東辺中央北寄りで検出した井戸。掘形は平面隅丸方形で、枠材はなく、埋土から埴輪片や奈良時代の土器片とともに鎌倉時代の瓦器片が出土した。

## Ⅳ　出土遺物

本調査では、古墳時代の円筒・形象埴輪、奈良～平安時代前半の須恵器・土師器・墨書土器・丸瓦・塼・土馬・竈・硯・木簡および削屑・木片、鎌倉時代の瓦器、時期不明の土錘・製塩土器・瓢箪・石器・砥石・骨等が遺物整理箱11箱分出土。以下、主要遺物の概要を報告する。（武田和哉）

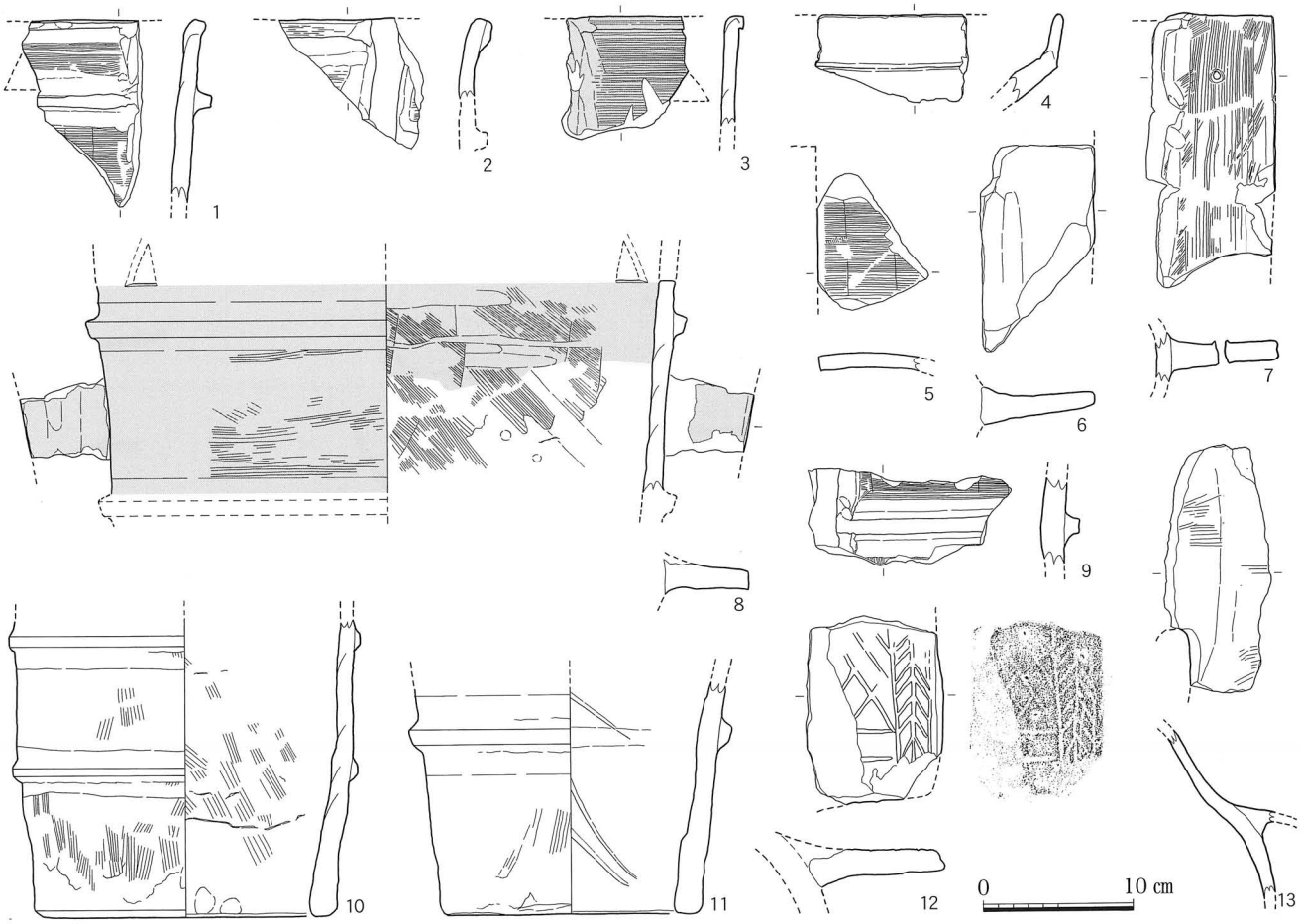
**埴輪**　埴輪は、遺物整理箱で３箱分が出土している。小片化したものが多く、ほとんどが川西編年Ⅳ期の埴輪で、ごくわずかに混在するⅤ期の埴輪片は市ＨＪ第346次調査で確認された方墳（ST02）に伴う資料と考えられる。ここではⅣ期の埴輪資料の概要について述べる。

埴輪の大半が円筒埴輪片で、形象埴輪には盾・蓋・鳥形と思われる破片が少量認められるに過ぎない。円筒埴輪の多くは鰭付であった可能性が高く、朝顔形埴輪も口縁部の存在から一定量存在する。

**円筒埴輪**　口縁端部の形態は、外側に屈曲する例（1・3・7）がほとんどで、他に突帯貼付口縁１例（2）・直立口縁２例、受け口状口縁１例（4）がある。口縁部高が判明する個体はすべて鰭付であり、1が口縁部高5.0cm、2が口縁部高7.5cm、7が口縁部高6.0cm・突帯間隔12cm前後である。これらの口縁部高は突帯間隔よりも低い。また、口縁部に小型三角形の透孔が４方向に穿孔されたと推測できる例（1・3）があり、8の上段も口縁部となる可能性が高い。1～3・6～9は鰭付円筒埴輪であり、鰭幅は6が7.5cm、7が7.8cm、8が5.8cmである。7の鰭部中央上端近くに直径0.4cmの円孔が一つ貫通する。8の外面全体と内面上半部にはベンガラの塗布がみられる。体部外面にはＢ種ヨコハケ調整が認められ、円形と方形（5）の透孔が確認できる。底部が残存する例が2個体あり、10が底部高10.3cm・突帯間隔8.8cm、11が底部高12.5～13.0cm、いずれも外面タテハケ調整である。

鰭付円筒埴輪の特徴はウワナベ古墳出土資料と共通点が多く認められ、同じ工人集団の製品である可能性が高いと推測できる。

**形象埴輪**　12は盾形埴輪の右下隅の破片で、表面の




ＨＪ第550次調査　出土埴輪（1/5）

風化が著しいものの線刻文様の一部が残る。13は鳥形埴輪の体部の一部かと思われ、羽の一部が取り付き、円形の刳り（透孔）がある。　（鐘方正樹）

**土器**　土器は遺物整理箱11箱分が出土した。本報告では、河川03出土土器について、その概要を述べる。

土師器杯A（4～8）、杯C（1～3）、杯（10）、皿A（9）、須恵器杯A（11）、杯B（12）、杯蓋（13～16）、平瓶（17）、壺（18）、甕（19）がある。土師器杯類には、斜放射状暗文が一段のもの（3・5・7）と二段のもの（4・6）があり、口縁部外面にはヘラミガキを施すものが大半である。皿A（9）の底部外面はヘラケズリで調整。須恵器杯A・B(11・12)は、底部外面にヘラケズリ痕が残る。杯蓋(13～16）は、頂部外面はロクロケズリで調整し、器高が高いものが多い。平瓶（17）は、体部に比して口縁部の開きが大きい。壺（18）は、体部の破片であるが、長頸壺になると考えられる。甕（19）の体部外面の一部にカキメ状の痕跡が残る。これらの土器は、形態的な特徴からみて8世紀前半～中頃にかけての時期のものと考える。　（武田和哉）

**木簡**　木簡は削屑も含め16点全てが河川03より出土。うち字が判読できたのは9点あり、釈文は次頁の通り。

②は断片資料。「左大史」は太政官の官人で、正六位に相当。③は衛士への食糧支給に関する内容とみられる。⑤は棒軸の断片で木口に「郡状」の墨書がある（写真A）。現存しない他方の木口に郡名を記載していた可能性がある。⑥は四周削り（写真B・C）。安芸国の白米の荷札とみられる。「三田里」は『和名抄』にみえる安芸国高田郡三田郷（現在の広島市安佐北区白木町三田）にあたる。

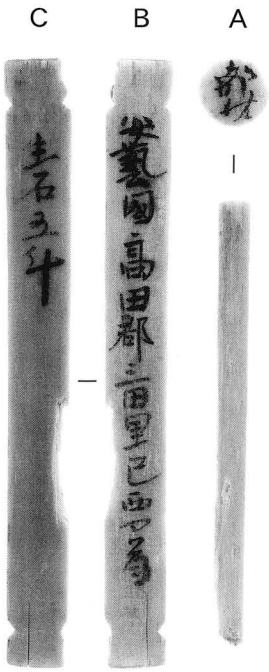
木簡の記載内容は、衛士の勤務に関するものや、官人の位署書きの断片、租税の荷札などであり、これらは平城京の一般の宅地に関わる遺物の範囲を逸脱している。また棒軸の断片は他に類例がない。これらの様相から、官司との関連性が考えられる。　（武田和哉・原田香織）

## V　調査所見

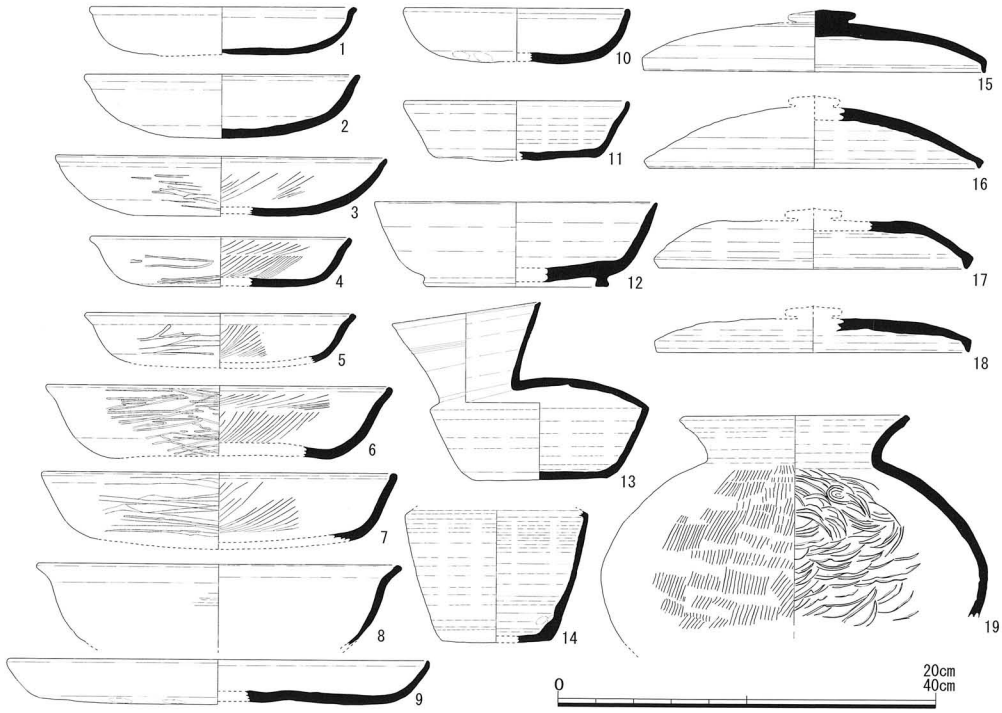
本調査で検出したSD01・02は、古墳の周濠である可能性が高く、西側の市HJ第346次調査検出の古墳（V期）よりも古い時期（IV期）の埴輪が出土している。この地域で継続的に古墳の築造が行われていたことが確認でき、周辺には他にも古墳が存在している可能性が考えられる。

奈良時代の遺構では、掘立柱建物と掘立柱列を複数検出した。そのうち掘立柱建物2棟と掘立柱列1条は河川03が埋められた後に建てられていることが確認された。河川03は調査地の北または北北西方向から、南または南南東方向へと流れていたとみられ、その埋土には奈良時代前半の土器が含まれている。下層は砂主体の埋土で、この層から木簡が多く出土していることから、木簡は上流より流出してきた可能性が高い。最終的には人為的に河川を埋立て造成した形跡があり、その後に建物等を建築している。こうした様相は、平城京内の宅地利用の実態を考える上では重要な事例と言える。　（武田和哉）

1）奈良市教育委員会「平城京左京四条二坊三坪の調査 第346次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成8年度』1997




HJ第550次調査
河川03出土木簡
（奈良文化財研究所 撮影）




HJ第550次調査　河川03出土土器（1/4・ただし13・14・19は1/8）

①
・櫃櫃石□
□　拾拾□　□□□□四石二斗
□」（薄い墨痕多数アリ）
・□　□□□
□□□□
□□九人廿六□□□　□」　(256) × 41 × 3　019
上端折れ、下端と左右両辺は削り。三片接続。右辺は大きく欠損。

②
・□　従六位上守左大史
・□□　従□位下□□　(145) × (5) × 5　081
上下両端折れ、左右両辺割れ。左大史は正六位上相当。

③
・衛士十七人　□□五升
・□　□　(141) × (13) × 6　081
上下両端折れ、左右両辺割れ。

④
「□□□　□□□□□坐
□　258 × (26) × 8　019(065)
上端と右辺削り。下端折れ、左辺割れ。一文字目の旁は「青」。
「請」などの可能性がある。

⑤
「郡状」　長 (160) ×径 10　061
棒軸の断片。他端は折れて欠損。もう一方の木口には、郡名が書かれていた可能性あり。

⑥
・「＜安芸国高田郡三田里己西マ首＜」
・「＜生石五斗　＜」　209 × 22 × 5　031
四周削り。左辺の上部切り込みより上部、及び右辺の一部は欠損。

⑦
□□命者□受□　(124) × (10) × 3　081
上端折れ、下端削り。左右両辺割れ。二文字目は「使」または「便」、五文字目は「預」または「頂」の可能性がある。

⑧
伊　091

⑨
□米一石一　091
二片接続

HJ第550次調査　河川03出土木簡釈文

発掘区全景（南東から）

発掘区西側～南側部分（西から）

発掘区中央（東から）

# 4. 平城京跡（左京五条四坊十四坪・東四坊大路）の調査　第551次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業名 | 共同住宅新築 | 調査期間 | 平成18年5月15日～5月29日 |
| 届出者名 | 個人 | 調査面積 | 137㎡ |
| 調査地 | 奈良市大安寺六丁目782-1他 | 調査担当者 | 安井宣也 |

## Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京五条四坊十四坪の北西隅及び東四坊大路の西側溝付近が想定される。現状は駐車場で、旧状は水田である。

十四坪の北東隅については、南隣の市ＨＪ第131次調査地[1]で東四坊大路西側溝の西肩から西へ約２ｍ隔てて奈良時代の柱穴が複数検出され、西隣の市ＨＪ第154次調査地[2]で奈良時代の掘立柱建物・塀、土坑が検出されたことから、奈良時代には宅地の一画で、東四坊大路に面した場所では西側溝の肩から西に約２ｍひかえて建物が建てられたことがわかっている。

東四坊大路は、南隣の市ＨＪ第131次調査地で西側溝、北方の市ＨＪ第295次[3]・第552次調査地で東側溝、市ＨＪ第468-4次[4]・第486次[5]・第506次調査地[6]で東・西両側溝や路面が検出されている。市ＨＪ第468-4次・第486次調査地では側溝の埋土上層で10世紀前半の土器が出土したことから、この付近では側溝が平安時代前半まで機能したことがわかっている。

今回の調査は、十四坪の東辺部北寄りや東四坊大路の様相の把握を目的として実施した。

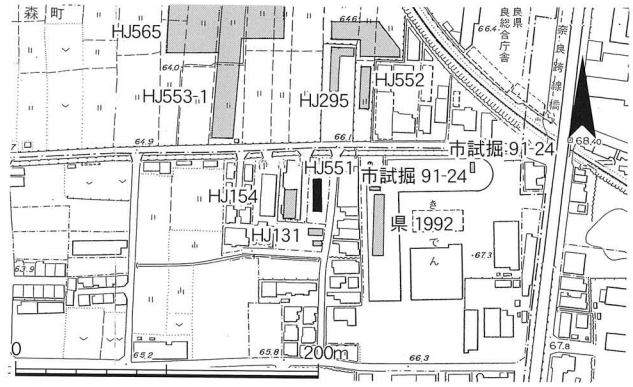
## Ⅱ　基本層序

造成土（0.9ｍ）の下に、水田耕作土のオリーブ黒色砂混じりシルト（0.15ｍ）、水田床土の暗灰黄色砂礫混じりシルト（0.15ｍ）、灰色の砂礫混じりシルトや礫混じりシルト質砂（0.3ｍ）があり、その下で扇状地の堆積層である明黄褐色砂質粘土の地山となる。

奈良時代の遺構面は地山上面で、その標高は概ね65.1ｍである。

## Ⅲ　検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、奈良時代の東四坊大路西側溝ＳＤ01、土坑ＳＫ02と柱穴を検出した。ＳＤ01とＳＫ02の概要は一覧表に記すとおりである。




ＨＪ第551次調査　発掘区位置図（1/5,000）

ＳＤ01の埋土は灰色や暗灰黄色の砂質シルト層で、土器や瓦片、炭粒を含む。溝底の標高は64.3ｍで、溝心の座標値は、Ｘ＝-147,363.00ｍ、Ｙ＝-16,463.00ｍである。ＳＫ02の埋土は黄灰色のシルト混じり砂で、地山の粘土ブロックを含む。

柱穴の大半はＳＤ01の西肩から西へ約２ｍ隔てた発掘区西辺に分布し、すぐ南の市ＨＪ第131次調査地と似た様相を示す。発掘区西壁沿いで検出しているため、建物・塀としてまとめることはできない。

## Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で６箱分が出土した。主なものは、奈良時代の土器・土製品、瓦塼、木製品、室町～江戸時代の陶磁器である。

奈良時代の土器・土製品や瓦塼の大半は東四坊大路西側溝ＳＤ01の埋土から出土した。ＳＤ01から出土した土器には、土師器甕・壷Ｂ・杯Ａ・椀Ａ・椀Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・皿Ａ・鉢Ｄ、須恵器甕・壷Ｅ・壷Ｌ・壷Ｍ・杯Ａ・杯Ｂ・杯蓋・皿Ａ・鉢Ｄと製塩土器がある。土師器椀ＡはＣ手法で調整され、奈良時代後半の様相を示す。土製品には、竈・ミニチュア甑・土馬・土錘がある。瓦は丸・平瓦が大半を占める。なお、室町～江戸時代の陶磁器は水田耕作土・床土から出土した。

ＨＪ第551次調査　検出遺構一覧表

| 遺構番号 | 平面形 | 平面規模（m） | 深さ（m） | 主な出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| ＳＤ01 | 東西溝 | 幅約3.3 | 0.9 | 奈良時代の土師器・須恵器・製塩土器、土製品、軒平瓦（6721型式Gb種）、丸・平瓦、塼 | 東四坊大路西側溝。 |
| ＳＫ02 | 不整円形 | 東西0.7ｍ×南北1.1ｍ | 0.5 | 奈良時代の土器小片、木材片 | |

## V　調査所見

十四坪の北東隅については、市ＨＪ第131次調査地と同様に東四坊大路西側溝の西肩から約２m西にひかえて建物が建てられていたことが確認できた。坪の東縁を区画する施設については、雨落ち溝とみられる遺構がないので、築地とは考えがたい。

東四坊大路については、以下のことがわかった。

①　西側溝の溝幅は、南隣の市ＨＪ第131次調査地（1.4～2.8 m）、北方の市ＨＪ第468-4・486次調査地（2.4～2.9 m）よりも広い。溝底は、南隣の市ＨＪ第131次調査地で標高64.6 m、北方の市ＨＪ第468-4・486次調査地で標高63.5 mであることから、調査地付近では南から北に向かって下ることがわかる。

②　西側溝の埋没時期は、埋土に奈良時代後半の土器を含むことから奈良時代後半～末と考えられる。

③　南隣の市ＨＪ第131次調査地の西側溝の溝心の座標値はX＝-147,393.00 m、Y＝-16,462.50 mで、本調査地との溝心の方眼方位に対する振れはN 0° 57′ 17″Wである。また、北方のＨＪ第486次調査地の西側溝の溝心の座標値はX＝-147,192.00 m、Y＝-16,464.08 mで、本調査地との溝心の方眼方位に対する振れはN 0° 21′ 42″Wである。①を勘案すれば、調査地のすぐ南方では西側溝の西肩の位置が北方よりもかなり東寄りになり、溝幅が狭まることが推察される。

④　調査地付近の東側溝心の位置は、北方の市ＨＪ第552次調査地で東側溝心の座標値がX＝-147,266.25 m、Y＝-16,446.70 mで、市ＨＪ第506次調査地との溝心の方眼方位に対する振れがN 0° 18′ 20″Wであることに基づくとX＝-147,363.00 m、Y＝-16,446.18 mに求められ、側溝心々間の距離は16.8 mと想定される。北方の市ＨＪ第486次調査地では側溝心々間の距離が17.4 mであることから、調査地以北の側溝心々間の距離は概ね17 mと想定される。　（安井宣也）


1)　奈良市教育委員会「平城京左京五条四坊十四坪の調査　第131次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和62年度』1988

2)　奈良市教育委員会「平城京左京五条四坊十四坪の調査　第154次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和63年度』1989

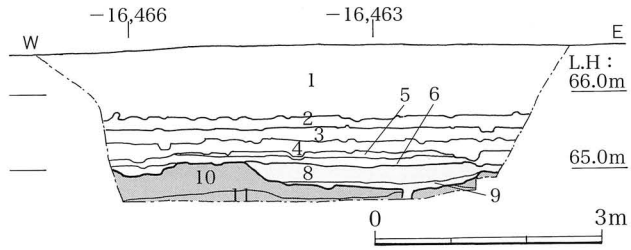
3)　奈良市教育委員会「平城京左京五条四坊・東四坊大路の調査　第295次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成6年度』1995

4)　奈良市教育委員会「平城京跡（左京五条四坊十六坪）の調査　第468-4次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成13年度』2005

5)　奈良市教育委員会「平城京左京五条四坊の調査　第486次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成14年度』2006

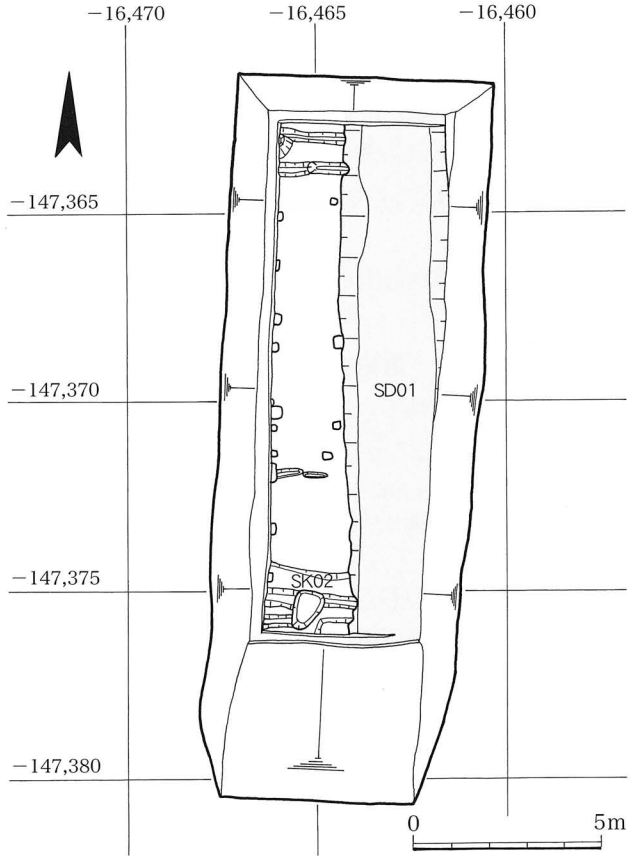
6)　奈良市教育委員会「平城京左京五条五坊一・二坪、東四坊大路、条間北小路の調査　第506次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成15年度』2006

発掘区全景（南から）




1　造成土
2　オリーブ黒色砂混じりシルト
3　暗灰黄色砂礫混じりシルト
4　灰色砂礫混じりシルト
5　灰色礫混じり砂質シルト
6　灰色礫混じりシルト質砂
7　黄灰色礫混じり砂質シルト
8　灰色礫混じり砂質シルト
9　暗灰黄色砂質シルト
10　明黄褐色砂質粘土
11　黄色シルト・粘土質砂礫
※　2　水田耕作土
3～6　水田床土
7　柱穴埋土
8・9　ＳＤ01埋土
10・11　地山

ＨＪ第551次調査　発掘区北壁土層図（1/100）




ＨＪ第551次調査　発掘区遺構平面図（1/200）

# 5．平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査　第554次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業名 | 宅地造成 | 調査期間 | 平成18年6月8日～6月14日 |
| 届出者名 | エヌ・ティ・ティ都市開発（株） | 調査面積 | 34㎡ |
| 調査地 | 奈良市法蓮町930番1・931番1 | 調査担当者 | 池田裕英 |

## Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京二条五坊北郊にあたる。本調査地の西側の敷地（旧制奈良中学校跡地）で昭和59年度に奈良県教育委員会が発掘調査を実施しており、奈良時代の柵列や井戸2基を検出している。そのうちの1基からは「床滑家主」と墨書された須恵器の杯が出土しており、注目される。[1)]

## Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、上から造成土、黒灰色土（旧耕作土）、灰褐色砂質土（床土）と続き、現地表下約1.4mで黄茶色土の地山にいたる。遺構はすべてこの地山上面で検出した。地山上面の標高は概ね74.6mである。発掘区の南半部は、以前に建っていた建物の基礎で地山面が削平されてしまっていた。

## Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は、時期不明の柱穴と溝である。SD01は東北から西に流れ、幅2.7～0.5m、深さは0.5mである。埋土は茶褐色土・黄茶色土（土層図6・7）で、水が流れていたと推測されるが、遺物が出土せず時期は不明である。柱穴はいずれも深さ0.2m程度である。並ぶものはなく、遺物も出土しなかったので時期は不明である。

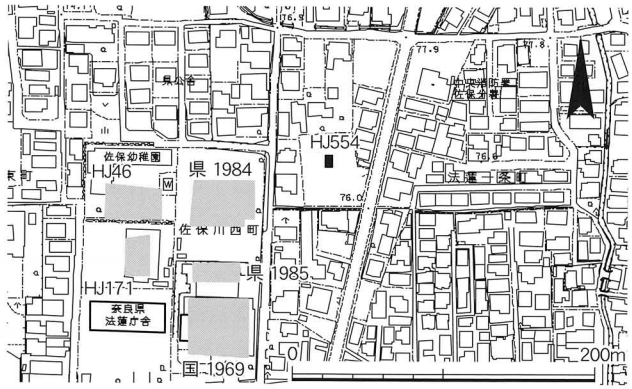
## Ⅳ　出土遺物

本調査では、遺物は出土しなかった。

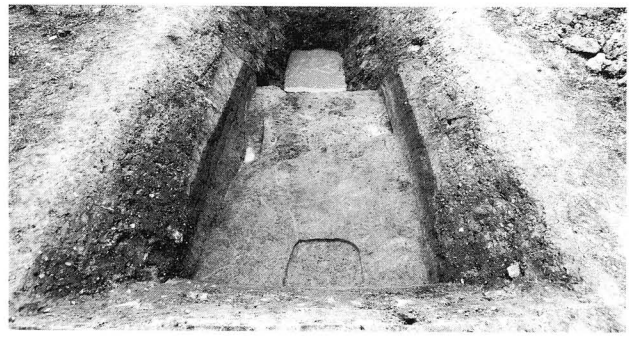
## Ⅴ　調査所見

今回の調査では、遺構を検出したものの、遺物は出土せず、攪乱で壊されている部分もあり、遺跡の具体的な様子を明らかにすることはできなかった。　（池田裕英）

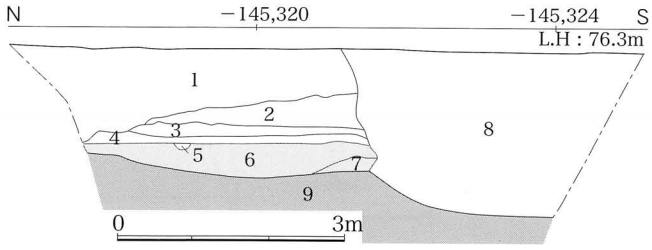
1）奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京二条五坊北郊」『奈良県遺跡調査概報』1985年度（第2分冊）　1986




ＨＪ第554次調査　発掘区位置図（1/5,000）

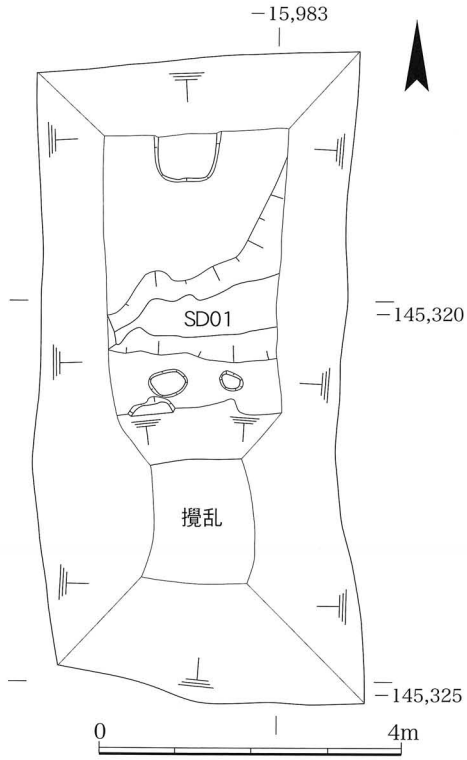


発掘区全景（北から）




1 造成土　2 茶黄色土　3 黒灰色土（旧耕作土）　4 灰褐色砂質土（床土）
5 灰褐色砂　6 茶褐色土　7 黄茶色土　8 攪乱土　9 黄茶色粘土（地山）

ＨＪ第554次調査　発掘区東壁土層図（1/100）




ＨＪ第554次調査　発掘区遺構平面図（1/100）

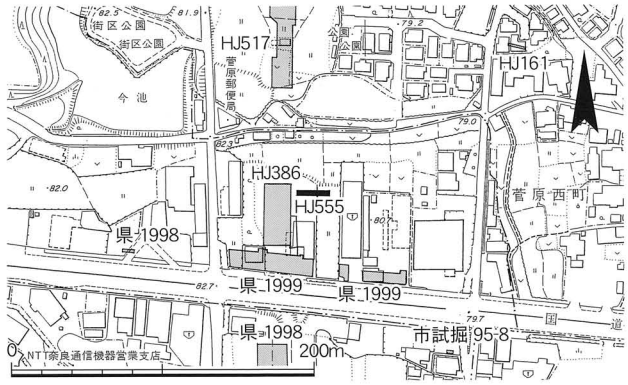
# 6．平城京跡（右京三条四坊十坪）の調査　第555次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業名 | 店舗付事務所新築 | 調査期間 | 平成18年6月12日～6月27日 |
| 届出者名 | 大和工商リース㈱ | 調査面積 | 77㎡ |
| 調査地 | 奈良市宝来町948-1他 | 調査担当者 | 安井宣也 |

## Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京三条四坊十坪の中央部にあたる。現状は盛土造成地で、旧状は水田である。西隣接地で実施された市ＨＪ第386次調査（平成9年度）では奈良時代の掘立柱建物・塀、井戸、溝、土坑と縄文時代後期初頭の土坑が検出された。

今回の調査は、奈良時代の十坪内の宅地の様相の確認を主な目的として実施した。




ＨＪ第555次調査　発掘区位置図（1/5,000）

## Ⅱ　基本層序

造成土（1.1 m）、水田耕作土（0.3 m）、同床土（0.1～0.3 m）の下で沖積層である灰色砂混じりシルト質粘土の地山となる。奈良時代の遺構面は地山上面で、その標高は79.3～79.4 mである。なお、水田床土と地山の上面には乾田に特有の斑鉄がみられる。

## Ⅲ　検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、平安時代前期の掘立柱列1条（ＳＡ01）と、時期不明の柱穴、土坑を検出した。

ＳＡ01は東西２間（3.3 m等間）の掘立柱列で、南北棟建物の妻柱列の可能性がある。全ての柱穴に柱痕跡が残る。中央の柱穴の掘形埋土から10世紀初頭頃の土師器皿片が出土した。

## Ⅳ　出土遺物

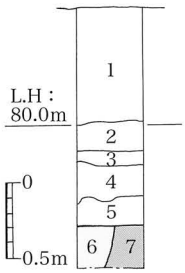
遺物整理箱２箱分あり、その大半が奈良～平安時代前期の土師器・須恵器である。

ＳＡ01の柱穴から出土した10世紀初頭頃の土師器皿はｅ手法で調整され、口縁部は外反する。

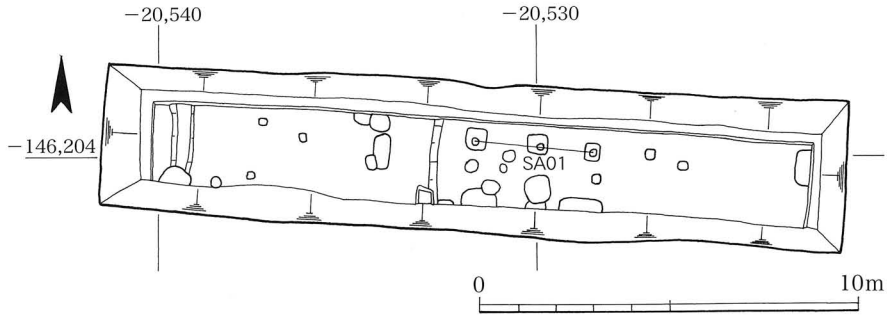
## Ⅴ　調査所見

十坪内の宅地利用が平安時代前期まで継続した可能性が高いことが判明した。　（安井宣也）

発掘区全景（東から）




1　造成土
2　黒褐色砂質シルト
3　灰色シルト質砂
4　灰色砂質シルト・粘土
5　灰オリーブ色砂質シルト・粘土
6　灰色砂質シルト＋7層ブロック
7　灰色砂混じりシルト質粘土
※　2・3　水田耕作土
　　4・5　水田床土
　　6　柱穴埋土
　　7　地山（沖積層）




ＨＪ第555次調査　発掘区西半部土層柱状図（1/50）・発掘区遺構平面図（1/200）

# 7．平城京跡（左京三条六坊十一坪）・奈良町遺跡の調査　第556次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業名 | 個人住宅・賃貸住宅新築 | 調査期間 | 平成18年6月19日～6月30日 |
| 届出者名 | 個人 | 調査面積 | 62㎡ |
| 調査地 | 奈良市小西町24-1、24-2、24-3 | 調査担当者 | 池田裕英 |

## Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条六坊十一坪にあたり、中・近世には興福寺や元興寺を中心にして栄えた奈良町遺跡の範囲内でもある。今回の調査は建物予定地内の東西2箇所に発掘区を設けて調査を実施した。

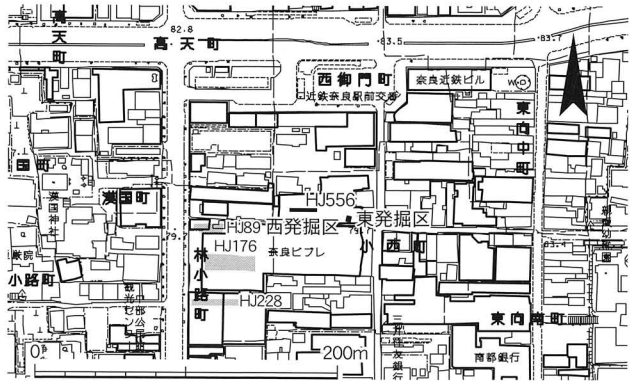
## Ⅱ　基本層序

**西発掘区**　基本的な層序は、上から造成土・真砂土、暗灰褐色土と続き、現地表下約1.5mで黄褐色砂礫の地山にいたる。遺構はこの地山上面で検出した。地山上面の標高は79.8mである。

**東発掘区**　発掘区内の層序は、上から造成土、暗灰褐色土と続き、現地表下1.1mで茶黄色土の地山にいたる。遺構はこの地山上面で検出した。地山上面の標高は80.2mである。

## Ⅲ　検出遺構

**西発掘区**　検出した遺構は、井戸、土坑、溝である。SE01は平面規模が東西1.2m、南北0.7m以上、深さ0.3m以上の井戸、SE02は東西2.3m以上、南北0.5m以上、深さ0.2m以上の井戸である。SE01・02とも湧水が激しく、崩れる危険性があり、これ以上掘り下げることができなかった。SE01から17世紀前半の土師器・陶器片が、SE02から13世紀前半の土師器・瓦器・陶器片が出土した。SK03は東西1.2m、南北0.7m以上、深さ0.1mの土坑である。埋土から17世紀前半の瓦質土器片が出土した。




ＨＪ第556次調査　発掘区位置図（1/5,000）

**東発掘区**　SK04は東西0.8m以上、南北1.5m、深さ0.2mの土坑である。18世紀の陶器、磁器片が出土した。

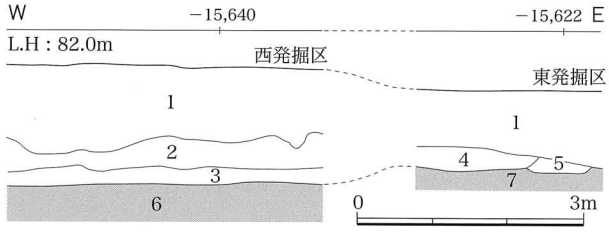
## Ⅳ　出土遺物

今回の調査では、遺物整理箱にして2箱の遺物が出土した。SE01から出土した遺物には、信楽焼の擂鉢・備前焼の甕・瀬戸美濃焼の椀・土師器皿がある。SE02から出土した遺物には、土師器皿・瓦器椀・東播系の鉢がある。遺物包含層からは奈良時代や平安時代の土師器、須恵器が出土している。

## Ⅴ　調査所見

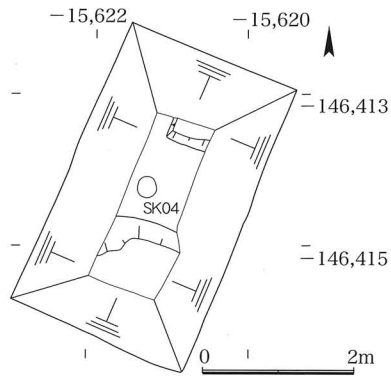
今回の調査では、中・近世の遺構を検出したが、奈良時代や平安時代の遺構はなかった。当該時期の遺物は少量出土したにすぎず、遺構面は削平をうけていると思われる。

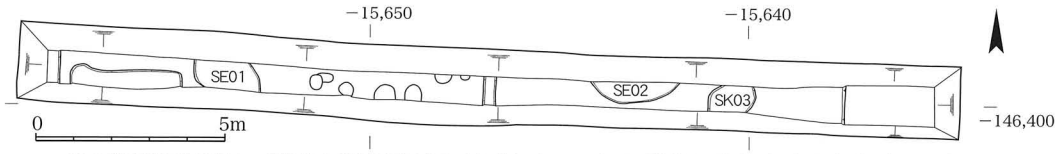
（池田裕英）




1 造成土　2 真砂土　3 暗灰褐色土　4 暗灰褐色粘質土　5 暗灰色粘土
6 黄褐色砂礫　7 茶黄色土（6・7は地山）

ＨＪ第556次調査　西発掘区・東発掘区北壁土層柱状図（1/100）




ＨＪ第556次調査　東発掘区遺構平面図（右上）（1/100）・西発掘区遺構平面図（下）（1/200）

# 8. 平城京跡（左京二条七坊五坪）・奈良町遺跡の調査　第558次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業名 | 共同住宅新築 | 調査期間 | 平成18年7月10日～8月7日 |
| 届出者名 | 個人 | 調査面積 | 131㎡ |
| 調査地 | 奈良市南半田西町8 | 調査担当者 | 安井宣也 |

## Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京二条七坊五坪の北西部にあたる。興福寺のすぐ北側で、室町時代は興福寺寺門郷の吐田郷、江戸時代は奈良町の一画である。

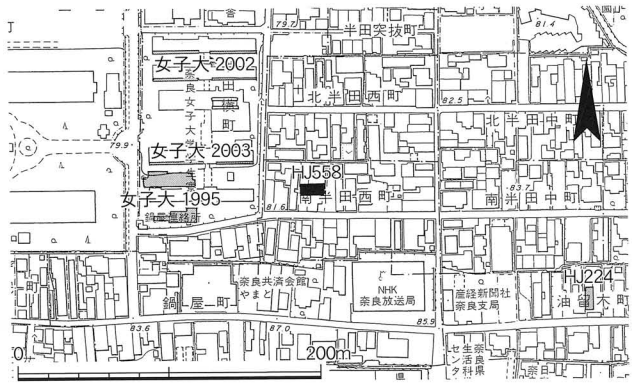
調査地西側の奈良女子大学寮の敷地内では平成7～15年度に発掘調査が実施され、室町時代の14世紀前半の河川を埋めた整地土と井戸・溝、15世紀の整地土と溝・土坑、江戸時代の17世紀前半～19世紀の与力屋敷に関連するとみられる井戸・土坑が検出された[1)]。

今回の調査は、五坪北西部の様相及び平安時代以降における土地利用の様相の把握を目的として実施した。

## Ⅱ　基本層序

盛土（0.3～0.7 m）の下に、江戸時代以降の整地土（0.7～0.8m）、室町時代の整地土（0.5～0.6 m）があり、その下で灰黄色砂礫の地山上面となる。

江戸時代以降の整地土はシルト質砂で3～4層あり、17世紀以降の陶磁器片を含む。室町時代の整地土は上位がシルト・粘土、下位が砂礫主体で、12～14世紀の土器片や8世紀以降の瓦片を含む。上面の標高は概ね80.5 m。奈良時代の遺構面は地山上面である。その標高は80.1～80.6 mで、東・西辺が高い。なお、室町時代の整地土と地山の間に奈良時代の遺物包含層はなかった。

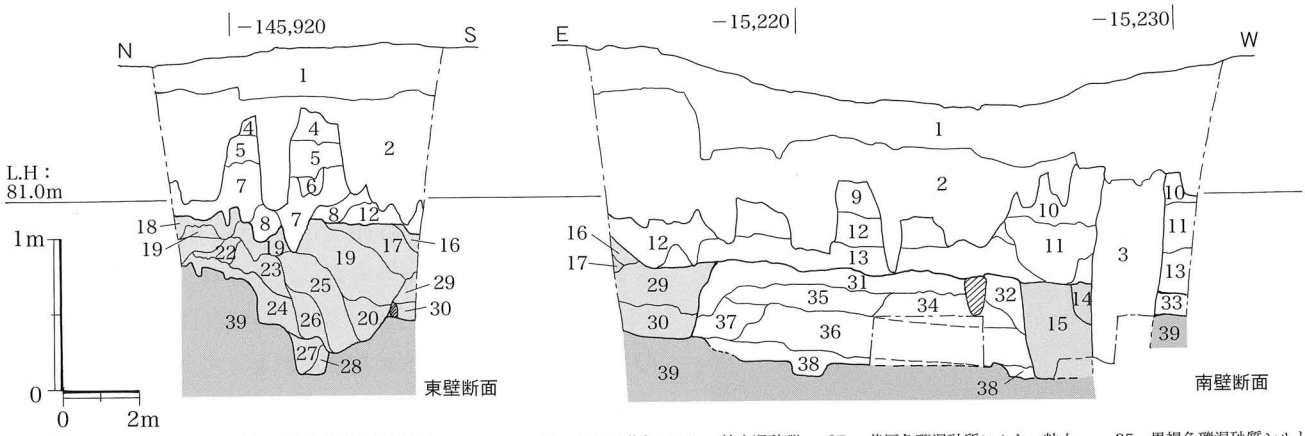



ＨＪ第558次調査　発掘区位置図（1/5,000）

## Ⅲ　検出遺構

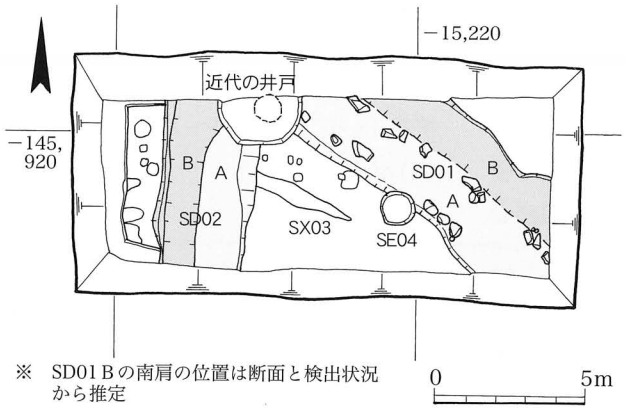
室町時代の整地層上面で遺構検出を行い、室町時代の溝2条（ＳＤ01・02）、土器埋納遺構1基（ＳＸ03）・井戸1基（ＳＥ04）・小土坑を検出した。

**ＳＤ01Ａ・Ｂ**　発掘区東寄りで検出した南東から北西に斜行する溝。Ａは当初のもので、北肩は後述するＢの掘削時に破壊されている。深さ0.5 mで、幅は2 m程度。底面の両肩沿いに人頭大の三笠安山岩の角礫を据える。埋土は流水成のシルト・粘土や砂礫。ＢはＡの埋没後に北寄りに掘り直されたもので、幅2～2.5 m、深さ0.8 m。埋土は、底面付近が流水成の砂質シルトや粘土質砂で、その上が14～15世紀の土器片や8世紀以降の瓦



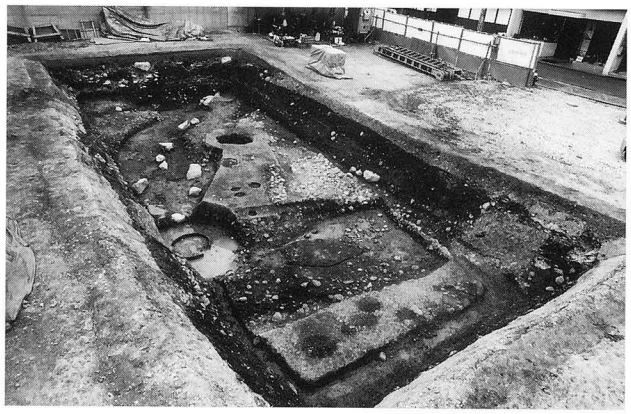

1　盛土
2　近・現代の造成土
3　近代の井戸埋立土
4　黒褐色礫混シルト質砂
5　暗灰黄色礫混シルト質砂
6　灰白色粘土ブロック
7　暗灰黄色礫混シルト質砂
8　黒褐色礫混シルト質砂
9　黄灰色礫混シルト質砂
10　黒褐色礫混シルト質砂
11　黒褐色礫混シルト質砂＋灰色砂質シルトブロック
12　灰黄褐色礫混シルト質砂
13　灰黄褐色シルト質砂礫（4～13：江戸時代の整地層）
14　暗オリーブ褐色シルト混砂礫
15　暗灰黄色礫混砂質シルト・粘土（14：ＳＤ03Ｂ埋土、15：同Ａ埋土）
16　灰白色砂質シルトブロック
17　暗灰黄色シルト質砂礫
18　にぶい黄色シルト・粘土混砂礫
19　灰黄褐色礫混砂質シルト
20　黒褐色礫混シルト質砂
21　黄褐色礫混シルト混砂
22　黄灰色礫混シルト質砂
23　暗灰黄色礫混シルト質砂
24　黄灰色礫混砂質シルト
25　黄灰色シルト混砂礫
26　黄灰色礫混砂質シルト（16～26：ＳＤ02-Ｂ埋立土）
27　黄灰色礫混砂質シルト・粘土
28　暗灰黄色粘土混砂
29　暗灰黄色礫混砂質シルト・粘土
30　暗灰黄色シルト・砂混礫（27・28：ＳＤ01Ｂ埋土、29・30：同Ａ埋土）
31　黄褐色礫混砂質シルト・粘土
32　暗灰黄色シルト混砂礫
33　オリーブ黒色礫混砂質粘土
34　黄灰色シルト混砂礫
35　黒褐色礫混砂質シルト・粘土
36　黄灰色砂質粘土混礫
37　黄灰色礫混砂質シルト
38　暗灰黄色砂礫（31～38：室町時代の整地層）
39　灰黄色砂礫（やや固結）（39：地山）

ＨＪ第558次調査　発掘区東・南壁土層図（縦：1/50、横：1/200）

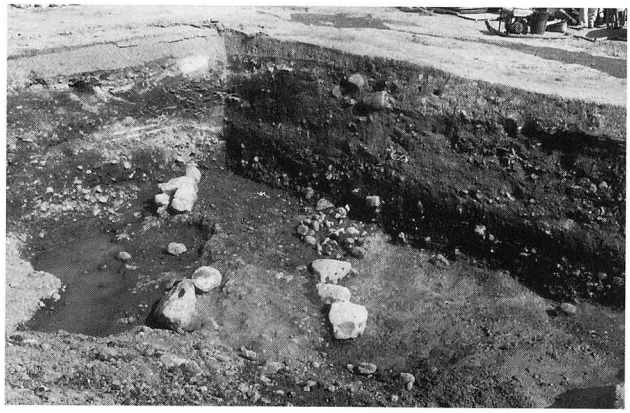



※　SD01Bの南肩の位置は断面と検出状況から推定

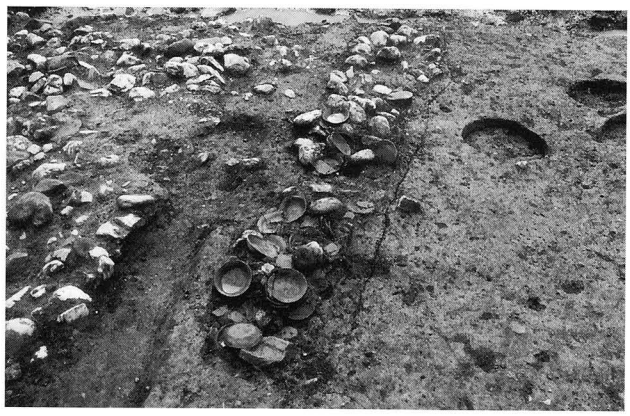
ＨＪ第558次調査　発掘区遺構平面図（1/250）



発掘区全景（北西から）



溝ＳＤ01Ａ　完掘状況（北西から）



土器埋納遺構ＳＸ03（東から）

片を含む砂質シルトやシルト質砂の埋立て土である。

**ＳＤ02**　発掘区西辺で検出した南北方向の溝。Ａは当初のもので、幅３ｍ、深さ0.6ｍ。ＢはＡの埋没後に掘り直されたもので、幅１～1.3ｍ、深さ0.2ｍ。ともに埋土は流水成のシルトや砂礫で、14～15世紀の土器片や８世紀以降の瓦片を含む。前述のＳＤ01との重複関係は、交差する箇所に近代の井戸があるため不明。

**ＳＸ03・ＳＥ04**　ＳＸ03は、ＳＤ01の南肩に沿って掘られた幅0.5m、深さ0.1ｍの溝状の掘形内に、10枚程度を１組にして積み重ねた土師器皿を２列に据える。土師器皿は14世紀中頃のもの。重複関係からＳＤ02Ａよりも古い。ＳＥ04は径１ｍの平面円形の井戸で、掘形のみを検出。重複関係からＳＤ01Ａよりも新しい。

なお、奈良時代の遺構面である地山上面については、発掘区壁面の断面観察で遺構や地形改変の形跡が全くみられなかったため、遺構検出を行わなかった。

## Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱80箱分があり、土器と瓦類が大半を占める。

土器は16箱で、鎌倉時代の12世紀末～13世紀前半の土師器皿・瓦器椀や室町時代の14～15世紀の土師器皿・土師器羽釜・瓦質土器鉢等があり、日用品が多い。

瓦類は60箱で、奈良時代と平安時代以降のものがあり、ともに平瓦が圧倒的に多い。奈良時代の軒丸瓦6282型式Ｄ種が室町時代の整地土上面から１点出土している。

なお、室町時代の整地層や溝ＳＤ01・02の埋土からは鞴の羽口や鉄滓が出土し、鍛冶工房の存在がうかがえる。

## Ⅴ　調査所見

①　奈良時代の土地利用の形跡は特にみられない。

②　室町時代の14世紀前半頃に整地が行われて居住地となり、江戸時代以降も整地と建替えを繰り返して町屋に利用されている。

③　室町時代の溝ＳＤ01･02は、埋土の様相から上流側で河川と接続する水路とみられる。両者の先後関係については、掘形が溝ＳＤ01の南肩に沿う土器埋納遺構ＳＸ03が溝ＳＤ02よりも古いことから、溝ＳＤ01が14世紀前半頃に掘削され、溝ＳＤ02は15世紀に溝ＳＤ01Ｂが埋められた後に掘削されたと考えられる。

④　本調査地西側の奈良女子大学調査地においても、14世紀前半頃の整地土や、溝ＳＤ02と同時期の15世紀の整地土がみられる。本調査地と奈良女子大学調査地とは室町時代の土地利用の転換期が対応しており、調査地一帯で河川や水路の付替えを伴う居住地の造成が14世紀前半と15世紀に行われた可能性がある。　（安井宣也）

1）　奈良女子大学『奈良女子大学校内遺跡発掘調査概報７』　2004

# 9．平城京跡左京三条六坊十坪・奈良町遺跡の調査　第559次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業名 | 店舗新築 | 調査期間 | 平成18年8月16日～平成19年1月31日 |
| 届出者名 | (株) 南都銀行 | 調査面積 | 810㎡ |
| 調査地 | 奈良市高天町1番3　他 | 調査担当者 | 中島和彦　池田裕英 |

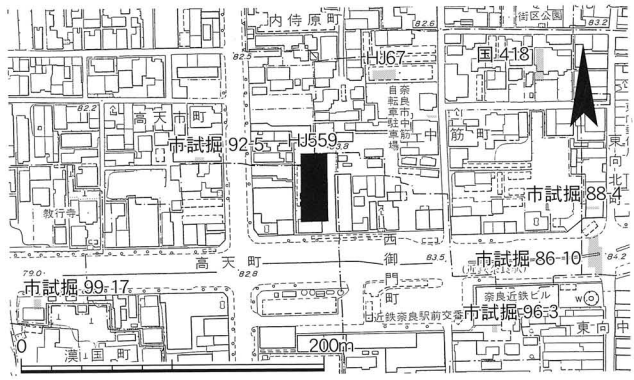
## Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条六坊十坪の南西部にあたり、中世以降は興福寺を中心として発達した奈良町遺跡の中央部にあたる。また調査地は、興福寺から北西方向にのびる台地上にあり、発掘区は南側が高天町、北西部が高天市町、北東部が中筋町の3町にまたがる。十坪内の発掘調査にはHJ第67次調査があり、12世紀後半からの各時期の遺構・遺物を確認している。調査地南側約150 mの林小路町内の発掘調査でも、奈良時代から現代にいたる各時期の遺構・遺物を数多く確認しており、中近世の遺構密度が高い地域である。

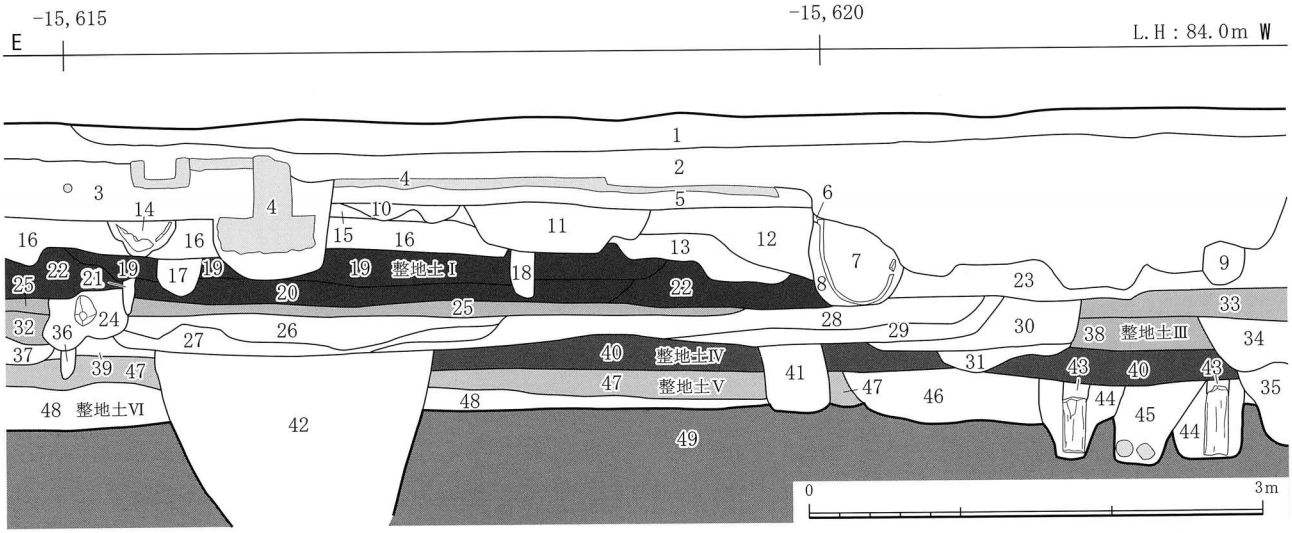
発掘調査は南北2回に分けて行い、さらに上層（室町～江戸時代）と下層（奈良～鎌倉時代）の2回行った。

## Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は奈良時代以降の各時期の遺構・整地等のため複雑であるが、おおよそ上から近代の造成土、整地土Ⅰ(18世紀頃)、整地土Ⅱ(17世紀頃)、整地土Ⅲ(14世紀頃)、整地土Ⅳ（12～13世紀頃）、整地土Ⅴ（11世紀頃）、整地土Ⅵ（8世紀頃）とつづき、現地表下1.7～2.0 mで明橙色粘土（白色粘土・礫を含む）の地山に




ＨＪ第559次調査　発掘区位置図（1/5,000）




1　漆喰層
2　造成土
3　灰褐色土(瓦礫含む)
4　コンクリート
5　明橙色砂礫(マサ土・グリ石)
6　漆喰層
7　暗茶褐色土(瓦礫含む)
8　暗灰褐色土
9　暗灰褐色土
10　暗茶褐色土
11　暗灰褐色土(瓦礫含む)
12　黒灰色土
13　暗灰褐色土
14　灰褐色土
15　灰褐色土
16　灰褐色土(瓦礫含む)
17　暗灰褐色粘質土
18　暗灰褐色土
19　暗灰褐色土(礫含む・整地土Ⅰ)
20　灰褐色粘質土(礫含む・整地土Ⅰ)
21　暗灰色粘土
22　暗灰褐色土(焼土粒含む・整地土Ⅰ)
23　灰褐色土(礫含む)
24　暗灰色粘質土(黄褐色粘土含む)
25　暗茶褐色粘質土整地土Ⅲ
26　淡灰褐色粘質土
27　茶褐色粘質土
28　暗茶褐色粘質土(土器片多く含む)
29　暗灰色粘質土(土器片多く含む)
30　淡灰褐色粘質土
31　暗灰褐色土
32　暗灰色粘質土(整地土Ⅲ)
33　暗灰色土(整地土Ⅲ)
34　茶褐色砂質土
35　暗灰色粘質土(土器片・礫多く含む)
36　暗灰色土
37　灰褐色土
38　暗青灰色土(整地土Ⅲ)
39　暗灰褐色粘質土
40　暗茶褐色粘質土(整地土Ⅳ)
41　暗灰色粘質土
42　暗茶褐色粘質土
43　淡灰褐色粘質土
44　淡灰褐色粘質土(明青灰色粘土含む)
45　灰褐色粘質土(明青灰色粘土含む)
46　暗灰色粘質土
47　灰褐色土(整地土Ⅴ)
48　灰褐色土(整地土Ⅵ)
49　明橙色粘土

ＨＪ第559次調査　発掘区南壁土層図（1/50）

## ＨＪ第559次調査　検出遺構一覧表１

| 遺構番号 | 棟方向 | 規模（桁行×梁間） | 桁行全長 m | 梁行全長 m | 桁行柱間寸法 m | 梁行柱間寸法 m | 廂の出 m | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SB201 | 東西 | 2以上×2 | 3.6以上 | 3.9 | 1.8等間 | 1.95等間 | | |
| SB202 | 東西 | 3以上×2 | 5.65以上 | 3.6 | 2.05-2.05-1.65 | 1.8等間 | | |
| SB203 | 東西 | 3以上×2 | 6.3以上 | 3.6 | 2.1等間 | 1.8等間 | | |
| SB204 | 南北？ | 3×1以上 | 4.5 | | 1.5等間 | | | |
| SB205 | 東西 | 3×3 | 6.3 | 6.45 | 2.1等間 | 2.1等間 | 2.25 | 南廂付。 |
| SB206 | 南北 | 4×2 | 8.4 | 3.0 | 2.1等間 | 1.5等間 | | |
| SB207 | 南北 | 4以上×3 | 5.4以上 | 4.8 | 1.8等間 | 1.5等間 | 1.8 | 西廂付。 |
| SB208 | 東西？ | 3以上×2以上 | 4.2以上 | 3.0以上 | 2.1等間 | 3.0 | | |
| SB209 | 南北？ | 2以上×2 | 2.15以上 | 4.3 | 2.15 | 2.15等間 | | 掘形底に礎石、11世紀末以降。 |
| SB210 | 東西 | 5以上×2 | 8.6以上 | 3.6 | 2.15等間 | 1.8等間 | | 掘形底に礎石、11世紀末以降。 |

| 遺構番号 | 掘形 平面形 | 掘形 平面規模（m） | 掘形 深さ（m） | 枠 平面形・構造 | 枠 内法（m） | 年代 | 主要出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SD105 | 東西方向 | 幅0.7～1.0、長さ16以上 | 0.3～0.4 | | | 12世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SD106 | 北西～南方向 | 幅0.9、長さ6.5以上 | 0.2 | | | 14世紀後半～ | 土師器皿 | やや湾曲する溝。 |
| SE501 | 円形 | 径0.9 | 0.8 | | | 11世紀中頃 | 土師器皿、黒色土器B類椀 | |
| SE502 | 隅丸方形 | 一辺2.1 | 4.8以上 | 上段　方形縦板組 横桟留<br>下段　方形縦板組 横桟留 | 上段　一辺 1.2<br>下段　一辺 1.25 | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿・羽釜、黒色土器A・B類椀、瓦器椀、須恵器鉢、白色土器皿、白磁碗・皿、木偶 | 上から約0.6 m分の井戸枠は抜き取られる。上段は約0.55 m分残り、縦板は様々な大きさの板を雑に使用。下段は約2.7 m分残り、縦板は各辺11枚で外側に薄板をあてがう。下段の横桟間には四隅に支柱がある。土師器皿が大量に出土。 |
| SE503 | 隅丸方形 | 東西0.7以上×南北1.6 | 1.1以上 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SE504 | 隅丸方形 | 東西1.65×南北0.9以上 | 1.1以上 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SE505 | 円形 | 東西2.4×南北2.2以上 | 3.7以上 | 円形縦板組 | 径1.1 | 14世紀後半～15世紀前半 | 土師器皿 | 上から約1.0 m分の井戸枠は抜き取られる。縦板は全部で13枚、太枘で組み外側をタガ絞める。 |
| SE506 | 隅丸方形 | 東西2.2以上×南北2.9 | 4.9以上 | 上段　八角形横板組<br>下段　円形縦板組 | 上段　一辺 0.36～0.4<br>下段　径0.95 | 14世紀後半～15世紀前半 | 土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、須恵器鉢・甕、国産陶器（常滑窯甕）、丸瓦、平瓦 | 上から約0.65 m分の井戸枠は抜き取られる。上段は約1.2 m分残り、横板は5段分残る。下段は約3.0 m分残り、縦板は全部で11枚、太枘で組み外側をタガと楔で絞める。さらに外側を割れた同様の縦板の廃材で囲う。 |
| SE507 | 円形 | 東西0.8以上×南北1.9 | 1.2以上 | | | 14世紀後半～15世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK601 | 隅丸長方形 | 東西3.8×南北1.4 | 0.1 | | | 8世紀中頃～？ | | |
| SK602 | 隅丸長方形 | 東西3.7以上×南北1.3 | 0.1 | | | 8世紀中頃～？ | | |
| SK603 | 楕円形 | 東西1.05×南北1.25 | 1.4 | | | 8世紀中頃～？ | | |
| SK604 | 不整楕円形 | 東西1.1以上×南北2.1 | 0.1 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK605 | 不整円形 | 東西1.5×南北1.5 | 0.35 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、東播系須恵器鉢 | 土師器皿が大量に出土。 |
| SK606 | 不整楕円形 | 東西1.9×南北1.5 | 0.5 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK607 | 不整楕円形 | 東西2.2×南北2.4 | 0.4 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK608 | 不整楕円形 | 東西1.4×南北2.1以上 | 0.35 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK609 | 楕円形 | 東西3.0×南北3.5 | 0.7 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿・羽釜 | 土師器皿が完形で大量に出土。 |
| SK610 | 楕円形 | 東西1.8×南北2.0 | 0.6 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | 土師器皿が完形で大量に出土。 |
| SK611 | 楕円形 | 東西2.0×南北2.1 | 0.5 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | 土師器皿が完形で大量に出土。 |
| SK612 | 楕円形 | 東西2.5×南北1.9 | 0.4 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | 土師器皿が大量に出土。 |
| SK613 | 不整楕円形 | 東西2.8以上×南北4.0 | 0.6 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | 土師器皿が大量に出土。 |
| SK614 | 不整楕円形 | 東西2.7×南北3.5 | 0.4 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK615 | 不整楕円形 | 東西1.9×南北2.2 | 0.5 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | 土師器皿が完形で大量に出土。 |
| SK616 | 不整円形 | 東西2.1×南北2.2 | 0.5 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK617 | 隅丸長方形 | 東西2.7以上×南北3.1 | 0.4 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK618 | 楕円形 | 東西2.3×南北4.0 | 0.7 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿・羽釜、瓦器椀、白磁碗・皿、木製箸 | 土師器皿と木製箸が完形で大量に出土。 |
| SK619 | 不整方形 | 東西2.6×南北1.8以上 | 0.2 | | | 11世紀末～12世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK620 | 不整方形 | 東西6.5×南北5.5 | 0.3 | | | 12世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK621 | 不整形 | 東西3.0×南北2.5 | 0.2 | | | 12世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK622 | 不整楕円形 | 東西0.8以上×南北1.3 | 0.4 | | | 12世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK623 | 楕円形 | 東西1.2×南北1.1 | 0.7 | | | 12世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK624 | 楕円形 | 東西0.7×南北1.3 | 0.3 | | | 12世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK625 | 不整楕円形 | 東西2.0×南北3.3 | 0.2 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | 土師器皿が大量に出土。 |
| SK626 | 隅丸方形 | 東西1.1×南北1.0 | 0.3 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿・羽釜 | |
| SK627 | 隅丸長方形 | 東西3.6×南北1.0 | 0.3 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK628 | 隅丸方形 | 東西1.0×南北1.1 | 0.4 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK629 | 隅丸長方形 | 東西3.0×南北1.8 | 0.55 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK630 | 不整長方形 | 東西1.4×南北2.4以上 | 0.3 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK631 | 楕円形 | 東西1.5×南北1.3 | 0.5 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK632 | 隅丸方形？ | 東西1.1×南北0.7以上 | 0.25 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK633 | 隅丸方形 | 東西2.0×南北2.1 | 0.4 | | | 13世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SK634 | 楕円形 | 東西1.4以上×南北3.9 | 0.25 | | | 13世紀中頃 | 土師器皿 | |
| SK635 | 不整楕円形 | 東西1.9×南北2.6 | 0.5 | | | 13世紀中頃～後半 | 土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器浅鉢、東播系須恵器鉢、東海系陶器甕、白磁皿 | 土師器皿・羽釜、瓦器椀が完形で大量に出土。 |
| SK636 | 楕円形 | 東西2.5×南北1.8 | 0.45 | | | 13世紀中頃～後半 | 土師器皿、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、 | 土師器皿、瓦器椀が完形で大量に出土。 |
| SK637 | 不整長方形 | 東西2.3×南北1.8 | 0.5 | | | 13世紀末 | 土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器浅鉢、東播系須恵器甕、国産陶器（常滑窯甕・鉢）、白磁碗・皿・壺、青磁碗 | |
| SK638 | 隅丸長方形 | 東西3.4×南北1.9 | 0.4 | | | 13世紀末 | 土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、東播系須恵器甕、国産陶器（常滑窯甕・鉢） | 土師器皿が完形で大量に出土。 |
| SK639 | 隅丸方形 | 一辺0.4 | 0.3 | | | 13世紀末 | 土師器皿 | 土師器皿が完形で大量に出土。 |
| SK640 | 隅丸方形 | 東西1.5以上×南北1.8 | 0.1 | | | 14世紀後半～15世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK641 | 不整円形 | 東西1.4以上×南北1.8 | 0.25 | | | 14世紀後半～15世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK642 | 円形 | 径1.7 | 0.45 | | | 14世紀後半～15世紀前半 | 土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・浅鉢・蓋、東播系須恵器甕、国産陶器（常滑窯甕、瀬戸窯卸皿） | 土師器皿が完形で大量に出土。 |
| SK643 | 不整楕円形 | 東西1.3×南北1.4以上 | 0.47 | | | 14世紀後半～15世紀前半 | 土師器皿 | |
| SK644 | 隅丸方形 | 東西1.7×南北1.4 | 0.55 | | | 16世紀前半～中頃 | 土師器皿 | |
| SX801 | 楕円形 | 東西0.5×南北0.3 | 0.08 | | | 8世紀中頃～後半 | 土師器杯A・皿A、和同開珎2点 | 土師器杯Aに皿Aで蓋をして埋納、銅銭は蓋上と掘形出土。 |
| SX802 | 隅丸長方形 | 東西0.55×南北0.4 | 0.1 | | | 8世紀中頃～後半 | 土師器杯A・蓋 | 土師器杯Aに蓋をして埋納。 |
| SX803 | 円形 | 径0.4 | 0.05 | | | 8世紀中頃～後半 | 土師器杯A | 土師器杯Aを伏せて埋納。 |
| SX804 | 円形 | 径0.35 | 0.05 | | | 8世紀中頃～後半 | 土師器杯A | 土師器杯Aを伏せて埋納。 |
| SX805 | 円形 | 径0.35 | 0.1 | | | 12世紀 | 土師器皿・羽釜 | 土師器小皿を6枚中に入れた土師器羽釜を埋納。 |
| SX806 | 円形 | 径1.0 | 0.2 | 円形瓦積 | 径0.3 | 14世紀後半～ | | 平瓦と瓦質土器の破片を積み上げる。 |

至る。整地土Ⅰ・Ⅲは発掘区全域に存在するが、整地土Ⅱは発掘区北端部分にしか存在せず、その他の整地土も部分的に途切れたりして一様でない。また各整地土は部分的にさらに細分できるが、個々の時期の比定は困難である。発掘区南壁部分の層序は、上から近代の造成土（土層図1～16・23）、整地土Ⅰ（19・20・22）、整地土Ⅲ（25・32・33・38）、整地土Ⅳ（40）、整地土Ⅴ（47）、整地土Ⅵ（48）となる。地山上面の標高は81.5～81.9 mで、発掘区中央の東端が最も高く、南西隅が最も低い。

遺構検出は、整地土Ⅲ上面（上層）で14世紀後半以降の遺構を、整地土Ⅵ上面（下層）で8世紀以降の遺構の検出を目的に行った。しかし整地土Ⅲ上面では目的とする遺構の一部が検出困難で、結果的に整地土Ⅵ上面で確認したものがある。したがって下層の平面図には本来なら上層に含まれる遺構がいくらか存在する。各遺構の時期の詳細は遺構一覧表に記す。また8世紀の遺構も整地土Ⅵ上面では一部検出困難で、整地土を除去して再確認した。

## Ⅲ　検出遺構

遺構には、柱穴、土坑、井戸、石組遺構、埋桶遺構、土器埋納遺構があり、合計約1200基ある。現在出土遺物の整理中であり、おおよその時期が判明している主要なものについて報告する。

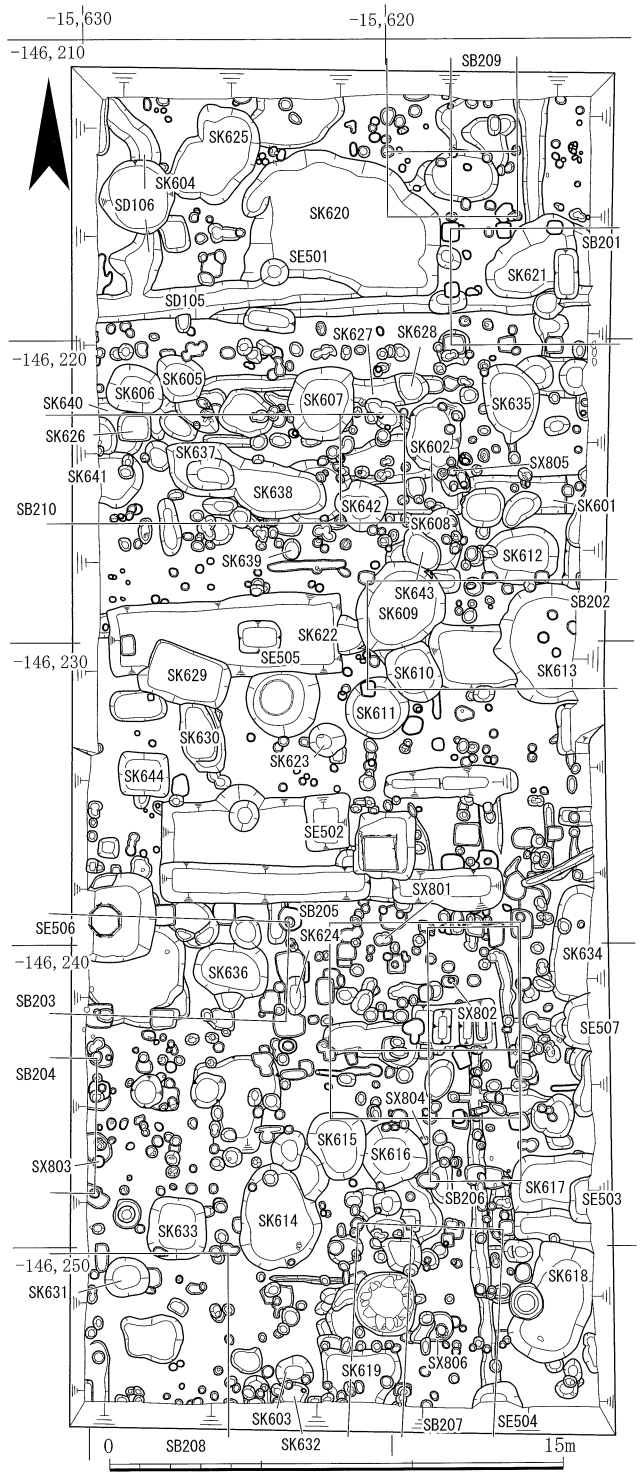
**奈良時代の遺構**　掘立柱建物8棟（SB201～208）、土坑3基（SK601～603）、土器埋納遺構4基（SX801～804）がある。多くは整地土Ⅵ上面から掘り込まれる。

掘立柱建物は、全容の判明するものが少ないが、柱穴規模からみて中小規模のものと考えられる。また重複するもの（SB205・206）があり、2時期以上の変遷がある。

土器埋納遺構SX801は、土師器ⅢAで蓋をした土師器杯Aで、和同開珎が蓋上と杯の外側から出土した。SX802は、土師器蓋で蓋をした土師器杯Aである。SX803・804はいずれも土師器杯Aを伏せて埋納する。いずれの埋納遺構も杯内に内容物はなかった。

**平安時代の遺構**　井戸2基（SE501・502）、土坑多数（SK604～624他）、柱穴多数がある。11世紀中頃の井戸SE501が最も古く、それ以前の遺構・遺物はほとんどない。11世紀末～12世紀初頭には、遺構・遺物量が一気に増加する。特に土師器を大量に廃棄する土坑が多く、遺物の総出土量に占める割合は、江戸時代に次いで多い。

井戸SE502は、上下2段の井戸枠で構成され、上下とも方形縦板組横桟留の構造である。下段の縦板は各辺11枚で、さらにその外側に薄板をあてがう。上下横桟間の四隅には支柱がある。上段は各辺大小さまざまな幅の縦板を雑に並べる。上半は抜き取られ、横桟は1段分のみ残り、支柱の有無は不明。枠内・抜き取り痕から多量の土師器皿が出土した。




ＨＪ第559次調査　発掘区下層平面図（1/250）

土坑SK604～619は、11世紀末～12世紀初頭のもので、出土量に多少の差はあるものの、いずれも土師器皿が完形で出土する。平面形はおおむね楕円形で規模は大小あり、壁面はほぼ垂直になっているものが多い。

SK609は深さ約0.7 mあり、土師器皿は底近くからま

発掘区全景　北半部下層（南西から）

発掘区全景　南半部下層（西から）

とまって出土する。土器は一部重なって出土するが、据え置かれたものではない。茶褐色系または暗灰褐色系の数層の土で埋まり、上から0.1 m下の所で地山の暗黄褐色粘土が厚さ約0.05 mの薄い層となって堆積する。SK610・611・613でも同様な堆積状況が見られ、いずれも土器は底近くからまとまって出土する。

一方、SK618は数層の暗茶褐色系の土で埋まり、各層から多量の土師器皿が出土する。また底から約0.2 mの暗茶褐色腐植土層からは多量の箸が出土する。

土坑SK620～624・溝SD105は12世紀前半～中頃のもので、土器の出土総量は前代に比べやや減るが、土器の大量廃棄は続く。

この時期の重要な遺構としては、発掘区北側のSD105とSK620がある。発掘区内は、東西方向の溝SD105を境にして北側が約0.3 m低くなる。南側に分布する整地土Vが、SD105の北側には分布しないことから、この部分は全体的に地下げが行われ、SD105はこの地下げ部分の南端を画する溝と考えられる。またSK620は、SD105と重複関係がなく同時期に埋まる土坑で、SD105を越えて南側に広がらない。このことから、SK620が地下げ以後の遺構で、SD105を境とした区画に規制されて掘削されたといえよう。両遺構からは12世紀前半～中頃の土器が出土しており、地下げの時期はそれ以前であることがわかる。またSD105の南側には東西方向に小柱穴が並び、溝に沿って掘立柱塀または掘立柱建物があることが見てとれる。これら小柱穴内からも12世紀前半頃の土器が出土している。以上のことから、12世紀前半頃にはSD105を境とした南北2つの区画が想定され、南北両区画にまたがる遺構がないことは、両区画にある程度の独立性があることをうかがわせる。なお奈良時代の掘立柱建物SB201がこの区画をまたいで存在するが、SB201は整地土・上面から掘り込まれる地下げ以前の遺構であり、逆に区画がこの時期まで遡らないことが言えよう。

小柱穴は、径約0.3 mのものが多数あるが、建物としてまとめられるものはわずかで、多くは時期も不明である。発掘区北半部のSB209・210は柱穴底に礎石があり、建物の認識は容易である。SB210の南側柱近くには、南北方向に並ぶ柱列が数条あり、同じ場所で数度の建て替えがあったことが推定される。

**鎌倉時代の遺構**　井戸2基（SE503・504）、土坑多数（SK625～639他）、柱穴多数がある。13世紀のものが多い反面14世紀前半のものはほとんど見あたらない。

井戸は2基とも発掘区の東と南端で確認したもので、深さ約1.1 mまでしか掘削できなかった。いずれも井戸枠は確認していない。

土坑には平安時代から引き続き大量の土器が廃棄されており、土坑の規模はやや小さめで、浅いものが多い。出土土器の主体は土師器皿であるが、瓦器椀の出土比率が前代に比べやや高めである。SK636は、暗灰褐色土とともに多量の土器で埋まる。土器は完形のものが多く、

井戸 SE502（北西から）

土坑 SK620・溝 SD105（東から）

一部重なり合うものがあるが、表裏さまざまな方向を向いて出土する。埋土は暗灰褐色土のほぼ単一層で、上から底まで土器がぎっしりと詰まる。土器は遺物整理箱46箱分出土した。SK635も完形の土器を多量に廃棄し、埋土はほぼ単一層で同様な埋まり方をする。土器は遺物整理箱6箱分出土した。

**室町時代の遺構**　井戸3基（SE505～507）、土坑多数（SK624～644他）、石組遺構5基（SX807～812）、瓦積遺構1基(SX806)柱穴多数がある。先述したように、この時期の遺構面は整地土・上面であるが、遺構検出が難しく石組遺構5基以外はすべて整地土VI上面で検出した。14世紀末～15世紀前半のもの、16世紀中頃のものが目立つ。

井戸はSE507の他は井戸枠が残存し、特にSE506の井戸枠は特異な構造のため詳述する。

SE506は、遺構検出面から深さ4.9 m以上、本来の遺構面からは深さ5.3 m以上ある。井戸底の調査は崩壊の危険があるため重機による掘削にとどめ、人力による精査は出来なかった。井戸枠は上下2段の構成で、上段が平面八角形の横板組、下段が平面円形の縦板組である。上段と下段は八角形の土台を間に介して組み合う。上段は上約0.65 m分が抜き取られている。

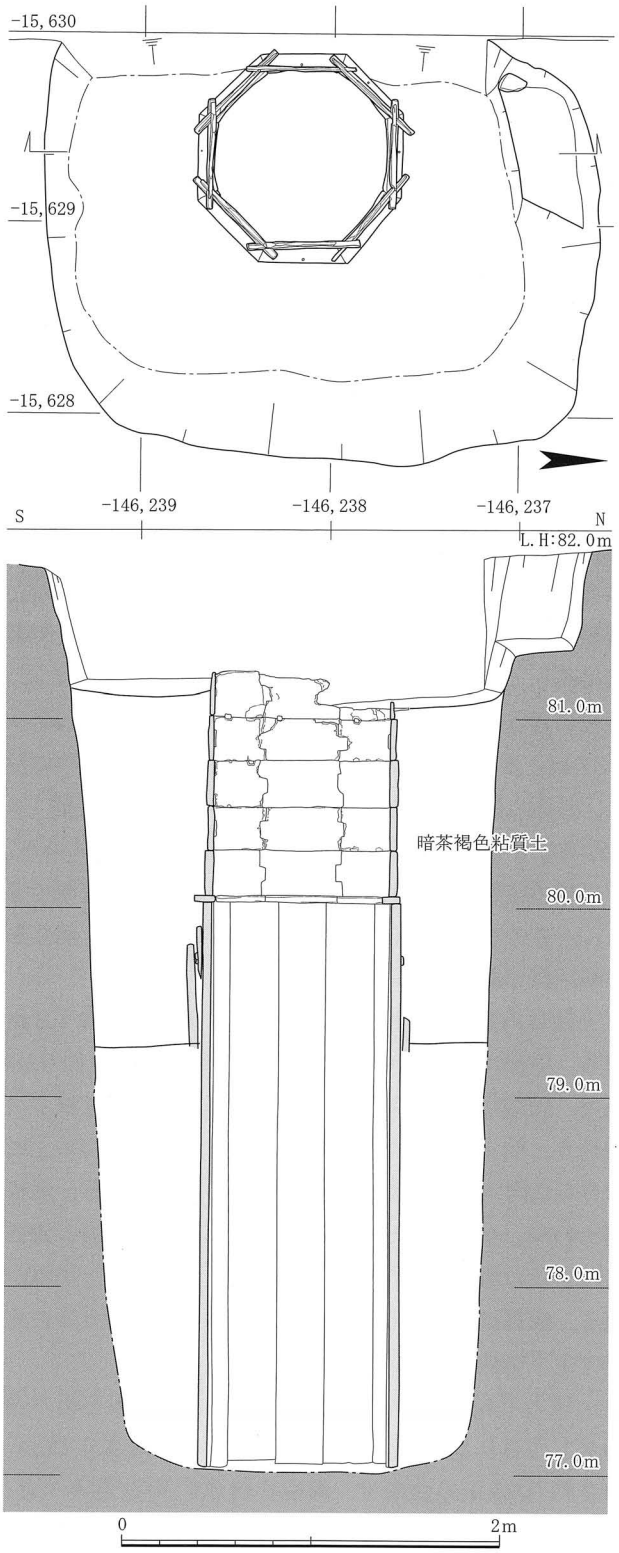
下段は内法径約0.95 m、深さ3.0 mで、縦板は全部で11枚あり、側面の6カ所の太枘で組み合わせる。さらに上から約0.3 m下の所で外側にタガを廻し楔で締め付ける。崩落の危険のためこれより下の精査ができなかったので、以下のタガの有無は不明。しかしながら、縦板の外面にタガの痕跡と考えられる黒ずんだ部分が帯状に残り、中央部にもう1つタガがあったと推定される。縦板は長さ約3.0 m、厚さ約0.04 mで、幅は約0.17～0.37 mとまちまちである。内面を平滑に仕上げるのに対し、外面には手斧痕跡が明瞭に残る。縦板組の外側には大小さまざまな縦板をあてがう。この縦板を接合すると、井戸枠の縦板とほぼ同規模・同様のものが数点復原できる。一方の小口部分に受けのような段差があり、何らかの転用材であろう。

上段は内法の一辺が約0.36～0.4 m、深さ約1.2 mある。横板は、幅約0.24 m、長さ0.6 m、厚さ約0.04 mで、両端に枘を作る板と、枘穴を開けた板が4枚ずつ組合う。枘穴は45°の角度で穿たれ、内面の枘穴の上にはさらに同角度で横板1枚分の深さの溝が彫られ、横板同士の接合を密着させる工夫が行われている。横板側面には、この溝を彫るために45°の角度で引かれた墨線が残る。横板は5段分が残存しており、側面の2カ所の太枘で上下を結合する。

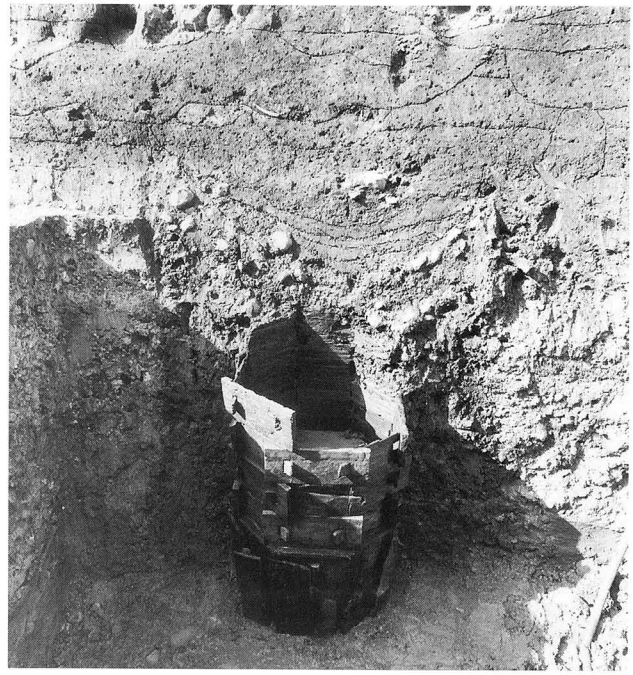
上段と下段の間の八角形の土台は8枚の板を組み合わせて作られる。1枚の板は幅約0.1 m、長さ0.45 m、厚さ約0.03 mの台形で、両端を約63°30′に切り欠き、枘で結合する。土台の内側部分は円弧を描くように削り出す。下段の縦板には上から鉄釘を打ちつけて固定し、

上段の横板とは２つの太枘で固定する。横板と八角形の土台は、いずれも不必要な太枘穴が数カ所あり、転用材と考えられる。土器は遺物整理箱７箱分出土した。

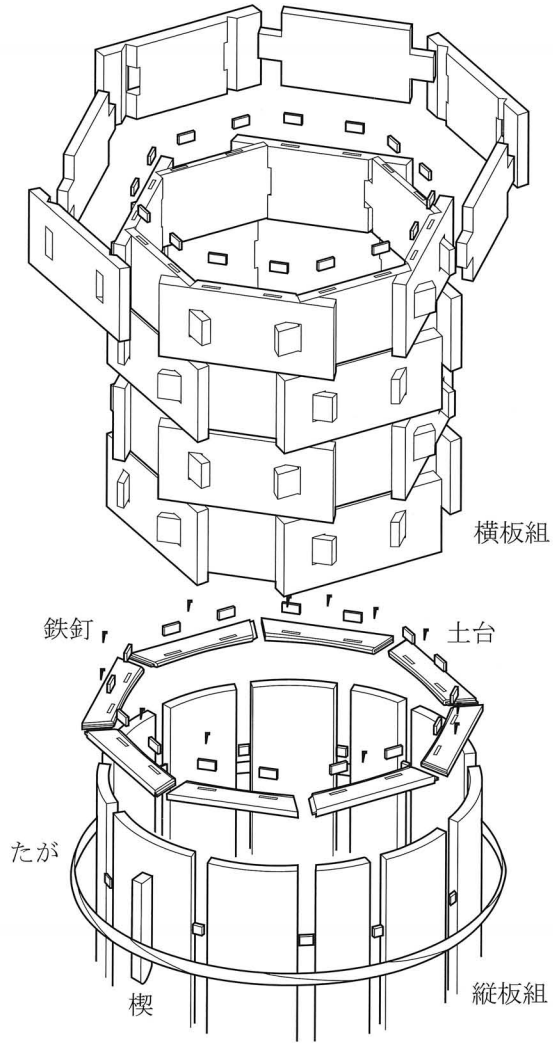
SE505は深さ3.7 m以上あり、SE506と同様の理由から井戸底は人力による精査ができなかった。井戸枠は平面円形の縦板組で、内法径約1.1 m、深さ2.7 mあり、




井戸SE506平面図・立面図（1/40）



井戸SE506（東から）




井戸SE506井戸枠模式図